北海道立青少年体験活動支援施設（ネイパル）における

子どもたちの新たな課題に対応する体験活動プログラム集

令和元年度（2019年度）パイロットプログラム等報告書

北海道教育委員会

発刊にあたって

都市化や少子化、電子メディアの普及、地域のつながりの希薄化といった社会の変化の中で、これまで身近にあった遊びの場や「本物」を見る機会などが減少するとともに、子どもたちが地域において、様々な自然体験・社会体験を日常的に積み重ね成長する機会が少なくなっていることが、各種答申や報告書等で指摘されています。

国立青少年教育振興機構の調査によると、生活体験や自然体験等が豊富な子どもほど、自己肯定感や道徳観、正義感が高くなる傾向にあることが明らかになっており、自然の中で遊ぶことや家事の手伝いをすることなど、成長段階の早期に、実際に本物に触れて肌で感じることができる直接体験を充実させることが、人格の形成にとって極めて重要であることを再認識させられます。

こうした中、道教委においては、体験活動の推進を豊かな人間性を育むための施策の重点に掲げ、体験活動が人づくりの原点であるとの認識の下、地域における多様な主体との連携や人材の活用等による特色ある体験活動プログラムの普及に取り組んでいるところです。

とりわけ、道内６カ所に設置している道立青少年体験活動支援施設（ネイパル）では、学校や地域、民間団体、市町村の各部署、国立の青少年教育施設等と連携し、地域が有する教育資源を生かしながら、環境保全に向けた行動力やコミュニケーション能力の育成のほか、教育格差の解消や障がい等の困難を抱える児童生徒の支援など、北海道において解決が求められる様々な課題に対応する事業に取り組み、幼少期からの発達段階に応じた新たなプログラムを開発・発信しています。

本報告書には、そうしたネイパルの取組のうち、令和元年度（2019 年度）に全ネイパルで重点的に取り組んだ体験活動プログラム（共通プログラム）、及び、地域の特色を生かして企画・実施した体験活動プログラム（選択プログラム）を掲載しています。本書で紹介する事例や分析等が、各地域における子どもたちの体験活動推進の一助となれば幸いです。

最後に、各ネイパルのプログラム開発のために多大なるお力添えをいただいた講師の皆様をはじめ、事業の運営等に御協力いただいた施設・機関、関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

令和２年（2020 年）11 月

北海道教育庁生涯学習推進局生涯学習課長

目　　次

Ⅰ　パイロットプログラム事業の概要

パイロットプログラム事業について　・・・ 1

Ⅱ　選択事業の実施報告

１　不登校の児童生徒や障がいをもつ子ども等に対する体験プログラム　・・・ 2
【ネイパル砂川】チャレンジキャンプ in Sunagawa　・・・ 3
【ネイパル深川】ネイパル深川 de リフレッシュキャンプ　・・・ 5
【ネイパル北見】チャレンジキャンプ　・・・ 7
【ネイパル厚岸】道東チャレンジキャンプ　・・・ 9
〇本テーマにおけるＩＫＲ調査結果　・・・ 11

２　教育格差の解消に対応した体験プログラム　・・・ 12
【ネイパル 森 】サポートキャンプ　・・・ 13
〇本テーマにおけるＩＫＲ調査結果　・・・ 15

３　望ましい勤労観・職業観を育むプログラム　・・・ 16
【ネイパル砂川】ネイパル de パティシエ　・・・ 17
【ネイパル足寄】ネイパルワーキングキッズ　・・・ 19
【ネイパル厚岸】ジョブマーカー　・・・ 21
〇本テーマにおけるＩＫＲ調査結果　・・・ 23

４　防災意識や災害時に対応する力を高める体験プログラム　・・・ 24
【ネイパル深川】ネイパル防災キャンプ　・・・ 25
【ネイパル 森 】われら防災マスター　・・・ 27
【ネイパル北見】ネイパル de 防災キャンプ　・・・ 29
【ネイパル足寄】ネイパル防災自然塾　・・・ 31
【ネイパル厚岸】ネイパル防災キャンプ　・・・ 33
〇本テーマにおけるＩＫＲ調査結果　・・・ 35

５　環境に対する気付きや環境保全に向けた行動力を高める体験プログラム　・・・ 36
【ネイパル砂川】ネイパルクラブ　・・・ 37
【ネイパル深川】ネイチャーキャンプ　・・・ 39
【ネイパル 森 】われら森レンジャー　・・・ 41
【ネイパル北見】ネイパルこどもエコクラブⅡ　・・・ 43
【ネイパル足寄】とかち森の学校　・・・ 45
【ネイパル厚岸】アースキッズ　・・・ 47
〇本テーマにおけるＩＫＲ調査結果　・・・ 49

６　グローバル社会に対応した子どもたちの育成に関わる体験プログラム　・・・ 50
【ネイパル砂川】ジュニアイングリッシュキャンプ　・・・ 51
【ネイパル深川】家族でグローバルキャンプ♪　・・・ 53
【ネイパル 森 】ジュニアイングリッシュキャンプ　・・・ 55
【ネイパル北見】ジュニアイングリッシュキャンプ　・・・ 57
【ネイパル足寄】ネイパルあしょろ　ジュニアイングリッシュキャンプ　・・・ 59

７　地域の「よさ」（歴史・文化・食・自然環境など）を学ぶ体験プログラム　・・・ 61
【ネイパル砂川】来て見てネイパルさがして北海道　・・・ 62
【ネイパル深川】ふかがわ☆おもしろ発見隊！　・・・ 64
【ネイパル 森 】われら〇〇発見隊　・・・ 66
【ネイパル北見】ネイパル探検隊　・・・ 68
【ネイパル足寄】ふるさと発見隊　・・・ 70
【ネイパル厚岸】アイヌ文化にふれよう　・・・ 72
〇本テーマにおけるＩＫＲ調査結果　・・・ 74

Ⅲ　共通事業の実施報告

１　幼少期の子どもをもつ家庭に対する体験プログラム　・・・ 75
【ネイパル砂川】あっぷるクラブ　・・・ 76
【ネイパル深川】親子のびのびキャンプ　・・・ 78
【ネイパル 森 】われらネイパルファミリー　お泊まり編　・・・ 80
【ネイパル北見】家族ふれあい広場　・・・ 82
【ネイパル足寄】家族ふれあい広場　～ほっかいどうファミリーキャンプinあしょろ～　・・・ 84
【ネイパル厚岸】家族ふれあい広場　・・・ 86
〇本テーマにおけるアンケート結果　・・・ 88

２　地域の青少年リーダー養成に関わる体験プログラム　・・・ 89
【ネイパル砂川】ジュニアリーダーコース　Hokkaido in Sunagawa　・・・ 90
【ネイパル深川】ジュニアリーダーコース　Hokkaido in 深川　・・・ 92
【ネイパル 森 】ジュニアリーダーコース　Hokkaido in 森　・・・ 94
【ネイパル北見】ジュニアリーダーコース　Hokkaido in ネイパル北見　・・・ 96
【ネイパル足寄】ジュニアリーダーコース　Hokkaido in あしょろ　・・・ 98
【ネイパル厚岸】ジュニアリーダーコース　Hokkaido in 厚岸　・・・100
〇本テーマにおけるアンケート結果　・・・102

３　高校生のコミュニケーション能力を高める体験プログラム　・・・103
【ネイパル砂川】高等学校生徒会フォーラム　・・・104
【ネイパル深川】高等学校生徒会フォーラム　in ネイパル深川　・・・106
【ネイパル 森 】高等学校生徒会フォーラム　・・・108
【ネイパル北見】高等学校生徒会フォーラム　・・・110
【ネイパル足寄】高等学校生徒会フォーラム　・・・112
【ネイパル厚岸】高等学校生徒会フォーラム　・・・114
〇本テーマにおけるアンケート結果　・・・116

Ⅳ　プログラム開発の概要

１　理科・科学的要素を取り入れた体験活動プログラム　・・・117
２　「小１プロブレム」に対応するコミュニケーション能力の向上　・・・121

Ⅰ．パイロットプログラム事業の概要

パイロットプログラム事業について

パイロットプログラム事業は、本道の子どもたちを巡る教育課題に対応する先導的な体験活動プログラム（パイロットプログラム）を含む事業であり、原則的に主催事業として実施する。パイロットプログラム事業は選択事業と共通事業の２つに分類される。

１　選択事業

各ネイパルが以下の７つのテーマから５つを選択し、それぞれが持つ地域資源等を生かしながら試行的プログラムの企画・実践を行い、参加者の変容等を検証する事業。（平成 31 年度・令和元年度の取組は下表のとおり）

各施設において次の中から５事業を行う。

No.	テ　ー　マ	砂川	深川	森	北見	足寄	厚岸
1	不登校の児童生徒や障がいをもつ子ども等に対する体験プログラム	○	○		○		○
2	教育格差の解消に対応した体験プログラム			○			
3	望ましい勤労観・職業観を育む体験プログラム	○				○	○
4	防災意識や災害時に対応する力を高める体験プログラム		○	○	○	○	○
5	環境に対する気付きや環境保全に向けた行動力を高める体験プログラム	○	○	○	○	○	○
6	グローバル社会に対応した子どもたちの育成に関わる体験プログラム	○	○	○	○	○	
7	地域の「よさ」(歴史・文化・食・自然環境など)を学ぶ体験プログラム	○	○	○	○	○	○

※ 選択事業における参加者の変容の検証には、国立青少年教育振興機構が推奨する IKR 調査を活用する。調査結果はそれぞれのテーマの実践報告の最後に掲載する。（ただし、6「グローバル社会に～」は除く）

（IKR 調査：自立心、社会性、自己規制、思いやり、生活習慣、環境順応力等に関する質問に６段階で回答することにより、理的社会的能力、徳育的能力、身体的能力の変容を把握し「生きる力」の向上を検証する調査）

２　共通事業

選択事業のうち、継続して一定の成果が検証されたと考えられるものについて、事業を通して開発されたプログラムを活用しながら全てのネイパルで同テーマに取り組み、市町村等へのさらなる普及のために、実践事例を充実・蓄積していく事業。

No.	テ　ー　マ
1	幼少期の子どもをもつ家庭に対する体験プログラム（親子ふれあい広場）
2	地域の青少年リーダー養成に関わる体験プログラム（ジュニアリーダーコース）
3	高校生のコミュニケーション能力を高める体験プログラム（生徒会フォーラム）

※ 普及における参考データとして、参加者の反応を共通アンケートによって把握する。共通アンケートはネイパル深川が作成・集約する（調査結果はそれぞれのテーマの実践報告の最後に掲載）。

Ⅱ．選択事業の実施報告

１ 不登校の児童生徒や障がいをもつ子ども等に対する体験プログラム

（１）プログラム開発の背景

国では、不登校や障がいなどの困難を抱える児童生徒の背景が多様・複雑であることから、学校への支援体制の強化や関係機関との連携協力による支援を進めている。

本道においても、小・中学校における不登校の児童生徒の在籍割合は、全国に比べて低いものの横ばいで推移しており、家庭や関係機関と連携して実態をきめ細かに把握するとともに、児童生徒の自己肯定感を高めるための取組を支援していくこととしている。

このことから、道立青少年体験活動支援施設においても、不登校や障がいなどの困難を抱える児童生徒が、体験活動を通して自身と向き合うことができるプログラムを開発するものである。

（２）道及び道教委の主な関連施策

・北海道総合教育大綱 施策項目４「豊かな心を育む教育やいじめ問題等への取組の充実」

「子どもたちの社会性や豊かな人間性を育み、社会の一員としての自覚を深めさせるため、自然環境や文化・歴史など、地域が有する教育資源を生かした自然体験活動、社会体験活動、文化芸術体験活動、ボランティア学習等を充実します。」

・第３次北海道生涯学習基本構想 視点２ １－（３）「子どもたちの居場所づくりの推進」

「子どもたちの中には、家庭や学校の中で孤独感を抱えたり、情報端末を媒介とした友人との薄いつながりしかつくれないなど、人間関係の形成に課題も見られることから、行政・学校と地域・ＮＰＯ等が連携し、異年齢・異世代とつながる場や心を落ち着けられる居場所づくりに取り組むことが必要です。」

（３）各施設における事業名と主なアクティビティ等

砂川	**チャレンジキャンプ in Sunagawa**	
令和元年 10 月３日（木）～４日（金） （１泊２日）		野外炊飯、星空観察、テント泊体験、 フォトラリーなど
深川	**ネイパル深川 de リフレッシュキャンプ**	
令和２年１月９日（木）～10 日（金） （１泊２日）		旭山動物園見学、ニュースポーツ体験、 創作活動など
北見	**チャレンジキャンプ**	
令和元年９月７日（土）～８日（日） （１泊２日）		火起こし体験、くんせい・マシュマロ作り、 キャンプファイヤー、花火、カヌー体験など
厚岸	**道東チャレンジキャンプ**	
令和元年６月 27 日（木）～７月２日(火) （５泊６日）		水遊び、野外炊飯、テント泊、博物館見学、 登山など

砂川　不登校の児童生徒や障がいをもつ子ども等に対するプログラム

チャレンジキャンプ in Sunagawa

1　事業のねらいと概要

学校生活に悩みを持つ児童・生徒が、生活体験や自然体験等、仲間との交流をとおして自分に向き合い、同時に周囲との関係について学ぶ機会とする。

■ 実 施 日　令和元年 10 月３日（木）～４日（金）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学校４年生～中学生
■ 参加実績　21 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル砂川
■ 運営協力　札幌国際大学　学生ボランティア：13 名

2　プログラム

	6:30	9:00	10:30	12:00	13:00	14:30	19:00	20:30	21:30	22:00
1日目		出会いのつどい	チャレンジ 棒巻きパン！ ～みんなで交流しながらお昼ご飯を作って食べよう～		チャレンジテント張り ～体育館にテントを張ろう～	チャレンジ野外炊飯 ～薪も火も、自分で作るぞ DIY～		チャレンジナイトウォッチ ～焚き火をしながら星空を見よう～	入浴 自由交流	インドア・テントナイト ～体育館に張ったテントで寝よう～	就寝
2日目	起床、洗面	朝食、テント等後片付け	チャレンジフォトラリー（荒天時プロ）・レクリエーション・もの作り体験		昼食	ふりかえり	別れのつどい				

■ アクティビティの工夫

○　普段の生活に関わる行動をプログラムに取り入れることで参加者同士やボランティアとの距離を縮め、交流が促進されるようにした。

○　プログラムの変更にあたっては自主性を促すためボランティアと参加者が意見を交わす場を設けて自分たちでプログラムを作り上げるよう工夫した。

■ 当日の様子

１日目、午前中に集合した参加者は、昼食となる「棒巻きパンづくり」から活動を始めた。

初めは緊張した様子が見られた参加者とボランティアは会話をしながらパン生地作りを行い、パンを焼く頃にはすっかり打ち解けあって笑顔を見せていた。

午後の活動は、この日の宿泊会場となる体育館にテント設営を行った。参加者の殆どはテント設営の経験がなかったが、ボランティアとも協力して短時間のうちにテントを張り、寝具等を運びこんでいた。

その後の野外炊飯では丸太から薪を切り出したり、舞きり式火おこし器を使って火を作り出したりする等、悪戦苦闘しながらも協力してカレーライスを完成させ、会話を弾ませながら食していた。

２日目は荒天のため当初予定していたプログラムができなくなったが、ボランティアが独自に企画した案を参加者に披露し、参加者と一緒に話し合ってプログラムを実施する等、自主性や積極性を見せていた。

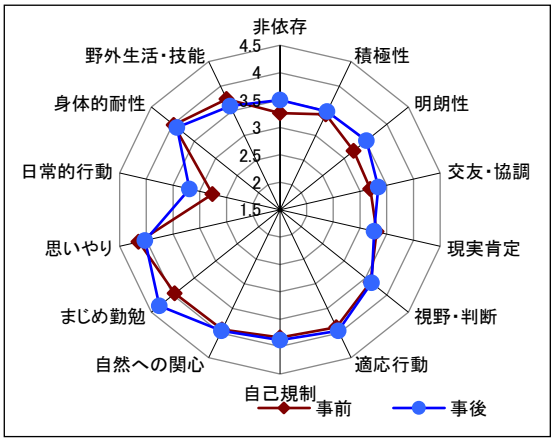
別れのつどいでは別れを惜しんで涙ぐむ参加者やボランティアの姿が見られた。

3　事業評価

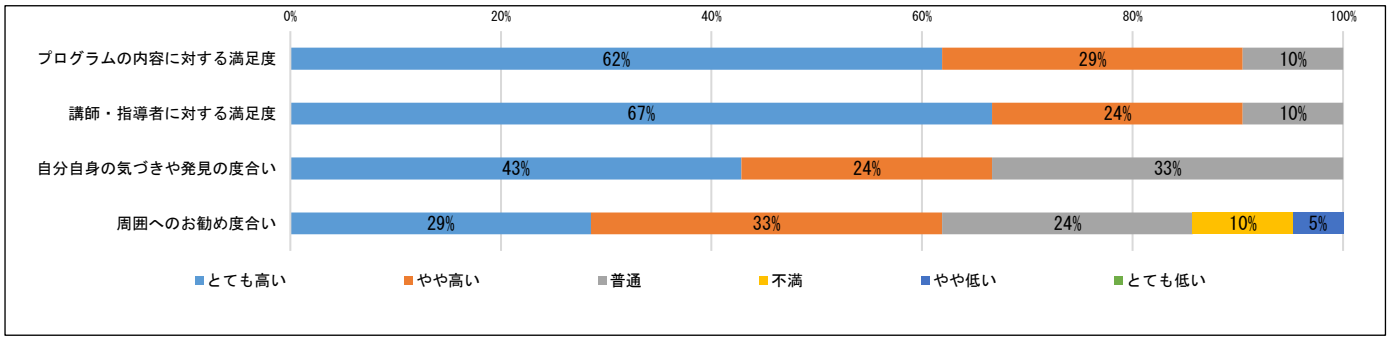
ＩＫＲ調査では、「日常的行動」に 0.4 ポイントの上昇が見られた外、「まじめ勤勉」、「明朗性」で 0.3 ポイント、「非依存」で 0.2 ポイント、「交友・協調」で 0.15%の上昇がみられた。

日常に近い「寝食」に関わる活動を協力して取り組んだことによる効果が現れたものと考える。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



4　まとめ

■　成果

○　各グループにボランティアを配置することにより、参加者同士の交流を、より促進させることができた。また、テント泊等の生活体験や、野外炊飯等の自然体験をとおして周囲との関係を学んだり、気づいたりするきっかけとすることができた。

■　課題

○　「自分自身の気づきや発見の度合い」が 67%にとどまった。１泊２日に変更したことによる影響も考慮し、参加者が自分を見つめる効果をより高めるプログラムの検討が必要である。

深川　不登校の児童生徒や障がいをもつ子ども等に対する体験プログラム

ネイパル深川 de リフレッシュキャンプ

１　事業のねらいと概要

フリースクールや適応指導教室に通う児童・生徒を対象に、体験活動や仲間との交流をとおして、新たな自分のよさに気づかせるとともに、参加者の自己肯定感やコミュニケーション能力を高める。

■ 実 施 日　令和２年１月９日（木）～10 日（金）　（１泊２日）
■ 参加対象　フリースクールや適応指導教室に通う児童・生徒と
■　　引率教員
■ 参加実績　13 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル深川
　　旭山動物園　深川市生きがい文化センター

２　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
１日目			受付	バス移動（札幌～旭川）（昼食）	旭山動物園で リフレッシュ「バックヤード体験」				バス移動（旭川～深川）		夕食	キンボール&フロアカーリング	入浴 自由交流		就寝
２日目	起床	朝食	ドミノにチャレンジ	発掘体験	昼食	ふりかえり	バス移動（深川～札幌）		解散						

■ アクティビティの工夫

○　事前にフリースクールの教員と連携協力しながら、児童生徒が興味や関心をもち、実態に合わせて柔軟に対応することができるアクティビティを選定した。

動物園バックヤード体験の様子

■ 当日の様子

１日目、旭山動物園ではバックヤード見学や園内散策を行った。キリン舎の中に入り、飼育員からのキリンの生態、舎での過ごし方、飼育員の仕事についての説明に熱心に耳を傾けた。冬の旭山動物園を訪れることが初めてという参加者もおり、名物でもある『ペンギンの散歩』『ホッキョクグマ』といった行動展示に感激の様子であった。この日は天候にも恵まれ、閉園時間まで園内散策の時間を設け、満喫した様子であった。

その後、ネイパル深川へと移動し、夕食後にニュースポーツ体験の『フロアカーリング』『キンボール』に挑戦した。チーム内で作戦を練りながら、工夫して試合を楽しんだ。「最後に逆転できて楽しかった」「運動は得意ではないが、これはおもしろいのでまたやってみたい」といった声が聞かれた。

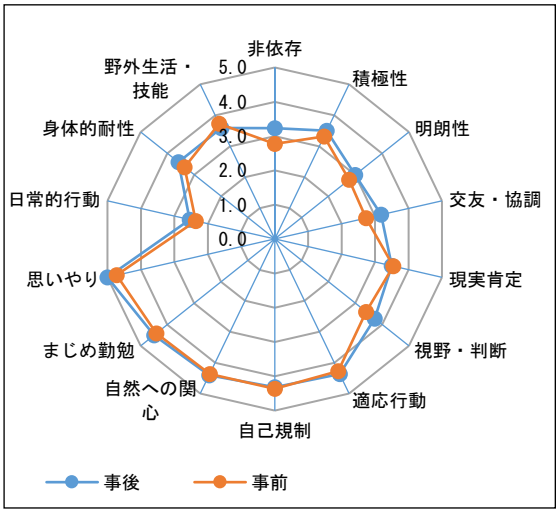
キンボールの様子

２日目は、多目的ホール全面を利用してドミノを行った。限られた時間の中で根気よく色合いや形などを工夫しながらドミノを並べた。並べた量が多いこともあり、ダイナミックに倒れていく様子に歓声があがっていた。

その後、深川市生きがい文化センターに移動して、『発掘体験』を行った。職員の方からの説明を受けた後に石膏から勾玉や鉱石を掘り出す作業に黙々と取り組んでいた。最後に勾玉を使った記念のネックレスやストラップを完成させ、「記念の作品を完成させることが出来てうれしい」との感想が聞かれた。参加者にとって初めての体験も多かったようで、新学期に向けてリフレッシュの機会となった。

ドミノにチャレンジの様子

IKR 調査レーダーチャート



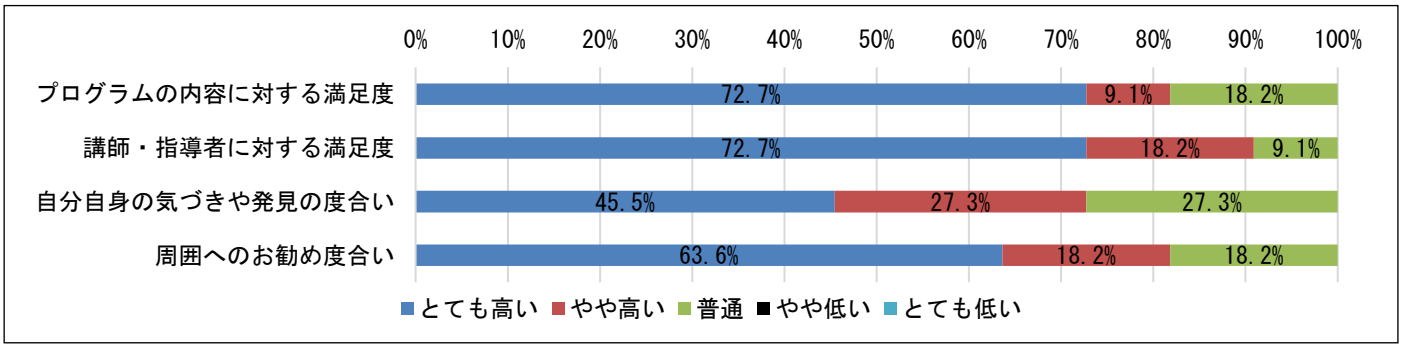
3　事業評価

○　IKR 調査結果によると、「非依存」と「交友・協調」が 0.5 ポイント上昇しており、協力しながら集団で活動したことが要因だと考えられる。

○　ドミノを自分で並べた作品は未完成のまま崩れてしまったが、その作業を黙々としている間はとても楽しく集中することができました。

○　ニュースポーツでは 1 回も勝てなかったが、みんなと楽しくプレイできて楽しかったです。

アンケート結果



4　まとめ

■　成果

○　フロアカーリングやキンボールの活動では、参加者同士や職員との交流が深まり、参加者の満足度も高かった。

○　時間や内容など無理のないプログラムを設定し、参加者の状況に合わせて柔軟に対応することで、担当職員で円滑に運営することができた。

■　課題

○　参加者のコミュニケーション能力や自己肯定感を高めることができるプログラムを意図的に設定するなど内容を改善していく必要がある。

発掘体験の様子

北見　不登校の児童生徒や障がいをもつ子どもに対する体験プログラム

チャレンジ キャンプ

１　事業のねらいと概要

障がいのある児童・生徒が、家庭から離れ、体験活動や宿泊体験、新たな仲間との交流に挑戦することで、経験や対人関係を拡大し、自分もやればできるという意識（自信）を高める機会とする。

■ 実 施 日　令和元年９月７日（土）～８日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　主に支援学級や支援学校に通う小学生～高校生及びその卒業生または、本事業の趣旨を理解し参加交流できる通常学級の児童生徒、参加者の保護者
■ 参加実績　27 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル北見

２　プログラム

	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
１日目					閉会式	大きなドミノにチャレンジ	昼食	休憩 自由	原始火起こしチャレンジ おつまみ作りチャレンジ ・昔の方法で火を付けよう ・ダンボールでくんせいを作ろう ・焼きマシュマロを食べよう				夕食	キャンプファイアー 花　火		入浴 自由	就寝
２日目	起床・準備		朝食	カヌーチャレンジ いかだチャレンジ		休憩・自由	昼食	ふりかえり									

■ アクティビティの工夫

○　子どもたちが、自分でできたという成就感を得られるよう、極力大人の力を借りずに取り組めるプログラム展開とした。
○　自閉的な傾向のある子どもも、あらかじめ見通しを持って事業に参加できるよう、施設の写真、担当者の写真、プログラムの展開や時間の経過を写真で示した事前資料を作成し、各家庭に郵送した。

原始火起こしチャレンジの様子

■ 当日の様子

１日目は、ドミノチャレンジから開始した。一人で集中して取り組む参加者、初対面の仲間と協力する参加者、それぞれの自己決定のもと活動に取り組んだ。この活動により緊張感が和らぎ仲間との関係も深まった。

午後は３人１組で原始火起こしに取り組んだ。チームワークを生かして、ひもを押さえる者、棒を押さえる者、それぞれが役割を果たして火を起こした。次にダンボールにカッターで切り込みを入れてダンボールオーブンを作った。オーブンの棚にチーズやベーコンとソーセージを入れ、自分たちでおこした火を使ってスモークブロックに着火して燻製作りを行った。自分たちの力でつくった燻製は

燻製チャレンジの様子

特に美味しく、談笑しながら食べる姿が見られた。

夜は、自分たちで木材を運びキャンプファイアーを行った。活動の中で、花火も行い、参加者同士の交流を深めた。

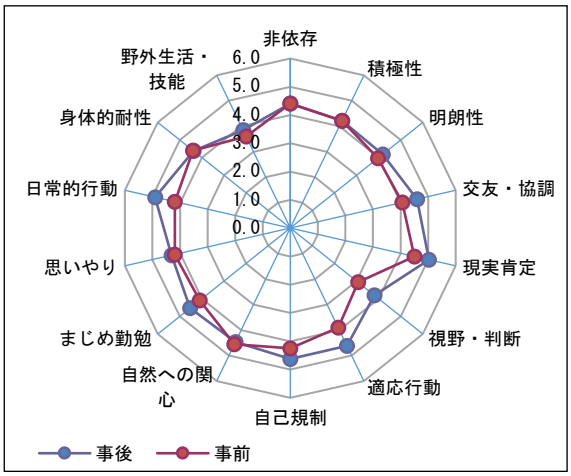
２日目は、ボランティアセミナーの受講生と共に、カヌーやいかだなどに取り組んだ。ボランティアに依存せず、準備から体験、片付けも一緒に取り組み、笑顔で心を通わせていた。

３　事業評価

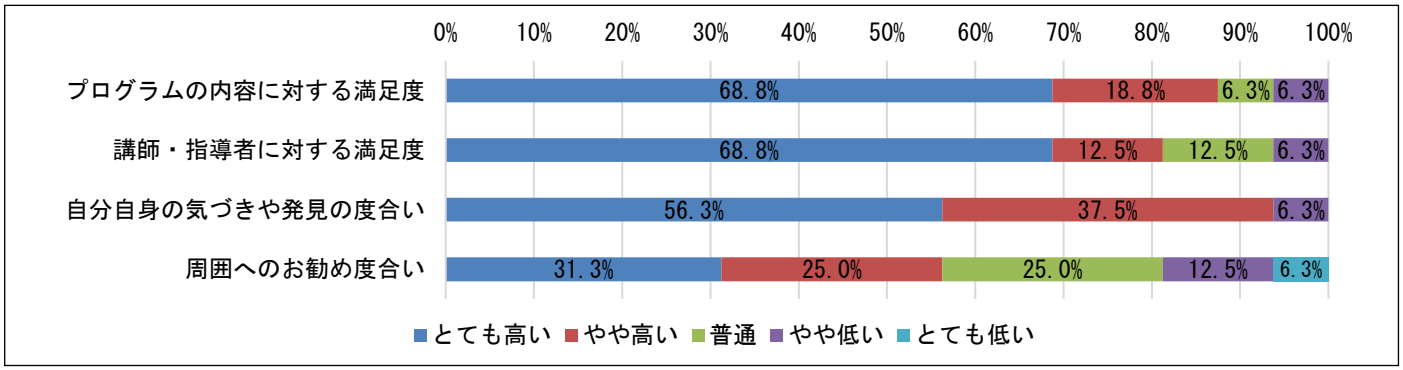
○　IKR 調査結果によると、「視野・判断」が 0.8 ポイント向上し、「適応行動」と「日常的行動」が 0.7 ポイント向上している。体験学習が、障がいのある児童生徒においても、生きる力の伸張に有効であることが読み取れる。

○　参加者からは、「色々な体験ができて、楽しかったです」、「また、やりたいです」などの感想があり、保護者からは、「やればできることを実感した」、「友達作りに頑張る息子を見ることができました」など、好意的な感想が寄せられた。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　障がいのある子どもたちの経験を拡大することで、その場でふさわしい行動が意識できるようになり、自分のすべきことを把握したり、時間を意識した行動をしたりしようとする気持ちが高まった。

■　課題

○　障がいのある子どもの兄弟姉妹については、家族で野外体験する機会が少なくなる傾向がある。そこで、兄弟姉妹の支援も考慮し、参加を可能として取り組んだ。また、今年度は、兄弟姉妹以外の健常児であっても、この事業の趣旨に賛同できる者については、参加可能とした。障がい児の保護者からも、健常児も共に活動する障がい児プログラムに共感を得ることができた。今後もこのコンセプト継続を模索するが、健常児と障がい児の比率が逆転したり、著しく偏ったりしないような工夫が必要となる。

カヌー・いかだチャレンジの様子

厚岸　不登校の児童生徒や障がいをもつ子ども等に対する体験プログラム

道東チャレンジキャンプ

１　事業のねらいと概要

野外における自然体験や冒険体験等をとおして、自分と向き合うとともに、集団生活を通じてよりよい人間関係について学んだり、自分の役割や存在を自覚したりすることを目指す。

■ 実 施 日　令和元年６月 27 日（木）～７月２日（火）（５泊６日）
■ 参加対象　心に悩みを持つ小学５年生～中学生
■ 参加実績　９名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄
■　　十勝エールセンター、
　　足寄動物化石博物館、雌阿寒岳
■ 協　　力　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄

２　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
１日目		集合受付	出発式	移動	昼食		【水遊び】川遊び体験等		移動		夕食	日程確認 入浴	ふりかえり	就寝準備	就寝（宿泊棟）
２日目	活動準備 朝食		自転車練習		昼食		テント張り		【野外炊飯】薪組み、調理、夕食、片付け			入浴	ふりかえり	就寝準備	就寝（ﾃﾝﾄ泊）
３日目	活動準備	【野外炊飯】朝食作り・片付け等		テント撤収			【自転車移動】足寄町内				入浴	ふりかえり		就寝準備	就寝（宿泊棟）
４日目	活動準備 朝食		【化石博物館見学】途中でミニ発掘体験		昼食		【説明】登山について		【買い物】行動食の買い出し		夕食	入浴	ふりかえり	就寝準備	就寝（宿泊棟）
５日目	移動		【雌阿寒岳登山】途中で弁当休憩				移動		休憩		夕食	入浴	ふりかえり	就寝準備	就寝（宿泊棟）
６日目	活動準備 朝食		【移動】足寄町～釧路市立城山小		解散式										

■ アクティビティの工夫

○　１日目の川遊びは、スタッフと参加者のアイスブレイクを兼ねており、安全面に十分配慮した上で、お互いが楽しく交流できる時間とした。

○　自転車練習と移動では、プログラムのメイン活動である雌阿寒岳登山に向けた体づくりを楽しみながらできるよう配慮した。

○　雌阿寒岳登山では、急激に心拍に負荷をかけないよう最初はゆっくりと歩き始め、全員が無理なく山頂を目指すことができるように心がけた。

川遊びの様子

■ 当日の様子

十勝川での「川遊び」体験では、水の冷たさに驚きの声をあげながら、スタンドアップパドルや浮き輪等を使い、ずぶ濡れになりながら大いに楽しんだ。

自転車を使ったアクティビティでは、普段全く乗れない生徒が乗れるようになり、達成感に浸っていた。また、練習後は、上り坂を含む公道を約３キロメール走り、クタクタになりながらもサイクリングを楽しんだ。

雌阿寒岳登山では、登山途中に強い風雨に遭い、寒さと滑りやすい足場の中、多くの生徒が励まし合いながら約３時間かけて登頂した。

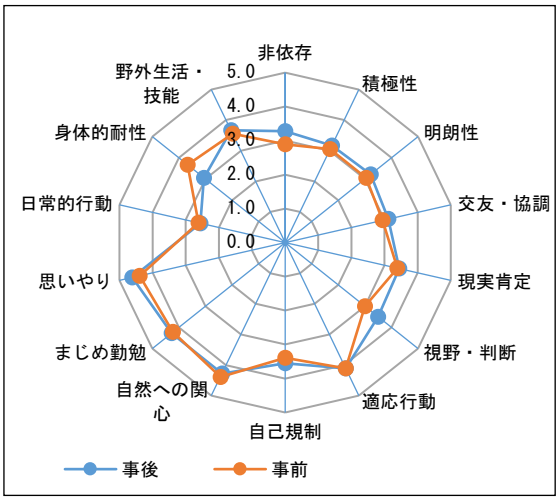
自転車練習の様子

３　事業評価

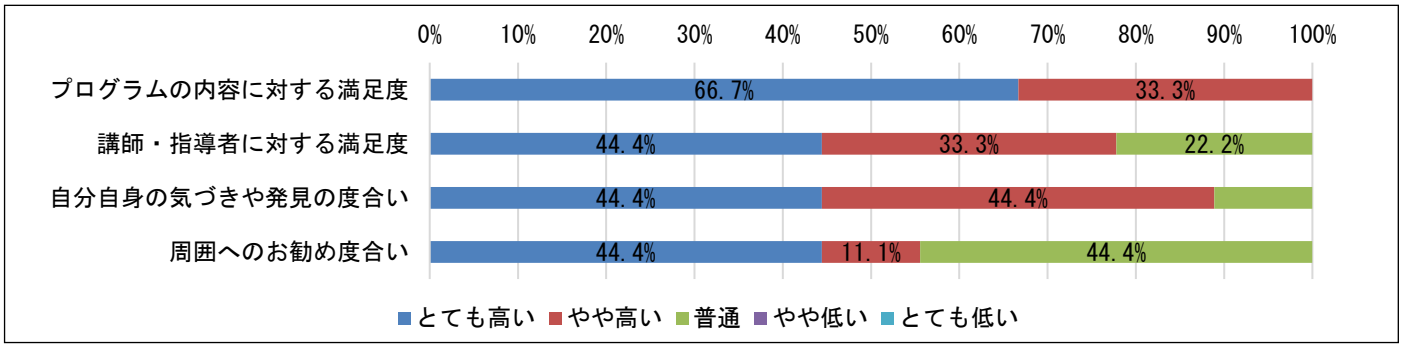
○　IKR 調査結果によると、「小さな失敗を恐れない」等の「非依存」が 0.4 ポイント、「自分で問題点や課題を見つけることができる」等の「視野・判断」が 0.5 ポイント向上し、キャンプ中、仲間と一緒に非日常的な活動に挑戦した成果がみられた。

○　参加者からは、「みんなで楽しく遊んだり、笑ったり、チャレンジすることはとても楽しいことだと思った」「自分が決めた限界は本当の限界ではないということが分かった」との感想が寄せられた。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　アンケート項目の「自分自身の気付きや発見の度合い」が約 88%だったことから、困難と思える体験活動をとおして、多くの参加者が、自分自身と向き合い、新しい可能性を見出すことができたと考える。

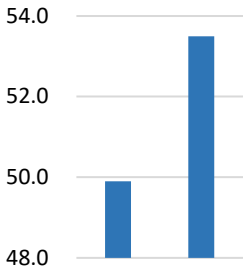
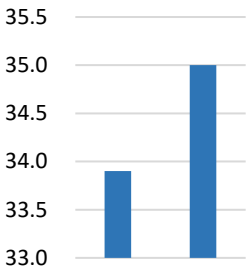
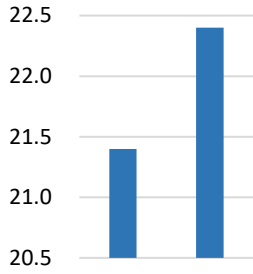
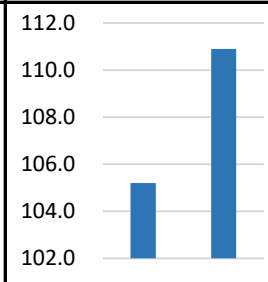
■　課題

○　今回、荒天予報によりテント泊を１日だけにした。天候に左右されず、より良い人間関係について学ぶ体験ができるようプログラムを見直す必要がある。

雌阿寒岳登山の様子

本テーマにおけるIKR調査結果

生きる力の向上　事前　105.2 点 ⟶ 事後　110.9 点　（+ 5.7 点）

	①心理的社会的能力の変容	②徳育的能力の変容	③身体的能力の変容	①～③の合計「生きる力」の変容
質問数・得点範囲	14問（得点範囲14～84点）	8問（得点範囲8～48点）	6問（得点範囲6～36点）	28問（得点範囲28～168点）
全有効回答の総得点の平均値				
数値的推移	事前→事後	事前→事後	事前→事後	事前→事後
	+ 3.6	+ 1.1	+ 1.0	+ 5.7

能力		調査項目	事前	事後	増減
生きる力（総合）			105.2	110.9	5.7
心理的社会的能力			49.9	53.5	3.6
	非依存性	1. いやなことは、いやとはっきり言える	3.6	4.0	0.4
		15. 小さな失敗をおそれない	3.4	3.4	
	積極性	11. 自分からすすんで何でもやる	3.9	3.9	0.2
		25. 前向きに物事を考えられる	3.4	3.6	
	明朗性	5. だれにでも話しかけることができる	3.2	3.6	0.6
		19. 失敗しても立ち直るのがはやい	3.4	3.6	
	交友・協調	7. 多くの人に好かれている	3.0	3.3	0.7
		21. だれとでも仲よくできる	3.7	4.1	
	現実肯定	9. 自分のことが大好きである	3.2	3.3	0.3
		23. だれにでも、あいさつができる	4.3	4.5	
	視野・判断	3. 先を見通して、自分で計画が立てられる	3.1	3.5	0.8
		17. 自分で問題点や課題を見つけることができる	3.6	4.0	
	適応行動	8. 人の話をきちんと聞くことができる	4.4	4.5	0.6
		22. その場でふさわしい行動ができる	3.7	4.2	
徳育的能力			33.9	35.0	1.1
	自己規制	14. 自分かってな、わがままを言わない	4.3	4.3	0.3
		28. お金やモノのむだ使いをしない	4.0	4.3	
	自然への関心	6. 花や風景などの美しいものに感動できる	4.1	4.2	0.0
		20. 季節の変化を感じることができる	4.5	4.4	
	まじめ勤勉	12. いやがらずに、よく働く	3.7	4.1	0.6
		26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりやる	4.6	4.8	
	思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.2	4.5	0.2
		16. 人の心の痛みがわかる	4.5	4.4	
身体的能力			21.4	22.4	1.0
	日常的行動力	13. 早寝早起きである	3.1	3.5	0.9
		27. からだを動かしても、疲れにくい	3.1	3.6	
	身体的耐性	4. 暑さや寒さに、まけない	3.7	3.7	0.2
		18. とても痛いケガをしても、がまんできる	4.1	4.3	
	野外技能・生活	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	3.8	3.9	-0.1
		24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3.6	3.4	

２ 教育格差の解消に対応した体験プログラム

（１）プログラム開発の背景

国民生活基礎調査において、日本の子どもの貧困率が平成 24 年に過去最悪の 16.3%になったことを受け、国は、子どもの将来がその生まれ育った環境に左右されることのないよう、「子どもの貧困対策の推進に関する法律」を平成 25 年に成立させた。

本道においても、平成 27 年に「北海道子どもの貧困対策推進計画」を策定し、児童養護施設等に入所している子どもたちの基礎的な生活能力やコミュニケーション能力、自己肯定感などを育み、社会的に自立することができるよう支援していくこととしている。

このことから、道立青少年体験活動支援施設においても、児童養護施設などの入所者が安全・安心な環境の中で体験活動を楽しむプログラムを開発するものである。

（２）道及び道教委の主な関連施策

・北海道総合教育大綱　施策項目９「生活困窮世帯等の子どもたちへの教育支援」

「子どもたちの将来が、生まれ育った家庭事情等に影響されることのないよう、ＮＰＯやフリースクールなどの関係団体や地域との連携を強化して、放課後や休日、長期休業期間における教育活動を充実するなど、生活困窮世帯やひとり親世帯の子ども、児童養護施設等の入所児童等への教育支援に取り組みます。」

・北海道子どもの貧困対策推進計画「多様な体験活動の機会の提供」

「道立青少年体験活動支援施設において、不登校や障がいなど困難を抱える児童生徒の体験活動を支援します。また、児童養護施設等に入所する子どもの社会性や豊かな人間性の醸成等につながる多様な体験活動の機会を設けることに努めます。」

（３）各施設実施プログラムの概要

森	サポートキャンプ
令和元年９月 15 日（日）～16 日（月）（１泊２日）	カヌー体験、キャンプファイヤー、ウォークラリー、森林散策サイクリングなど

森　教育格差の解消に対応した体験プログラム

サポートキャンプ

１　事業のねらいと概要

自然体験活動や宿泊体験等の中で、仲間とともに感動や達成感を共有し、何事にも積極的にも関わっていこうとする姿勢を育む。

■ 実 施 日　令和元年９月 15 日（日）～16 日（月）　（１泊２日）
■ 参加対象　近隣の児童養護施設に入所または通園している小学生
■ 参加実績　22 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル森
　　大沼
■ 運営協力　児童養護施設黒松内つくし園

２　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
１日目						出会いのつどい		カヌー体験		ﾌｧｲｱ準備	夕食	キャンプファイア		入浴など	就寝
２日目	起床	朝食	準備	森たんけん＆森あそび			昼食	つどい							

■ アクティビティの工夫

○　出会いのつどいは、仲間との協力が必要なゲームを中心に組み立て、コミュニケーションの大切さを認識できるようにした。

○　キャンプファイアの薪は、自分たちで協力しながら、一段一段積み上げて完成させる時間を設けた。

炎を囲んだレクで盛り上がる

■　当日の様子

出会いのつどいでは、参加者同士の協力性を高めるアクティビティを行い、「助け合うこと」を実際に体感しながら、笑いの絶えない楽しい時間となった。

大沼に移動し、大型カヌーを操縦しながら初秋の湖上を満喫した。木々の緑に囲まれた水上で、どの顔も楽しさに満ちあふれ、充実した表情を浮かべていた。

夜は全員で、キャンプファイアを楽しんだ。参加者は、身長の倍以上にもなった炎を見上げ、舞い上がる火の粉を見つめながら、歓喜の声を上げていた。

10 人乗りカヌーで湖上を駆ける

２日目は、林道を散策しながら、自然物を使った様々な遊びを楽しんだ。

参加者は、イタドリの茎で作った笛を鳴らしたり、キツツキの食痕を間近に見つけたりするたびに、想像以上の笛の音量や穴の大きさに驚きの表情を隠せなかった。

その他にも、木のツルで冠を作ったり、低木で弓と矢を作ったりと、いろいろな遊びを楽しんだ。

森の中は、おもしろいことがいっぱい

3　事業評価

○　参加者からは、

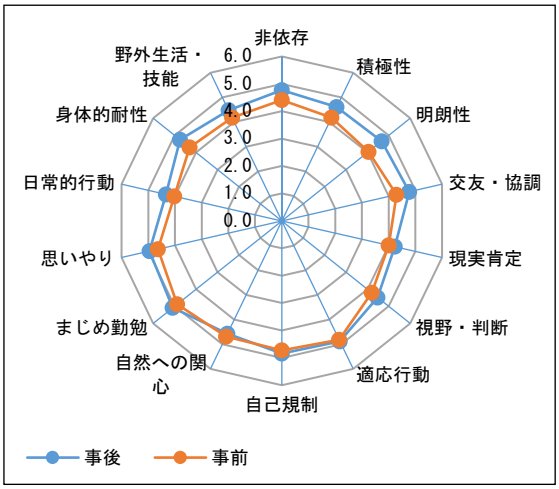
「生まれて初めてキャンプファイアをしたので、とても印象に残った」

「植物で笛がつくれるなんて、驚いた」

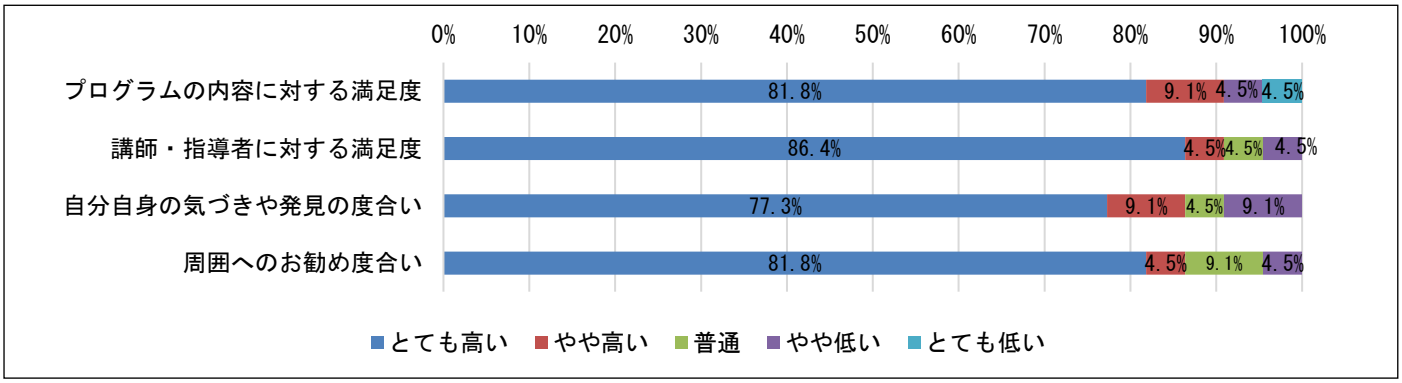
「カヌーを一生懸命こいだので、いろいろな所へ行けて、とても楽しかった」

等、自然の中での活動を大いに満喫した感想が多く聞かれた。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



4　まとめ

■　成果

○　カヌー上の不安定さによる緊張感や恐怖感は、非日常的要素が強く、体験効果は非常に高い。ネイパル森が提供する自然体験活動としては、大変有意義な選択肢であることが改めて立証された。

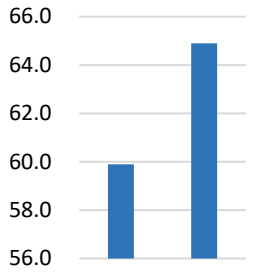
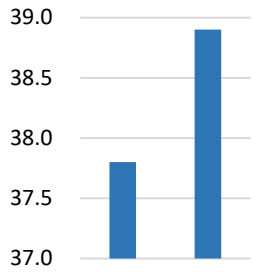
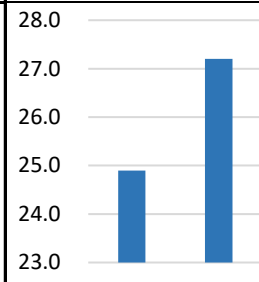
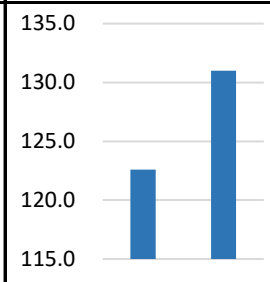
ゲームを通してコミュニケーション

■　課題

○　連携施設の職員と指導方針を事前に共有しておくことが望ましい。ネイパル職員による対応との差異を生じさせないことが肝要である。

本テーマにおけるIKR調査結果

生きる力の向上　事前　122.6 点 ⟶ 事後　131.0 点　（+ 8.4 点）

	①心理的社会的能力の変容	②徳育的能力の変容	③身体的能力の変容	①～③の合計「生きる力」の変容
質問数・得点範囲	14問（得点範囲14～84点）	8問（得点範囲8～48点）	6問（得点範囲6～36点）	28問（得点範囲28～168点）
全有効回答の総得点の平均値				
数値的推移	事前→事後	事前→事後	事前→事後	事前→事後
	+ 5.0	+ 1.1	+ 2.3	+ 8.4

能力		調査項目	事前	事後	増減
生きる力（総合）			122.6	131.0	8.4
心理的社会的能力			59.9	64.9	5.0
	非依存性	1. いやなことは、いやとはっきり言える	4.3	4.8	0.7
		15. 小さな失敗をおそれない	4.5	4.7	
	積極性	11. 自分からすすんで何でもやる	4.7	5.0	0.9
		25. 前向きに物事を考えられる	3.7	4.3	
	明朗性	5. だれにでも話しかけることができる	4.1	4.8	1.2
		19. 失敗しても立ち直るのがはやい	4.0	4.5	
	交友・協調	7. 多くの人に好かれている	3.8	4.3	1.0
		21. だれとでも仲よくできる	4.8	5.3	
	現実肯定	9. 自分のことが大好きである	3.6	3.8	0.4
		23. だれにでも、あいさつができる	4.4	4.6	
	視野・判断	3. 先を見通して、自分で計画が立てられる	4.2	4.4	0.6
		17. 自分で問題点や課題を見つけることができる	4.2	4.6	
	適応行動	8. 人の話をきちんと聞くことができる	5.0	5.0	0.2
		22. その場でふさわしい行動ができる	4.6	4.8	
徳育的能力			37.8	38.9	1.1
	自己規制	14. 自分かってな、わがままを言わない	4.3	4.4	0.3
		28. お金やモノのむだ使いをしない	5.1	5.3	
	自然への関心	6. 花や風景などの美しいものに感動できる	4.5	4.3	-0.3
		20. 季節の変化を感じることができる	4.9	4.8	
	まじめ勤勉	12. いやがらずに、よく働く	4.6	4.9	0.4
		26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりやる	5.2	5.3	
	思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.7	5.1	0.7
		16. 人の心の痛みがわかる	4.5	4.8	
身体的能力			24.9	27.2	2.3
	日常的行動力	13. 早寝早起きである	3.7	4.0	0.7
		27. からだを動かしても、疲れにくい	4.3	4.7	
	身体的耐性	4. 暑さや寒さに、まけない	4.2	4.8	0.9
		18. とても痛いケガをしても、がまんできる	4.4	4.7	
	野外技能・生活	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	4.6	4.8	0.7
		24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3.7	4.2	

３ 望ましい勤労観・職業観を育む体験プログラム

（１）プログラム開発の背景

近年、社会全体に漠然とした閉塞感が広がり、子どもたちが将来に対する夢や希望を持ちにくくなっている状況であることから、国では、社会的・職業的自立のために必要な基盤となる能力や態度を育てるためのキャリア教育を進めている。

本道においても、高等学校卒業者の未就職者数や離職率が全国の状況を上回るなど、勤労観・職業観の未熟さが懸念されることを踏まえ、早期からのキャリア教育を充実させていくこととしている。

このことから、道立青少年体験活動支援施設においても、体験活動を通して子どもたちが望ましい勤労観・職業観を身に付けることができるプログラムを開発するものである。

（２）道及び道教委の主な関連施策

・北海道総合教育大綱　施策項目７「キャリア教育・職業教育の推進」

「子どもたちが、望ましい勤労観・職業観を持って豊かなライフデザインを思い描くことができるよう、大学や専修学校、企業などと連携しながら、幼児期の教育から高等教育までの発達段階に応じた体系的なキャリア教育・職業教育を進めるとともに、保護者と子どもが将来のキャリアや職業について学ぶ機会の提供を充実します。」

・北海道教育推進計画　施策項目６「キャリア教育の充実」

「子どもたちに、将来、社会人・職業人として自立していくことができるよう、職場体験（インターンシップ）などの体験活動を通じて、学ぶことや働くことの意義を理解させるとともに、家庭・地域・企業等の協力を得て、一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てるキャリア教育の充実に努めます。」

（３）各施設実施プログラムの概要

砂川	**ネイパル de パティシエ**
令和元年６月 29 日(土)～30 日（日） （１泊２日）	お菓子作り体験、パティシエによる講話など
足寄	**ネイパルワーキングキッズ**
令和２年２月 22 日（土）～24 日（月） （２泊３日）	牧場見学、道の駅での職業体験、「お仕事ずかん」作りなど
厚岸	**ジョブマーカー**
令和２年２月22日（土）～24日（月） （２泊３日）	町内企業による就業体験の講話、仕事に関するワークショップなど

砂川　望ましい勤労観・職業観を育む体験プログラム

ネイパル　de　パティシエ

1　事業のねらいと概要

施設近郊の地域の教育資源を活用し、職業観や勤労観を養うため、体験活動をとおして職業人となるために必要な資質に触れる機会とする。

■ 実 施 日　令和元年６月 29 日（土）～30 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学校５年生～中学生
■ 参加実績　26 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル砂川
■ 運営協力　学生ボランティア：４名

	6:30	7:30	9:00	11:30	12:00	13:00	13:30	14:00	17:30	19:00	20:00	22:00	
1日目							受付	出会いのつどい	ネイパルでお菓子作りに挑戦しよう！	夕食 活動準備	砂川市とお菓子の繋がりについて知ろう！	入浴 就寝準備	就寝
2日目	起床、洗面	朝食・部屋片付け 調理会場へ移動	パティシィエからお菓子作りを習おう！		ふりかえり	別れのつどい	解散						
			会場：砂川市地域交流センターゆう										

2　プログラム

■ アクティビティの工夫

○　１日目はピザ作りから活動を始めた。友達と交流を深めながら、楽しくできるプログラムとして人気の高い活動だが、今回はトッピングに個性を発揮できるよう様々な食材を準備した。定番のチョコレート系も人気だったが、フルーツやマシュマロに興味を示し、彩り豊かになるようトッピングを工夫する姿も見ることができた。

夜の部では、パティシエについてクイズ形式で学びを深めると同時に、翌日の講師から事前に仕事にかかわる聞き取りを行い、職業観や勤労観を養えるよう配慮した。

○　２日目は、より本格的な体験活動を行うため、現役のパティシエを講師に招き、パンナコッタ作りを行った。前日に作り方の事前学習をしたことで目標が明確になり、意欲的に活動する場面が多く見られた。又、職人の手さばきを間近でみられるよう配慮したことで、子供たちの集中力を維持させることができた。

■ 当日の様子

１日目はピザ作りから活動を始めた。出会ったばかりで子ども達は口数も少なく、お互い遠慮がちであったが、一緒に活動しながら交流を深めることで、笑顔も多く見られるようになった。

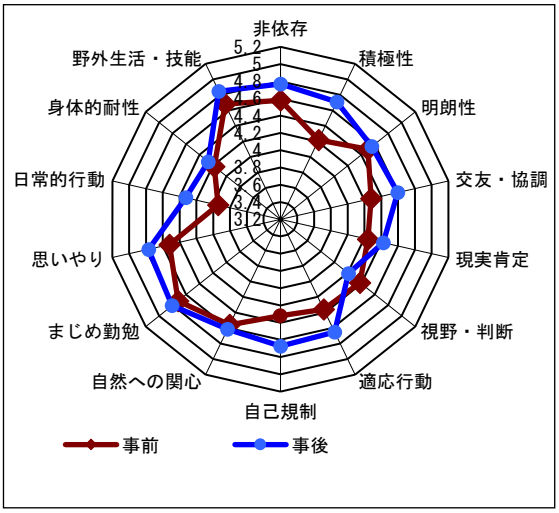
ピザ作りに初めてチャレンジした子が多く、生地を伸ばすのに苦労している姿も見受けられたが、トッピングの段階になると、「何を盛り付ける」などお互い相談しながら楽しそうに活動していた。

出来上がったピザは、石窯で焼いた。石窯は食感良く焼けるため「おいしい」という声を多く聞くことができた。

夜の部では、スライドを使いながら職業観や勤労観を養った。クイズ形式で興味を高めながら進めたため、子どもの満足感も高かった。

２日目は会場を移動し、現役のパティシエから指導を仰いだ。流暢な手裁きを間近でみることで、子ども達の意欲も高まり集中して活動していた。２日目ということもあり、班員と協力しながら作業を進め、楽しそうに声を掛け合っている姿を見ることができた。

IKR 調査レーダーチャート

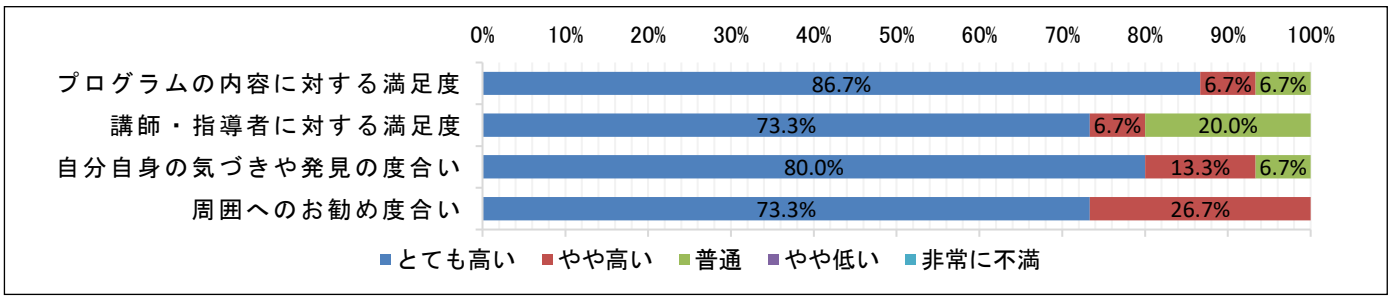


３　事業評価

プログラムへの満足度が上位評価で 94%であったことからも参加者の満足度は高かった。また、ＩＫＲ調査では、「日常的行動」に 0.4 ポイントの上昇が見られた外、「交友・協調」、「適応行動」「思いやり」で 0.3 ポイントの上昇がみられた。

グループ活動を増やし、互いを気遣いながら協力して取り組んだことによる効果が現れたものと考える。

アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　初日に達成感を得られるプログラムを企画したことで自己肯定感が高まり自信を持つことができた。その状態で２日目に難易度を上げたプログラムに挑戦することができたので満足度が高まったと考える。

■　課題

○　「講師、指導者への満足度」の上位評価が 80%にとどまった。全ての活動で参加者を満足させることは難しいが、指導者間での目標を事前に統一する必要があった。

足寄　望ましい勤労観･職業観を育む体験プログラム

ネイパルワーキングキッズ

1　事業のねらいと概要

体験活動をとおして様々な職業についての理解を深め、社会の仕組みを学ぶとともに、望ましい勤労観・職業観を育む。

■ 実 施 日　令和２年２月 22 日（土）～24 日（月）　（２泊３日）
■ 参加対象　小学３年生～中学生
■ 参加実績　小学生 40 名
■ 活動場所　道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄　ほか
■ 運営協力　カントリーファーマーズ藤田牧場、あしょろ観光協会
音更町図書館、足寄町教育委員会、士幌町教育委員会

2　プログラム

	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	
1日目									受付	開会式	準備	なかよくなろう	農業と観光について調べてみよう	ふりかえり	夕食	入浴 自由交流	就寝準備	就寝
2日目	起床 洗面		朝のつどい	朝食	準備	酪農のお仕事 ～牧場見学～ カントリーファーマーズ 藤田牧場		昼食	観光のお仕事 ～お仕事体験～ 道の駅あしょろ銀河ホール 21			ふりかえり	夕食	入浴 自由交流		就寝準備	就寝
3日目	起床 洗面		朝のつどい	朝食	部屋清掃	いろいろな職業について調べてみよう		ふりかえり	閉会式								

■ アクティビティの工夫

○　働くことの意義や仕事をとおして人や社会の役に立つことの喜びを感じることができるよう、「カントリーファーマーズ藤田牧場」での牧場見学や「道の駅あしょろ銀河ホール 21」での職業体験を実施した。

○　将来の職業について考える契機となるよう、世の中の様々な職業を調べて「お仕事ずかん」を作成した。

事前学習の様子

■ 当日の様子

１日目は、アイスブレイクゲームをとおして参加者同士の交流を深めるとともに、将来の夢などについて交流した後、明日の牧場見学や職業体験に向けて事前学習に取り組んだ。

酪農については、牛のからだのしくみや牛乳ができるまでの工程などを調べた。観光については、自分のまちの観光資源や多くの人にまちを訪れてもらうための取組を出し合い、どのまちでも多くの人にまちのよさを知ってもらうための工夫をしていることなどを学んだ。

牧場見学の様子

２日目は、「カントリーファーマーズ藤田牧場」での牧場見学、「道の駅あしょろ銀河ホール 21」での職場体験を行った。

牧場体験では、牧場の仕事や牛舎の様子などについて職員の説明を受けながら施設を見学して回った。見学の途中で牛の出産があり、出産に居合わせた参加者もいて、出産直後の母牛や子牛の様子が観察できる貴重な機会となった。

ポップづくりの様子

「道の駅あしょろ銀河ホール 21」では、職員の説明を受けながら施設を見学して回った後、パンの袋詰め作業とポップづくりを体験した。ポップづくりでは、商品のよさが伝わるよう紹介文を考えたり、商品に目を留めてもらえるよう色や形を工夫したりする姿がみられた。

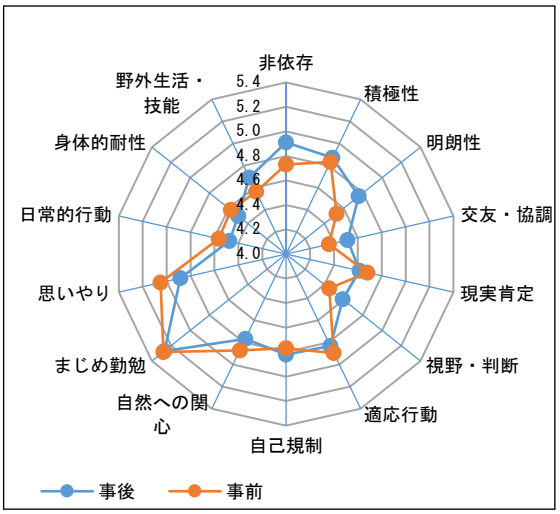
３日目は、様々な職業を調べて「お仕事ずかん」を作成する活動に取り組んだ。仕事内容や必要な資格、大変そうなことや魅力などを調べて３日間の学習のまとめとした。

３　事業評価

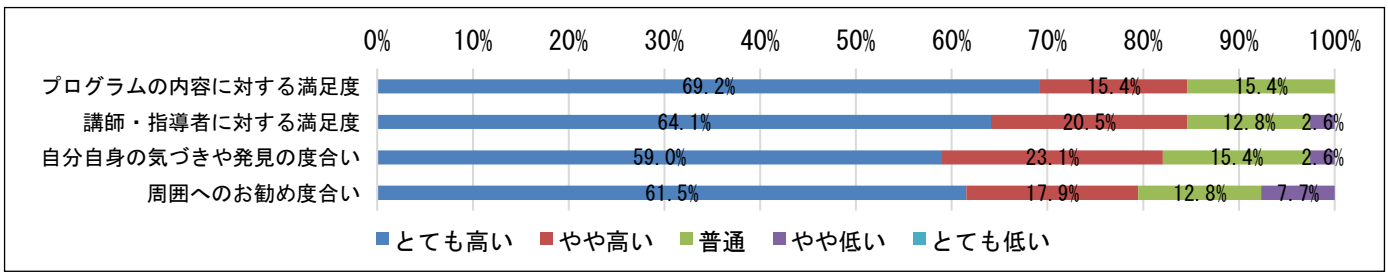
参加者の「どの仕事も人の役に立つための努力や工夫が必要だということがわかった」、「商品を売るためには、いろいろな手間がかかっていることがわかった」などの感想から、牧場や道の駅での活動をとおして、働く人の努力や工夫に触れる機会となったことが伺える。

また、「わたしの知らない職業がたくさんあることがわかって将来の夢が広がった」、「仕事はかんたんに就けるものではないということを知って、なりたい職業を探して勉強しようと思った」などの感想があり、自分の将来について考える契機となったことが伺える。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　「カントリーファーマーズ藤田牧場」や「道の駅あしょろ銀河ホール 21」の協力により、牧場見学や職業体験をとおして、働く人の努力や工夫に触れる機会を提供することができ、望ましい勤労観や職業観を育むことにつながった。

○　牧場見学や道の駅での職業体験の実施にあたり、酪農業や観光業の概要について事前学習に取り組むことで見学や体験の視点を明確にするとともに、活動への興味・関心を高めることができた。

■　課題

○　職業への関心を高めたり働く人の苦労や工夫等を理解したりするためには、実際に見学したり体験したりすることが有効であるが、そのための参加者数に応じた活動場所の確保が課題である。

望ましい勤労観・職業観を育む体験プログラム

厚岸　望ましい勤労観、職業観を育む体験プログラム

ジョブマーカー

１　事業のねらいと概要

職業体験等を通して、望ましい勤労観、職業観を身につけ、働くことへの理解を深める。

■ 実 施 日　令和２年２月 22 日（土）～24 日（月）　（２泊３日）
■ 参加対象　小学３年生～中学生
■ 参加実績　29 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル厚岸

２　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
１日目							受付	開会式	仲間づくり	「働く」って？	連絡	夕食	ふり返り	入浴 就寝準備	就寝
２日目	起床 清掃	朝食	準備	やってみよう！ おしごと体験会		昼食	めざせ！ スーパー社長コンテスト				連絡	夕食	ふり返り	入浴 就寝準備	就寝
３日目	起床 清掃	朝食	清掃	私の 未来予想図	閉会										

■ アクティビティの工夫

○　町内企業の協力をいただき、業務に従事する人の話を聞いたり体験活動を通して業務内容を学んだりすることで、働くことへの関心を高め、職業に関する知識を身に付けられるようにした。

○　活動の目標に合わせて異年齢集団と同年齢集団のグループを設定した。

仲間づくりの様子

■ 当日の様子

１日目は、簡単なゲームでアイスブレイクを行った後、「大人はどうして働くのか」について考えた。参加者は、保護者が働く理由を考え、交流した後、ネイパルの職員や社会人ボランティアの経験談を聞いたり、著名人のインタビューが掲載された図書を読んだりして、さまざまな考えに触れ、３日間の活動への意欲を高めた。

「『働く』って？」の様子

２日目は、ヘアーサロンウエダ代表　上田　治樹氏、株式会社ナリテツ工務課長　角田　悦子氏らの協力をいただき、理容、鉄工の「おしごと体験会」を行った。参加者はカットマネキンを用いたヘアカットや鉄板に穴を空ける加工などの作業を体験したほか、講師から普段どのような仕事をしているか、やりがいを感じるのはどのようなときかなどの話を聞いた。また、参加者からは子どもの頃なりたかった職業や就職に必要な資格に関する質

問があり、働くことへの理解が深まった。

午後からは、将来 AI やロボットに代替される可能性のある仕事や、新しく作り出される可能性がある仕事について学んだり、グループに分かれて架空の飲食店で集客のための方策を考えるワークショップを行った。

３日目は、３日間のまとめとして自分の将来の夢を全体で発表した。参加者は、自分の就きたい職業について調べるなどして、夢を叶えるために今の自分にできることを考え、発表し、感想の交流を行った。

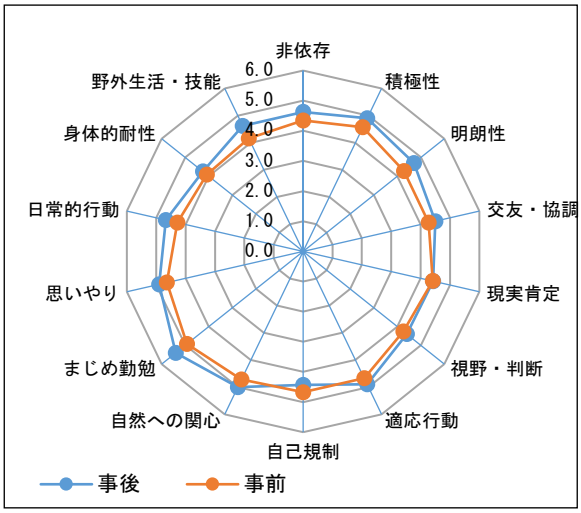
おしごと体験会（理容）の様子

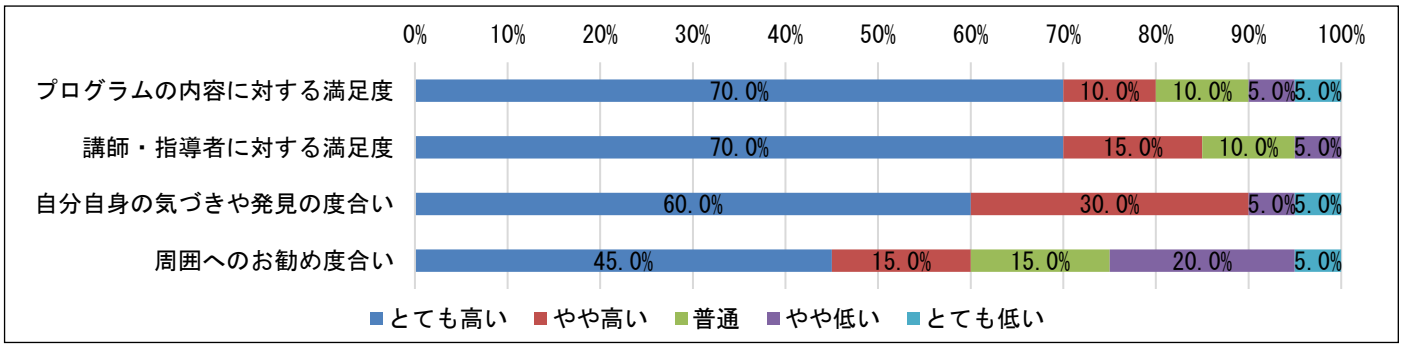
３　事業評価

○　IKR 調査結果によると、「まじめ・勤勉」が 0.5 ポイント向上した。自らの将来について考え、今からできることに取り組もうとする意識が高まったと考えられる。

○　90％の参加者が新しい発見や付づきがあったと回答しており、「やってみたいことがあると気付いた」「いろいろな職業があり、それぞれの思いで仕事をしていることがわかった」などの感想が聞かれたことから、望ましい勤労観・職業観が育まれたと考える。

IKR 調査レダーチャート





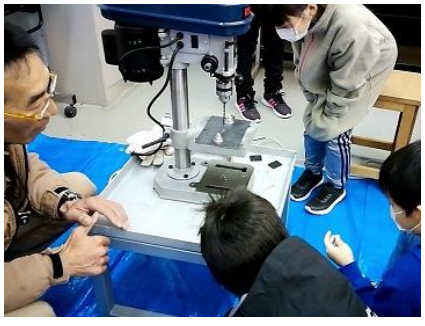
４　まとめ

■　成果

○　職業体験やグループでの話し合いなどを通して、参加者一人一人に自らの将来の夢や目標についての考えを持たせることができた。

■　課題

○　会場をネイパル厚岸に限定したことで、体験活動の内容に制限があった。参加者が事業所を訪問するなど、施設外での活動も検討する必要がある。

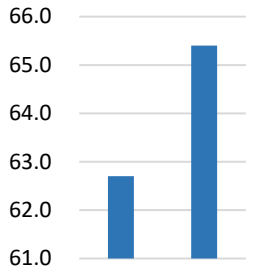
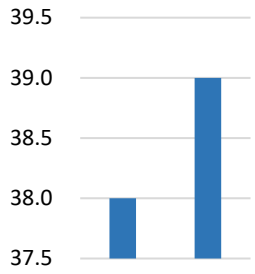
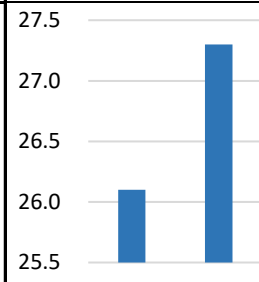
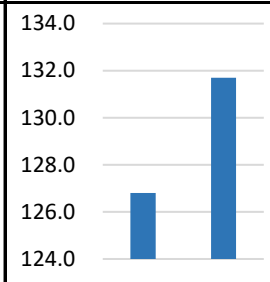


おしごと体験会（鉄工）の様子

望ましい勤労観、職業観を育む体験プログラム

本テーマにおけるIKR調査結果

生きる力の向上　事前　126.8 点 ⟶ 事後　131.7 点　（+ 4.9 点）

	①心理的社会的能力の変容	②徳育的能力の変容	③身体的能力の変容	①～③の合計「生きる力」の変容
質問数・得点範囲	14問（得点範囲14～84点）	8問（得点範囲8～48点）	6問（得点範囲6～36点）	28問（得点範囲28～168点）
全有効回答の総得点の平均値				
数値的推移	事前→事後	事前→事後	事前→事後	事前→事後
	+ 2.7	+ 1.0	+ 1.2	+ 4.9

能力		調査項目	事前	事後	増減
生きる力（総合）			126.8	131.7	4.9
心理的社会的能力			62.7	65.4	2.7
	非依存性	1. いやなことは、いやとはっきり言える	4.6	4.8	0.5
		15. 小さな失敗をおそれない	4.5	4.8	
	積極性	11. 自分からすすんで何でもやる	4.6	4.8	0.6
		25. 前向きに物事を考えられる	4.5	4.9	
	明朗性	5. だれにでも話しかけることができる	4.5	4.8	0.5
		19. 失敗しても立ち直るのがはやい	4.4	4.6	
	交友・協調	7. 多くの人に好かれている	3.8	4.2	0.5
		21. だれとでも仲よくできる	4.8	4.9	
	現実肯定	9. 自分のことが大好きである	3.6	3.7	0.2
		23. だれにでも、あいさつができる	5.3	5.4	
	視野・判断	3. 先を見通して、自分で計画が立てられる	4.2	4.3	0.1
		17. 自分で問題点や課題を見つけることができる	4.6	4.6	
	適応行動	8. 人の話をきちんと聞くことができる	4.7	4.9	0.3
		22. その場でふさわしい行動ができる	4.6	4.7	
徳育的能力			38.0	39.0	1.0
	自己規制	14. 自分かってな、わがままを言わない	4.4	4.4	0.2
		28. お金やモノのむだ使いをしない	4.7	4.9	
	自然への関心	6. 花や風景などの美しいものに感動できる	4.5	4.6	0.1
		20. 季節の変化を感じることができる	5.0	5.0	
	まじめ勤勉	12. いやがらずに、よく働く	4.5	4.9	0.4
		26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりやる	5.4	5.4	
	思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.7	4.9	0.3
		16. 人の心の痛みがわかる	4.8	4.9	
身体的能力			26.1	27.3	1.2
	日常的行動力	13. 早寝早起きである	4.0	4.5	0.5
		27. からだを動かしても、疲れにくい	4.5	4.5	
	身体的耐性	4. 暑さや寒さに、まけない	4.1	4.3	0.2
		18. とても痛いケガをしても、がまんできる	4.5	4.5	
	野外技能・生活	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	4.9	5.0	0.5
		24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	4.1	4.5	

４ 防災意識や災害時に対応する力を高める体験プログラム

（１）プログラム開発の背景

近年、胆振東部地震や大型の台風、大雪など、これまでに経験したことのない規模の災害が起きている。また、南海トラフ地震や日本海溝・千島海溝周辺の海溝型地震など、近い将来起きうるであろう未曾有の災害に備えるためにも、国や地方自治体をはじめ、地域住民や個人においても災害時の備えや減災に向けた取組の重要性が叫ばれている。

本道においても、平成 27 年に「北海道防災対策推進計画」を策定し、過去の災害から得られる教訓の伝承や速やかな避難等を道民の責務として新たに追加するなど、自助や共助の意識・態度を育成する防災教育を更に充実させていくこととしている。

このことから、道立青少年体験活動支援施設においても、体験活動を通して、子どもたちが防災の意識や災害時に対応する力を高めることができるプログラムを開発するものである。

（２）道及び道教委の主な関連施策

・北海道教育推進計画　施策項目２６「学校安全教育の充実」

「消防等の関係機関と連携した避難（防災）訓練の実施などを通して、災害発生時における児童生徒の安全確保体制の充実を図る取組を推進します。」

・第３次北海道生涯学習推進基本構想　視点３　１－（５）「防災に関する学習の推進」

「未曾有の災害となった東日本大震災を踏まえ、一人ひとりが有事に行動できる資質・能力を育成するため、自然災害等の危険性について理解を深めるとともに、自ら安全に行動するための実践的な学習機会の提供が必要です。」

（３）各施設実施プログラムの概要

深川 **ネイパル防災キャンプ**	
令和元年６月 22 日（土）～23 日（日）（１泊２日）	避難所運営ゲーム、避難所設営、非常食試食、炊き出し練習、防災学習など
森 **われら防災マスター**	
令和元年９月 14 日（土）～15 日（日）（１泊２日）	防災学習、防災マップ作りなど
北見 **ネイパル de 防災キャンプ**	
令和元年 11 月 16 日（土）～17 日（日）（１泊２日）	避難所開設ゲーム、段ボールベッド製作、炊き出し体験、暗闇体験など
足寄 **ネイパル防災自然塾**	
令和元年９月 21 日（土）～22 日（日）（１泊２日）	講話、避難所生活体験、災害食試食、マイ防災ガイド作りなど
厚岸 **ネイパル防災キャンプ**	
令和元年９月 21 日（土）～23 日（月）（２泊３日）	講話、非常食試食、防災グッズ体験、避難所運営ゲームなど

深川　防災意識や災害時に対応する力を高めるプログラム

ネイパル防災キャンプ

1　事業のねらいと概要

防災に関する体験活動をとおして、自分自身の命を自分で守る自助、周りの人と助け合う共助の意識を育むとともに、災害時に対応する力を高める。

■ 実 施 日　令和元年６月 22 日（土）～23 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学４年生～６年生
■ 参加実績　22 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル深川

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目						受付	開会式	避難所運営ゲーム		避難所設営①	からだほぐし運動	非常食試食体験	避難所設営②		就寝
2日目	炊き出し練習	朝食	防災学習	避難所片付け	閉会式										

■ アクティビティの工夫

○　避難所運営ゲーム（Do はぐ北海道）
・ゲームの設定を冬季から夏季へ変更した。
・カードの読み手役として各班に一人ボランティアを配置した。
○　からだほぐし運動
・新聞紙で作った棒を使ってのコーディネーショントレーニングを行った。
○　避難所設営
・断水、停電などの情報を小出しにし、状況を変化させていった。

避難所運営ゲームの様子

■ 当日の様子

１日目は、はじめに「Do はぐ北海道（避難所運営ゲーム）」を行った。「次々と避難してくる人たちを避難所のどこに配置するか」、「トイレはどうするか」、「届いた物資をどう分けるか」、「着替えは」、「動線は」、「喫煙所は」、「ペットは」、といった、避難所で起こることを即座に判断していくというゲームをとおして避難所を運営する側の視点を学んだ。その後、多目的ホールで避難所を想定した宿泊体験を実施。段ボールや新聞紙、銀マットなど、その場にあるもので寝床を作り、夕食は非常食を分け合って食べた。

寝床づくりの様子

２日目は、避難所に食材が届いたという設定で朝食にカレーを作って食べた。限られた時間と調理器具の中で効率よく作業を進め、炊き出しの練習をすることができた。その後、深川市自治防災室の石川氏、野村氏を講師に招き防災学習を行い、災害についての理解を深めた。

寝床づくりや携帯トイレ体験、非常食体験など、いざというときに落ち着いて行動できるよう、日頃からこういった体験や訓練を積み重ねておくことの重要性を感じた。

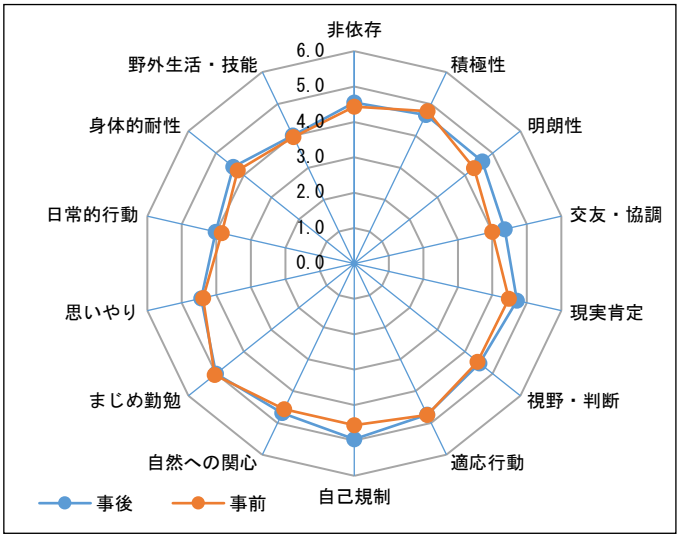
炊き出し練習（カレーづくり）の様子

3　事業評価

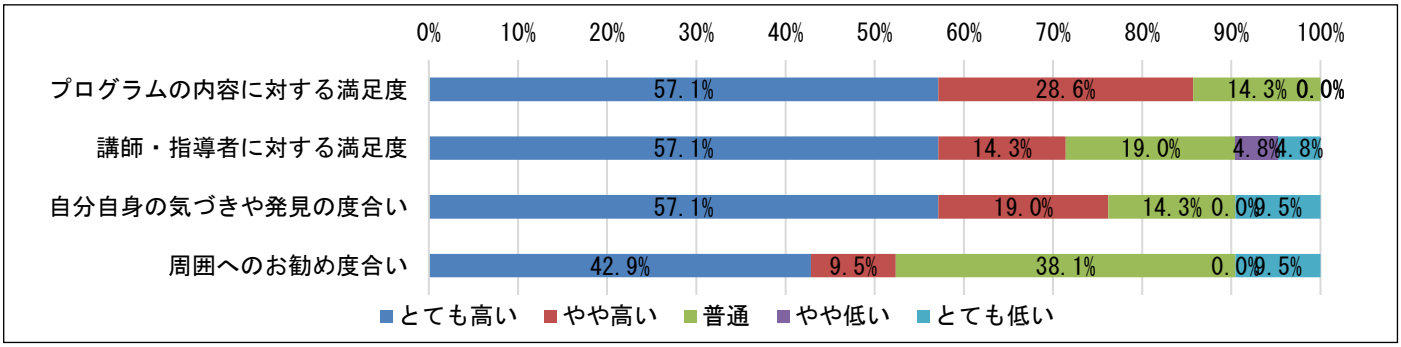
○　IKR 調査結果によると、「交友・協調」「自己規制」が 0.4 ポイント向上し、「明朗性」が 0.3 ポイント向上した。

○　参加者からは・・・「１日だけならがまんできるけど、これが何日も続くのは大変」「体験は楽しかったけど、本当に避難することになったら怖いと思う」「学んだことを家でも取り組みたい」などの感想が聞かれた。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



4　まとめ

■　成果

○　水・電気の使用制限などの設定に忠実に従い、自分のできる範囲で体験しようとする姿が見られた。

○　携帯トイレ体験は任意参加としたが、思った以上に取り組む参加者がいた。避難所でのトイレ問題は重要であるため、機会があればぜひ今後も経験させる場をつくれるとよい。

■　課題

○　プログラムにストーリー性や必然性をもたせようとするあまり、参加者の興味・関心の持続や体力についての配慮が足りない面があった。（急遽、プログラムの入替をして対応した）

講師による防災学習の様子

森　防災意識や災害時に対応する力を高めるプログラム

われら防災マスター

1　事業のねらいと概要

自分の身近な生活の中にある災害に視点を当てたフィールドワークや防災マップづくりを通して、地域の協力体制や自分たちができることを考え整理することで、防災意識を高める。

■ 実 施 日　令和元年９月 14 日（土）～15 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学４～６年生
■ 参加実績　43 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル森
　　森町公民館、森町市街地
■ 運営協力　森町役場防災交通課

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目			受付	開会式	「防災を学ぼう」	昼食	「防災探検をしよう」			「防災マップをつくろう」	夕食	活動③	入浴	就寝準備	就寝
2日目	起床・朝食	「防災マップをつくろう」		活動④「まとめをしよう」	閉会式										

■ アクティビティの工夫

○　森町役場防災交通課の協力を得て、森町で想定される災害やその対策について理解を深めた。
○　地元の中学生がグループリーダーとして活動した。
○　実際に森町の市街地を歩き、防災の視点で市街地を観察した。
○　自分たちで調べてきたことを基に、テーマを決めて防災マップを作成した。

防災交通課の説明の様子

■ 当日の様子

１日目は、「災害が起こった際に取るべき行動」をクイズ形式で学び、中学生リーダーを中心になぜその行動が必要なのかグループで話し合いを行った。その後、森町役場防災交通課長から、想定される災害と防災について説明を聞き、実際に危険箇所、一次避難ができそうな場所、非常時の設備、防災標識などを調べながら散策した。森町は地震の際の津波が想定されることから、防災標識の津波到達予想に注目する参加者が多かった。

市街地散策の様子

森町市街地の散策から戻ってからは、調べてきたことを基に、テーマ（目的）を決めて、防災マップづくりを行った。単に見てきたものを地図に書き写すのではなく、安全に避難できる場所や、高齢者や障がいのある人でも避難しやすい場所、観光客でも現在地が分かるように自動販売機に書かれた住所を記すなど、工夫を凝らした防災マップになった。最後は、完成した防災マップを発表し、森町役場防災交通課長から「防災の視点で見た良い地図ができた。自分たちのまちへ戻っても、また、旅行等で訪れたまちなどでも、防災の意識を持って過ごしてほしい」と講評をいただいた。

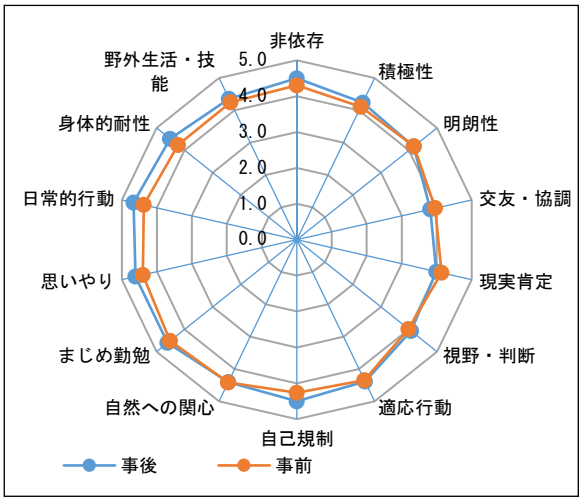
防災マップづくりの様子

3　事業評価

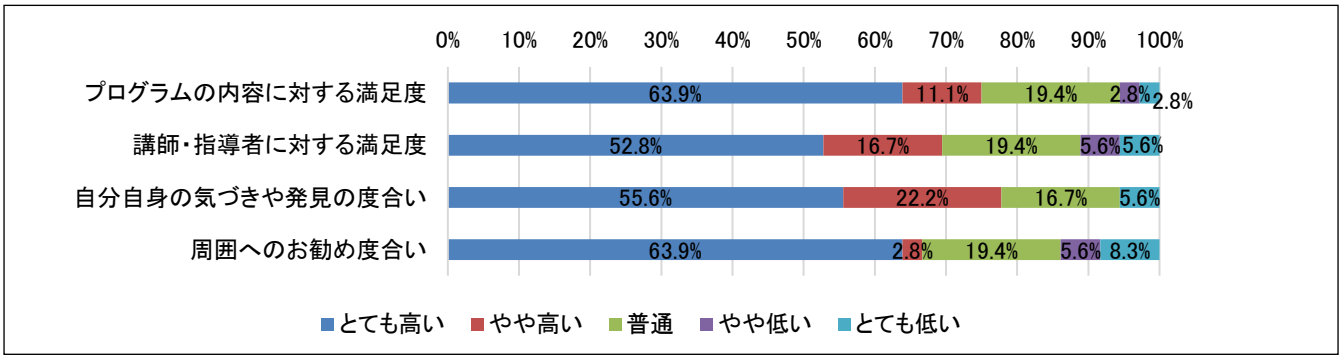
○　IKR 調査結果によると、「日常的行動」「身体的耐性」が 0.3 ポイント向上した。

○　アンケートでは 89%の参加者が防災マップづくりの体験はとても役に立ったと回答していたが、地元に戻って地域の防災マップづくりを行いたいと答えた参加者は 70%だった。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



4　まとめ

■　成果

○　学校や家庭でも経験のない活動だったため、自分たちの住む地域の災害や防災対策に関心を持つ機会となったと考える。

○　地元の中学生にグループリーダーを務めてもらい、参加者が良い刺激を受けただけでなく、中学生にとっても地域の防災に目を向ける機会となった。

■　課題

○　ネイパル＝自然体験というイメージの参加者が多く、いつもと違う活動に戸惑いがあるように感じた。内容を分かりやすく伝えるとともに、様々な体験活動を提供していきたい。

発表の様子

北見　防災意識や災害時に対応する力を高めるプログラム

ネイパル de 防災キャンプ

１　事業のねらいと概要

避難所での生活を想定した体験などをとおして、災害への対応力や防災意識、災害後の生活や復旧時に自ら行動しようとする意識を高める。また、地域住民と避難所体験することで、子どもたちが実際の災害に近い緊張感を持ちながら、主体的に行動することをねらうと共に、地域の人々に防災訓練の機会を提供する。

■ 実 施 日　令和元年 11 月 16 日（土）～17 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学１年生～中学生及びその保護者
■ 参加実績　11 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル北見
　　北見市立錦水小学校
■ 運営協力　北見市立錦水小学校
　　北見市常呂町錦水小学校区の町内会、
　　北海道オホーツク総合振興局
　　北見市防災関連部署

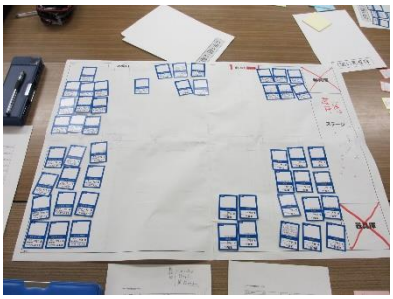
２　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
１日目			開会式	防災かるた	昼食	DOはぐ体験			避難所に移動	避難所開設・炊き出し体験		講話	まとめ	避難所に宿泊	
２日目	朝食（非常食）	避難所の理解	改善策の理解	避難所撤去	ふりかえり										

■ アクティビティの工夫

○　避難所開設ゲームを実施し、避難所に関する基礎知識や配慮事項についての学習後、体験を開始するなど、見通しをもち、主体的に行動できるようプログラム順の工夫を行った。

○　地震後の避難を想定し、実際に避難所まで徒歩で移動後、ダンボールベッドの製作や炊き出し体験を実施するなど、実際の災害に近いイメージをもてるよう工夫を行った。



避難所開設ゲームの様子

■ 当日の様子

１日目は、ネイパル北見で災害や防災に関する学習を行い、その後、実際に避難所に指定されている北見市立錦水小学校へ移動し、避難所を想定した生活を開始した。

ダンボールベッドの製作は、停電を想定し、暗い中、ランタンの明かりだけで作業を行った。また、炊き出し体験についても持参したペットボトルの水だけを使って調理を行った。

ダンボールベッド製作の様子

２日目は、アルファ米などの災害時の食事を体験し、その後、１日目の体験を基に「避難所の生活で大変だったこと・困ったこと」、「避難所の生活を工夫するなら」、「災害のために必要な準備は」の３点についてグループごとに協議を行った。

協議では、「寝袋の中は、自分の体温で温めないと温かくならないので大変だった」、「ペットボトルで水を持って行ったけど、すぐになくなってしまう。」など実際に生活した中での課題点が交流された。

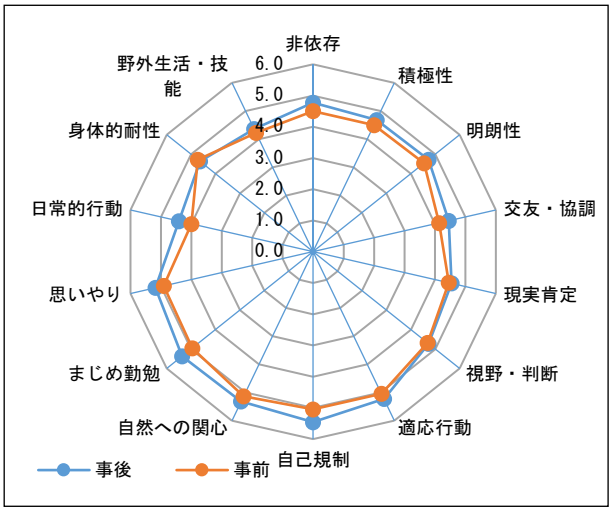
グループ協議の様子

３　事業評価

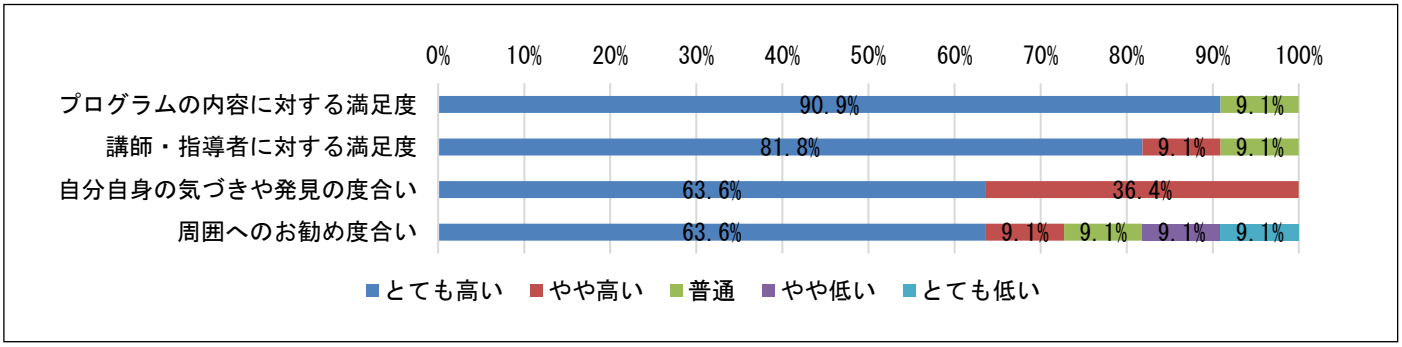
○　IKR 調査結果によると、「自分勝手なわがままを言わない」、「お金やモノのむだ使いをしない」などの「自己規制」が 0.4 ポイント向上し、「割り当てられた仕事をしっかりやる」などの「まじめ勤勉』についても 0.4 ポイントの向上がみられた。

○　参加者からは、「これからの生活に『防災』を取り入れようと思いました」などの感想があり、意識の変容がみられた。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　アンケート集計結果では、「避難所にいる人はこんなに大変なんだと思った」、「きちんと知識や物を用意しなければならないことがよくわかった」などの感想があり、防災への意識を高めることができたと考える。

■　課題

○　日常生活の中で、避難所の生活を意識することは難しいため、実際に体験することが重要となる。季節によって必要な装備が異なることから、季節を変えて実施するなど、実施時期については検討を行う必要がある。

防災に必要な装備についての学習の様子

足寄　防災意識や災害時に対応する力を高めるプログラム

ネイパル防災自然塾

1　事業のねらいと概要

様々な体験活動をとおして災害時における適切な判断や行動について学ぶとともに、自ら身を守ろうとする意識と災害時の対応力を高める。

■ 実 施 日　令和元年９月 21 日（土）～22 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学校３年生～中学生とその保護者
■ 参加実績　21 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄、
　　足寄町緑栄コミュニティセンター
■ 運営協力　足寄町役場総務課企画財政室

2　プログラム

<table>
<tr><th></th><th>8:00</th><th>9:00</th><th>10:00</th><th>11:00</th><th>12:00</th><th>13:00</th><th>14:00</th><th>15:00</th><th>16:00</th><th>17:00</th><th>18:00</th><th>19:00</th><th>20:00</th><th>21:00</th></tr>
<tr><td>1日目</td><td colspan="5"></td><td>受付</td><td>開会式</td><td>オリエンテーション</td><td>防災講話
もしものときって、
どんなとき？</td><td colspan="5">避難訓練で防災力アップ
避難所での生活を体験してみよう！
・防災さんぽ
・災害食を食べてみよう
・防災カードで楽しく学ぼう</td></tr>
<tr><td>2日目</td><td>入浴
・
休憩</td><td colspan="2">マイ防災ガイドをつくろう
もしものときに備えよう！</td><td>閉会式</td><td colspan="10"></td></tr>
</table>

■ アクティビティの工夫

○　水や電気が使えない状況での生活やそれらに対応するための工夫の必要性について理解が深まるよう、実際に避難所に指定されている施設で水や電気、ガスが使えない状況を設定して避難訓練を行った。

○　災害に対する日頃からの備えについて、参加者の行動の変容へつながるよう保護者を参加対象に含め、家族での避難訓練の体験をもとに家庭の防災について考える時間を設けた。

防災講話の様子

■ 当日の様子

１日目は、足寄町役場総務課企画財政室企画調整担当主査中川勝博氏を講師に招き、講師の災害救助活動に携わった体験談等から、災害発生時の被災地の様子や防災に必要な備え等について学んだ。

その後は、非常持ち出し品として、水や災害食、懐中電灯等を準備して避難訓練を行った。約２km 先の足寄町指定避難所までを非常持ち出し品を背負いながら実際に歩いて移動し、避難所では、電気・ガス・水道が使用できない状況での生活を体験した。

夕食は、限られた水や物資で生活しなければならないことを

避難訓練の様子

想定して、節水をテーマとした調理活動に取り組み、ポリ袋を用いた調理方法を体験した。

夜は、懐中電灯の明かりをたよりに、国土交通省が発行している防災カードゲームを行い、災害時に発生する危険とその回避に必要な行動について学んだ。

翌朝、災害食体験としてアルファ化米のおにぎりや備蓄パンを試食して、避難訓練を終えた。

マイ防災ガイドをつくろうの様子

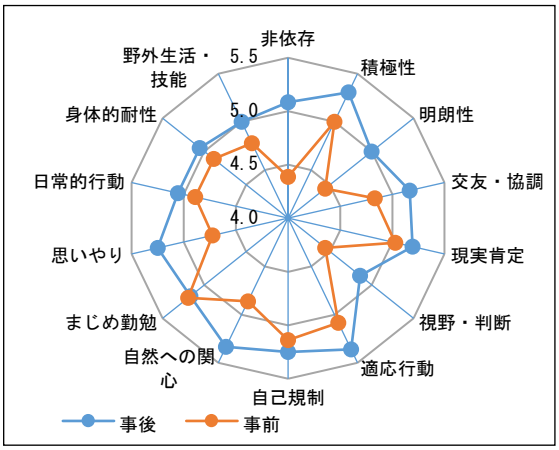
ネイパル足寄に戻った後は、各自が持参したハザードマップ等の資料を用いて災害時の避難場所などを調べ、マイ防災ガイドを作成する活動を通して、改めて家庭での防災について考える時間とした。

3　事業評価

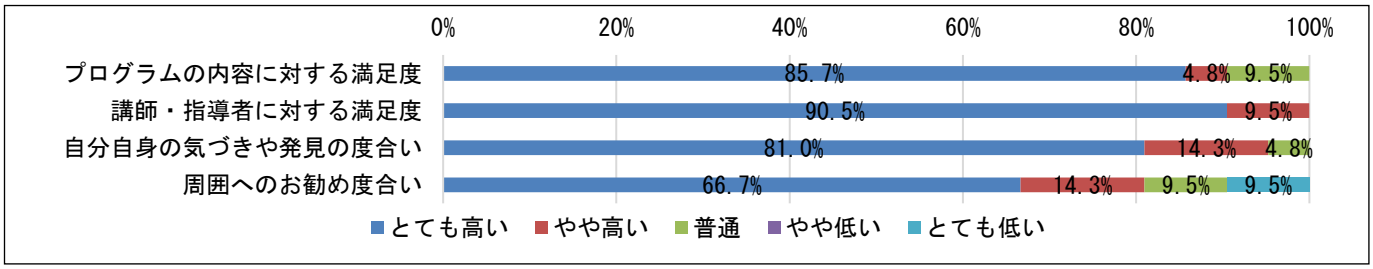
参加した子どもからは「電気が使えなくても朝昼は困らなかったけど、夕食づくりのときに電気が使えない不便さを知って、電気の大事さを知った」、「２ℓの水で過ごすというのが意外と大変だった」という声があり、水や電気が使えない状況での生活やそれらに対応するための工夫の必要性について理解を深めるとともに、災害時の対応力を高めることができたことが伺える。

保護者からの「防災意識を高めるうえで大変為になった。常日頃の備えが大事なので、定期的にこのような取組に参加したいと思った」、「避難所での暗闇での生活はとても不便で疲れた。自宅でも防災を意識して、不便な生活を体験しようと思いつつ、なかなか実行できなかったので、今回の体験はとてもいいものだった」という声からも、本事業への参加により防災意識や災害時の対応力を高めることができたことが伺える。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



4　まとめ

■　成果

○　専門家による講話や防災用品の展示、足寄町指定避難所での活動等、足寄町役場防災担当職員との連携により事業の充実を図ることができた。特に、足寄町指定避難所での避難訓練については、より効果的な体験活動を展開することができ、参加者の防災意識と災害時の対応力を高めることにつながった。

■　課題

○　災害に対する備えについて、事業参加後の行動の変容を目的に保護者を対象に加え、家庭の防災について考える時間を設けたが、家族での参加は３組に留まった。事業参加後の行動変容を促すためには、別のアプローチを検討する必要がある。

厚岸　防災意識や災害時に対応する力を高めるプログラム

ネイパル防災キャンプ

1　事業のねらいと概要

災害時における適切な行動の取り方を学ぶことにより、防災意識を高める。また、避難所での生活を想定した体験活動を行うことにより、災害後の生活や復旧時に自ら支援者となる意識を高める。

■ 実 施 日　令和元年９月 21 日（土）～23 日（月）　（２泊３日）
■ 参加対象　小学３年生～中学生
■ 参加実績　40 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル厚岸
■ 共　　催　厚岸町教育委員会
■ 協　　力　厚岸町危機対策室

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00
1日目						受付	開会式	仲間づくり	【講話】災害が起きたら	食べてみよう！非常食①		寝る場所を作ろう		就寝 寝袋で寝よう
2日目	起床	朝食		触れてみよう！防災グッズ	やってみよう！避難所運営ゲーム	昼食	被災地の話を聞こう		みんなで作ろう！災害食レシピ			段ボールベッドで寝てみよう	入浴	就寝
3日目	起床	食べてみよう！非常食②		避難所を片付けよう	ふりかえり	閉会式								

■ アクティビティの工夫

○　避難所での生活について体験的に学ぶため、実際に備蓄されている非常食での食事や、段ボールベッドを使用した宿泊などを行った。

○　被災地の様子や支援者としての取組を知るため、復興ボランティア経験者の体験談を聴いたほか、被災地の様子を紹介する写真パネルを展示した。

「食べてみよう！非常食①」の様子

■ 当日の様子

１日目は、厚岸町危機対策室吉田係長から「もし災害が起きたら」と題して災害に備える心構えについての話をいただき、３日間の防災キャンプへの意欲を高めた。その後、被災して調理ができない場面を想定し、備蓄食料であるアルファ米と缶詰で夕食を摂り、寝袋を用いて体育館で就寝した。

２日目は、災害時に使われる防災無線や発電機、土嚢などの道具や、ドローンのデモ飛行を見学した後、避難所運営ゲーム（ＤｏＨＵＧ）を行ったあと、東日本大震災に復興ボランティアとして参加した鈴木直人氏から、被災地の様子やボランティア活動に

「やってみよう！避難所運営ゲーム」の様子

ついて話をいただいた。夕食は、「北の災害食レシピ」を参考に、参加者が協力して自炊を行った。参加者はハイゼックス炊飯袋などを利用し、限られた物資を使用して炊事を行う方法を体験し、この日は、厚岸町で備蓄している段ボールベッドを使用して就寝した。

３日目は、非常食の缶詰パンやインスタントスープで朝食を摂った後、実際に災害が起きたときに再利用できるよう、使用した段ボールベッドを丁寧に片付けた。最後に３日間の活動を振り返り、災害への備えや避難所での過ごし方について考えた。

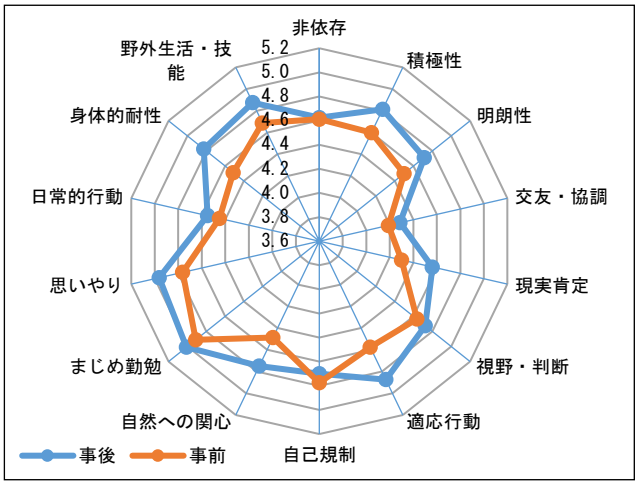
「みんなで作ろう！災害食レシピ」の様子

３　事業評価

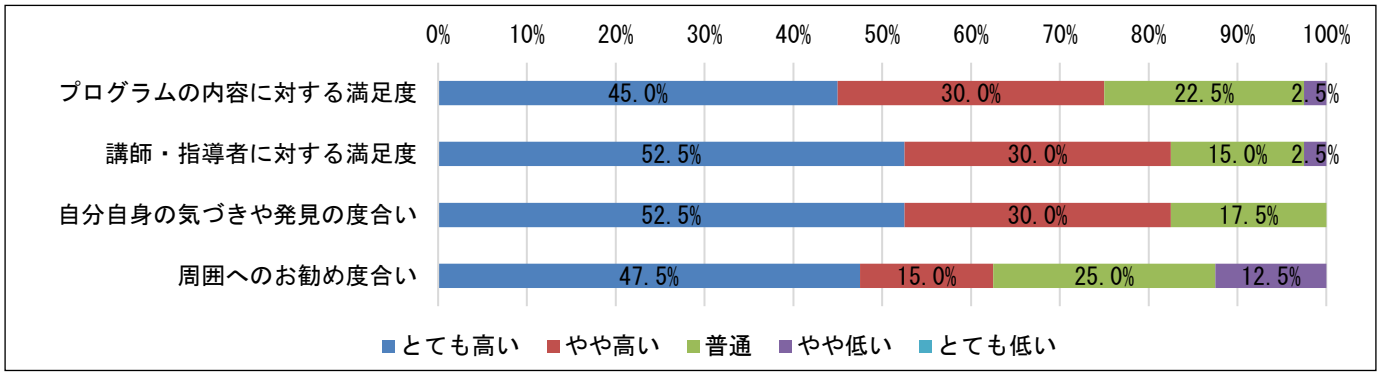
○　IKR 調査結果からは、「適応行動」が 0.3 ポイント向上しており、制限の多い環境において、周囲に気を配りながら行動したためであると考えられる。

○　アンケートでは 82.5%の参加者が、新しい発見や気づきがあったと回答しており、「まずは自分の命を守ることが大切だとわかった」「家に帰って非常用バッグを用意しようと思う」などの感想もみられることから、災害に備える意欲が高まったといえる。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　実際に災害時使用される備蓄食や段ボールベッドなどを用いた体験活動を行うことで、参加者に避難所での生活をイメージさせ、災害時における適切な行動を考えるなど、防災意識を高めることができた。

「段ボールベッドで寝てみよう」の様子

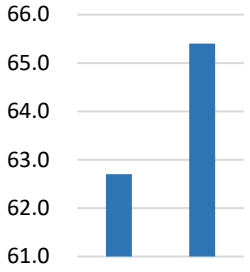
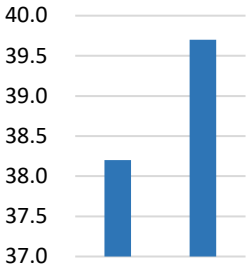
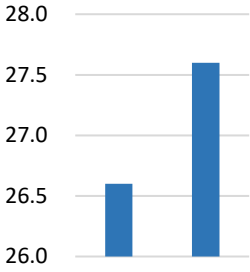
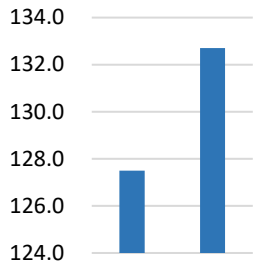
■　課題

○　子どもだけでなく、保護者や地域住民の部分参加を取り入れるなど、広く参加できるプログラムを取り入れることで、より効果的に防災意識を高めることができるのではないかと考察する。

防災意識や災害時に対応する力を高めるプログラム

本テーマにおけるIKR調査結果

生きる力の向上　事前　127.5 点 ⟶ 事後　132.7 点　（+ 5.2 点）

	①心理的社会的能力の変容	②徳育的能力の変容	③身体的能力の変容	①～③の合計「生きる力」の変容
質問数・得点範囲	14問（得点範囲14～84点）	8問（得点範囲8～48点）	6問（得点範囲6～36点）	28問（得点範囲28～168点）
全有効回答の総得点の平均値				
数値的推移	事前→事後	事前→事後	事前→事後	事前→事後
	+ 2.7	+ 1.5	+ 1.0	+ 5.2

能力		調査項目	事前	事後	増減
生きる力（総合）			127.5	132.7	5.2
心理的社会的能力			62.7	65.4	2.7
	非依存性	1. いやなことは、いやとはっきり言える	4.5	4.8	0.5
		15. 小さな失敗をおそれない	4.4	4.6	
	積極性	11. 自分からすすんで何でもやる	4.7	4.8	0.3
		25. 前向きに物事を考えられる	4.5	4.7	
	明朗性	5. だれにでも話しかけることができる	4.4	4.7	0.5
		19. 失敗しても立ち直るのがはやい	4.4	4.6	
	交友・協調	7. 多くの人に好かれている	3.7	4.0	0.5
		21. だれとでも仲よくできる	4.7	4.9	
	現実肯定	9. 自分のことが大好きである	3.8	4.1	0.2
		23. だれにでも、あいさつができる	5.2	5.1	
	視野・判断	3. 先を見通して、自分で計画が立てられる	4.4	4.6	0.3
		17. 自分で問題点や課題を見つけることができる	4.5	4.6	
	適応行動	8. 人の話をきちんと聞くことができる	5.0	5.1	0.4
		22. その場でふさわしい行動ができる	4.5	4.8	
徳育的能力			38.2	39.7	1.5
	自己規制	14. 自分かってな、わがままを言わない	4.5	4.9	0.5
		28. お金やモノのむだ使いをしない	5.0	5.1	
	自然への関心	6. 花や風景などの美しいものに感動できる	4.5	4.7	0.3
		20. 季節の変化を感じることができる	5.0	5.1	
	まじめ勤勉	12. いやがらずに、よく働く	4.5	4.9	0.3
		26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりやる	5.3	5.2	
	思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.8	4.9	0.4
		16. 人の心の痛みがわかる	4.6	4.9	
身体的能力			26.6	27.6	1.0
	日常的行動力	13. 早寝早起きである	4.4	4.6	0.4
		27. からだを動かしても、疲れにくい	4.3	4.5	
	身体的耐性	4. 暑さや寒さに、まけない	4.5	4.8	0.3
		18. とても痛いケガをしても、がまんできる	4.6	4.6	
	野外技能・生活	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	4.8	4.8	0.3
		24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	4.0	4.3	

５ 環境に対する気付きや環境保全に向けた行動力を高めるプログラム

（１）プログラム開発の背景

持続可能な開発目標（SDGs）における 17 のゴールの中にも環境に関する項目があるように、私たち人間の社会生活が、あらゆる面で地球の環境に影響を及ぼしている。限りある資源を有効に活用し、自然環境への負荷を最小限にとどめるためには、資源の循環を可能な限り進めながら、地球上の生態系を維持できるようなバランスのとれた社会を目指し、自然等がもたらす恵みを将来の世代にまで引き継いでいこうとする人材を育成することが重要となる。

また、教育の面においても、教育基本法や学校教育法、学習指導要領の中で「環境教育の充実」についてふれられており、環境に関心をもち、環境保全に向けた実践力を身に付けさせるための取組を推進することが急務となる。

このことから、道立青少年教育施設においても、環境に対する気付きや環境保全に向けた行動力を高めることができるプログラムを開発するものである。

（２）道及び道教委の主な関連施策

・北海道教育大綱　２基本方針

ふるさと北海道への愛を育む

「地域の豊かな自然や歴史、伝統、文化産業等の理解を深める教育」

「本道の広域性や自然特性などを踏まえた教育」

・第３次北海道生涯学習推進基本構想　視点３　１－（１）「環境に対する学習の推進」

「北海道のよさである恵まれた自然環境についての学習や、次世代に引き継いでいく行動力を身に付けるための環境教育が必要です。」

（３）各施設実施プログラムの概要

砂川 **ネイパルクラブ**	
令和２年２月 22 日（土）～23 日（日） （１泊２日）	スノーシューハイク、SDGｓの学習、 ワークショップなど
深川 **ネイチャーキャンプ**	
令和元年７月 20 日（土）～21 日（日） （１泊２日）	外来種捕獲体験、環境ゲーム、森林教室など
森 **われら森レンジャー**	
令和元年 11 月３日（日）～４日（月） （１泊２日）	お団子作り、野外炊飯、サイクリング・ハイキング、森遊びなど
北見 **ネイパルこどもエコクラブⅡ**	
令和元年６月 22 日（土）～23 日(日) （１泊２日）	阿寒湖の森散策、ニホンザリガニ探し、環境学習、水切り体験など
足寄 **とかち森の学校**	
令和元年６月８日（土）～９日(日) （１泊２日）	森林散策、間伐材でクラフト体験、バウムクーヘン作りなど
厚岸 **アースキッズ**	
令和元年 10 月 12 日（土）～14 日(月) （２泊３日）	森の生き物の学習、環境ゲーム、生き物観察など

砂川　環境に対する気付きや環境保全に向けた行動力を高めるプログラム

ネイパルクラブ

1　事業のねらいと概要

自然体験活動を通して、環境に対する興味・関心を高めることで、生命を尊び自然を大切にする、持続可能な社会の担い手を育成する。

■ 実 施 日　令和２年２月 22 日（土）～23 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学３年生～中学生
■ 参加実績　38 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル砂川
■ 講　　師　北海道開発教育ネットワーク　佐久間みのり氏

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目					受付	出会いのつどい	スノーシューハイク			ベットメイク他	夕食	SDGs って何？		入浴・自由交流	就寝準備	就寝
2日目	起床	朝食	活動準備	SDGs ワークショップ		ふりかえり	別れのつどい	解散							

■ アクティビティの工夫

○　スノーシューを用いた冬山登山を実施し、原生林を自由に歩く爽快感を味わうことで、北海道の冬季野外活動に興味･関心を持たせる活動を取り入れた。

○　環境学習に SDGs を取り入れることで、環境のみならず、人権や国際理解にまで学びを広められるようにした。又、初日に基礎知識を高めることで、2 日目に自分なりの考えを持てるようにした。

スノーシューハイクの様子

■ 当日の様子

１日目は、午後からスノーシューハイクを行った。班毎にコースを設定し、石山の山頂まで先頭を交代しながら歩いた。山頂では展望台に登り景色を眺めた後に、ココアを飲みながら休憩をした。下りでは沢に向かい滑る活動を取り入れたところ好評であった。夜の部ではSDGsの基礎知識をスライドや映像を見て高めた後に、SDGsすごろくを行い仲間との交流を通して学びを深めた。すごろくはとても人気で、夢中になって取り組む姿がみられた。

SDGs って何の様子

２日目は、SDGs ワークショップを行った。インドと日本の比較から、文化や環境の違いを理解しながら不平等な社会を見つめ、誰一人取り残さない社会の実現に向け考えを深めた。

学びは「楽しい活動」から始まるという考えのもと、ばば抜きや○×クイズを通して両国の違いを理解し、すごろくを行い不平等について考えた。体験を通して不平等を実感した子ども達は、SDGs の目標をより身近に感じ、自分の問題としてとらえたようであった。

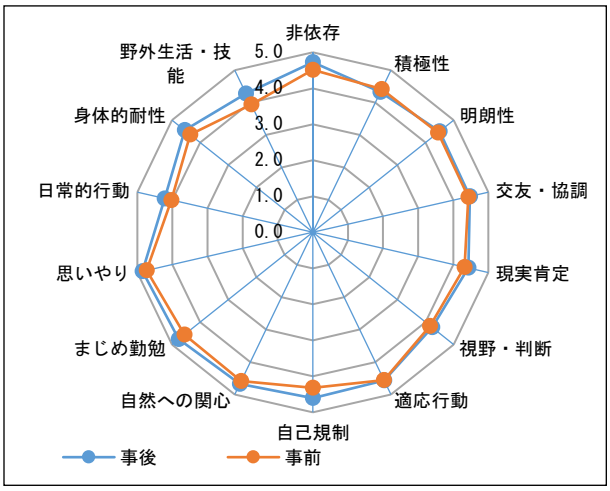
SDGs ワークショップの様子

3　事業評価

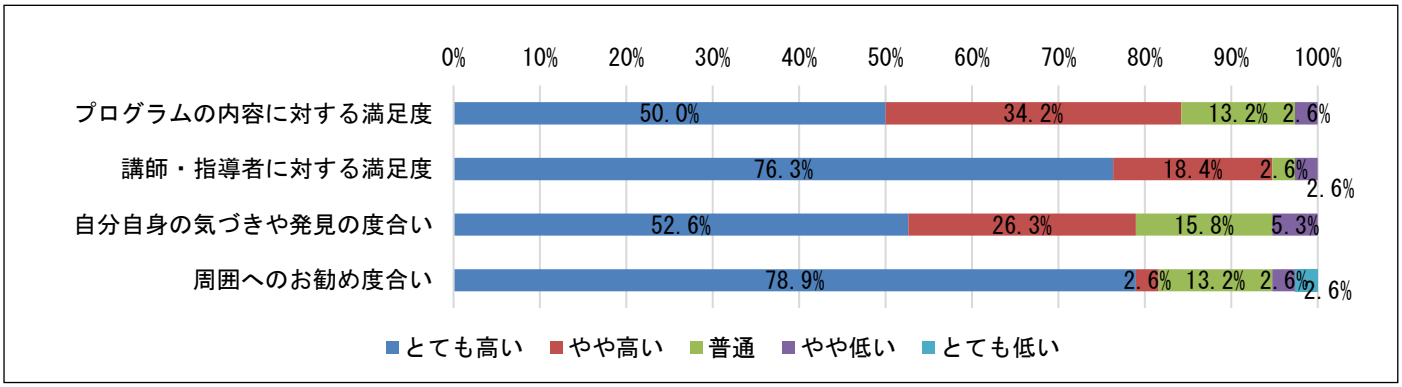
○　IKR 調査結果によると、「自己規制」と「野外生活・技能」が 0.3 ポイント向上したが、差違はあまり認められなかった。

○　参加者からは、「SDGs の 17 の目標を知れて良かった。お母さんにも教えてあげたい。」や「スノーシューハイクも楽しかったし、色々な人と触れ合えて、友達もできたので良かった」などの感想が聞かれ、体験をとおして野外活動や SDGs を学ぶことができた。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



4　まとめ

■　成果

○　野外体験やグループでの活動などを取り入れることで、楽しく、興味を持ってプログラムに参加することができ、気付きから学びにつながるプロセスとなった。

■　課題

○　当初予定していたワカサギ釣りが、暖冬の影響でできなかったことで、キャンセル者が増えた。次年度はワカサギ釣りから氷の厚さを体感し、SDGs の学びに繋げていけるようプログラムを再考する必要がある。

石山山頂での休憩時間の様子

深川　環境に対する気付きや環境保全に向けた行動力を高めるプログラム

ネイチャーキャンプ

1　事業のねらいと概要

環境を守るために取り組んでいる団体の活動について、体験をとおして学ぶ機会を提供することにより、生態系や森林のはたらきに対する理解を深め、環境保全に対する意識を高める。

■ 実 施 日　令和元年７月 20 日（土）～21 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学４年生～中学生
■ 参加実績　27 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル深川
　　旭川市江丹別川流域
■ 運営協力　旭川市生物多様性保全推進協議会　空知総合振興局

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目						受付	開会式	ウチダザリガニ捕獲大作戦！		移動	夕食	環境ゲーム「小動物の仕事」	入浴 自由交流		就寝
2日目	起床	朝食	清掃点検	森林のつながり「森林教室」		閉会式									

■ アクティビティの工夫

○　ウチダザリガニの防除・試食体験では、関係機関と連携し、講話内容の充実と安全の確保を図った。
○　森林と水の関係について、体験から理解を深めるようフィールドワークを設定した。

ウチダザリガニ防除の様子

■ 当日の様子

１日目は旭川市江丹別川で特定外来生物「ウチダザリガニ」の防除や調査を体験した。最初に旭川ウチダザリガニ防除隊の方から、在来種の生態系を守るためにウチダザリガニの防除が必要なことについて説明を受けた。

その後、江丹別川でウチダザリガニの捕獲に挑戦した。初めて胴長を着用して川に入る子も多く、最初は慎重に歩きながらウチダザリガニを探していた。子どもたちは短時間でたくさんのウチダザリガニを捕獲し、その数の多さに驚いていた。防除体験終了後は、嵐山のキャンプ場に移動して、捕獲したウチダザリガニを塩ゆでにして試食した。ウチダザリガニは元々食用として移入されており、小ぶりではあったが味は濃厚で美味しく食べることができた。

ウチダザリガニ試食の様子

夕食後は「小動物の仕事」という環境教育プログラムに挑戦した。生き物カードや生態系カードを使い、生態系の中で環境問題と生物を対比させ、その生物が環境問題の解決にどう関わっているか、考えを交流した。

２日目は、空知総合振興局森林室の職員の方を講師に迎え、森林散策や森林と水の関係を理解するためのフィールドワークを実施した。トチノキやハンノキなど樹木の名前や特徴、森林の役割について説明を聞くとともに、森林が水をたくわえ、水をきれいにすることなど森林の役割についても教わった途中で計器を使って樹木の高さの測定に挑戦した。最初は苦労していたが、講師に測り方を教わりながら、正確に計測することができた。最後に記念のコースターを作成して、２日間の事業を終えた。

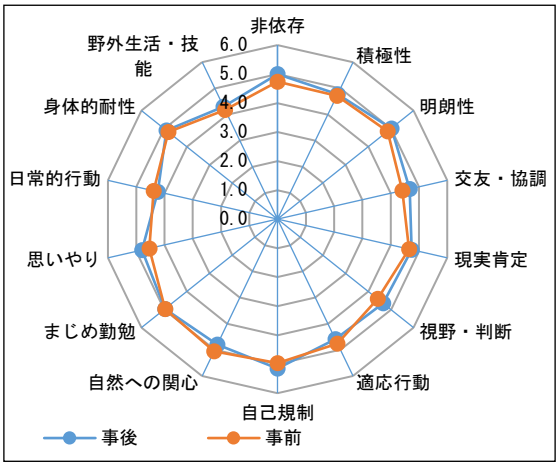
森林教室の様子

3　事業評価

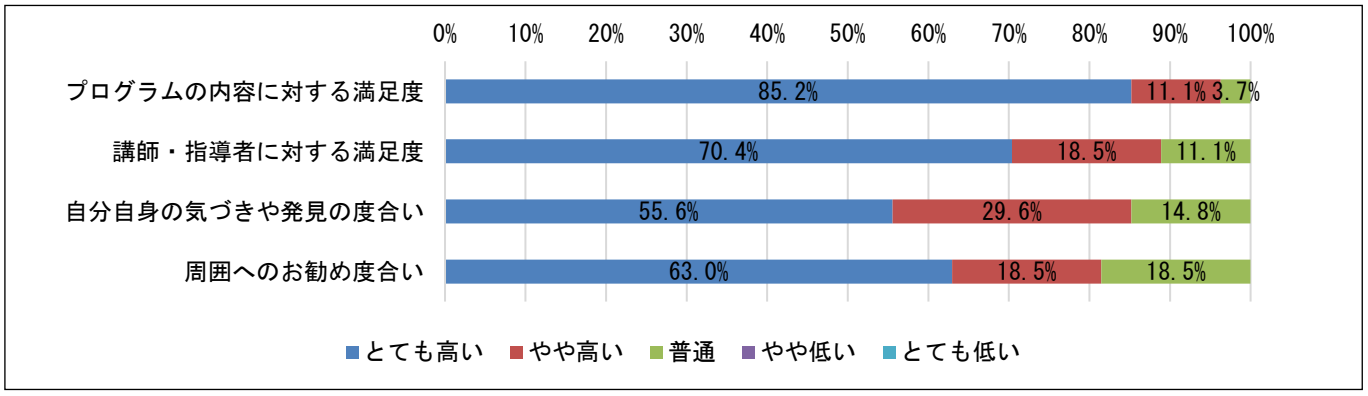
○　関係機関と連携したプログラム展開により、理解が深まるとともに、安全管理について共有することで天候の変化に柔軟に対応することができた。

○　参加者からは、「地域の在来種を守っていくことが大切だと思う」、「森林には水をきれいにしたり、生き物に栄養を与えたりする役割があるので、大切にしていきたい」という感想が聞かれた。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



4　まとめ

■　成果

○　特定外来生物の防除体験や試食は、参加者の興味・関心が高く、意欲的に活動していた。また、特定外来生物防除の必要性や在来種の保護についての講話が、環境問題を考えることに効果的であった。

■　課題

○　カードゲームや樹木の説明では、参加者にとって少し理解が難しい場面もみられた。内容の難しい場合は、樹木の高さ測定や種の飛び方など体験をより多く設定することで理解を深める必要がある。

コースター作りの様子

森　環境に対する気付きや環境保全に向けた行動力を高める体験プログラム

われら森レンジャー

1　事業のねらいと概要

森町の特産物や自然と触れ合う活動を通して、自然の魅力や不思議さに対する興味や関心を高め、自然とともに生きていく態度を育てる。

■ 実 施 日　令和元年 11 月３日（日）～４日（月）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学４年生～６年生
■ 参加実績　52 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル森
■ 運営協力　ボランティア：社会人２名、高校生６名

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目						受付	開会式	交流	休憩	活動１		活動２		入浴など	就寝準備	就寝
2日目	起床	朝食		活動３		閉会式										

■　アクティビティの工夫

○　施設周辺や近隣の山野の自然物を活用し、目を向けるよう組み立てた。
○　各プログラム中に、グループ内での話し合いや意思決定の場面を設定した。
○　各プログラムで、進行や説明をボランティアスタッフが行う場面を設けた。

■　当日の様子

①　交流

ボランティアセミナーの参加者が一部、企画・運営を行った。定番の自己紹介を兼ねたゲームも進行役が普段とは違うことで、新鮮さも楽しみながら活動に臨む様子が見られた。また、フルーツバスケットは大いに盛り上がり、すっかり緊張もほぐれ、明るく和やかな雰囲気で活動に臨んだ。

② 活動１

活動１のお団子づくりでは、交流後の明るい雰囲気のまま活動に取り掛かった。話し合って役割分担をし、大きさや形に工夫を凝らしたお月見団子を作り上げた。

③ 活動２

落ち葉や枯れ枝を利用して、火を起こすバーベキューでは、作業を分担しながら活動に臨む様子を見ることができた。班内で作業の進捗状況を確認し、助け合いながら調理を進めた。

④ 活動３

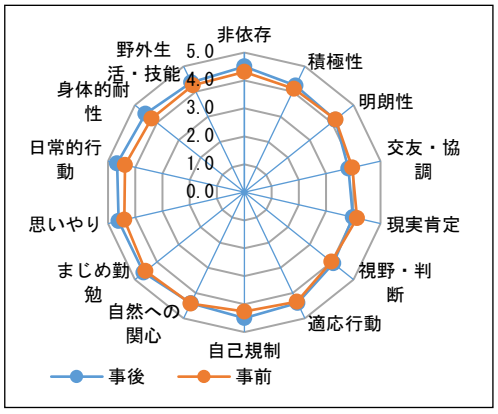
ネイパル森から日暮山の登山口までのサイクリングと日暮山ハイキングを合わせて実施した。ハイキングでは、ミッションカードに記載された日暮山の動植物を探しながら山頂を目指した。ミッションカードの写真と記載された特徴と実物を比較することで、自然に対して意識を向けつつ、山頂を目指した。山頂到着後は、大沼を見下ろしながら自然の力強さや美しさに目を奪われていた。

3 事業評価

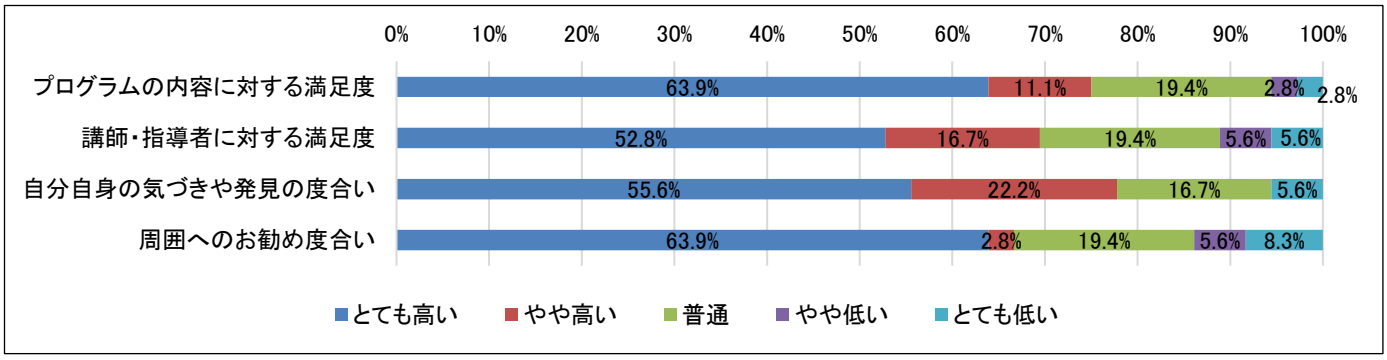
○ IKR 調査結果によると、「日常的行動」「身体的耐性」が特に向上した。

○ アンケートでは 89%の参加者が体験はとても役に立ったと回答していた。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



4 まとめ

■ 成果

○ 班員と協力しながら自然へ目を向ける仕掛けを設定することで、運営側の想定を超えて、自然の魅力を発見することがあった。

○ 班員との協力やボランティアスタッフとの関りが、より効果的な体験活動へとつながった。

■ 課題

○ 対象や参加者の実態に合わせて、活動中の課題を達成するための支援が必要である。

北見　環境に対する気づきや環境保全に向けた行動力を高める体験プログラム

ネイパルこどもエコクラブⅡ

1　事業のねらいと概要

地域の環境資源を活用した各種体験等を通して、ふるさとに対する愛着心や環境保全に対する理解を深め、自ら行動する心を養う。

■ 実 施 日　令和元年６月 22 日（土）～23 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学３年生～６年生
■ 参加実績　12 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル北見
　　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄
　　釧路市阿寒湖（前田一歩園財団　阿寒湖の森）
■ 運営協力　前田一歩園財団

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目		開会式	バス移動（阿寒湖）		昼食	体験学習①（阿寒湖の森）			バス移動（足寄）		出会いのつどい	夕食	ふりかえり	入浴 自由	就寝
2日目	起床	朝のつどい	朝食	バス移動（阿寒湖）	体験学習②（ボッケの森）（エコミュージアムセンター）	昼食	バス移動（ネイパル北見）		ふりかえり	閉会式					

■ アクティビティの工夫

○　ネイパル北見を会場に事前学習を行い、阿寒湖の自然に対する子どもたちの森への関心や興味を高める仕掛けを行った。

○　前田一歩園財団の職員によるレクチャーを受ける時間を確保し、事後のふりかえりをより深いものとするために、活動班にそれぞれデジカメを持たせ、撮影した写真をもとに話し合いが行えるようにした。

■ 当日の様子

１日目は、開会式終了後、バスにて活動場所である阿寒湖に移動した。その後、体験学習①として前田一歩園財団が管理する阿寒湖の森に入り、守られている森や天然記念物のまりもが、なぜ生息できるかなどについての理解を深めた。講師である前田一歩園財団の山本光一課長から、森の中に生える木の植生や火山活動地帯であることを確認できるぼっけなどについての説明を受けた。また、水質のきれいさを体感できるよう水がわき出て川になる場所で、ニホンザリガニ探しを体験した。

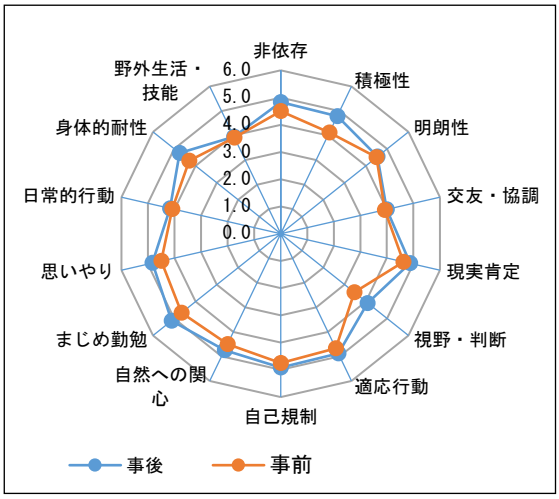
２日目は、体験学習②として前田一歩園財団が管理するぼっけの森とエコミュージアムセンターで学習を行い、阿寒湖の自然環境の特異性や環境保全についての理解を深めた。引き続き前田一歩園財団の山本光一課長の案内のもと、森の植生を学び、地熱により年中暖かい環境があるため、本来北海道では生息してないコオロギがいることなどを知ることができた。また地面の温かさを直接触れて体感したり、阿寒湖で石を投げての水切り体験をしたりなど、楽しい活動となった。

3　事業評価

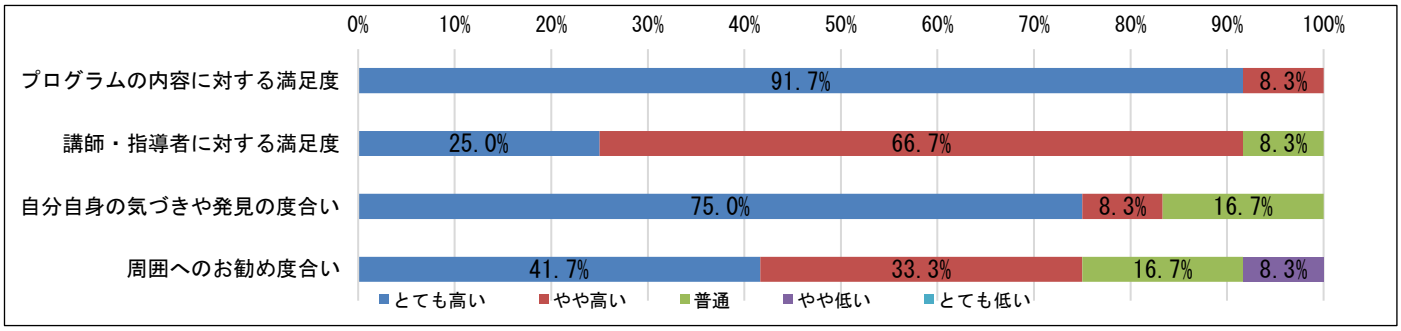
IKR 調査結果によると、多くの項目で数値の高まりが見られた。事前に森についてのレクチャーを行ったことや、実際に森に入って新しい発見をしたこと、危険に際しての注意事項を守りながら集団行動をする体験などが、各項目での向上につながったと考えられる。

参加者からは、「森のことや湖のこと、動植物のことが詳しくなったような気がする」、などの感想が聞かれた。また、アンケート結果では、事業に対する満足度が 100%と高い結果となった。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



4　まとめ

■　成果

○　管理された阿寒湖の森の豊かさを感じることにより、自分が住む身近な自然環境の学習への関心を高めることができた。また、美しく豊かな自然環境を維持していくためには、これからどのような取り組みが必要なのかを自分自身の行動も含め、考える機会とすることができた。

○　体験活動を通して、今まで知らなかった自然に関する新たな発見や知識を得ることができた。また、もっと学びたいという意欲にもつなげることができた。

■　課題

○　体験活動で学んだことを通して、今後、環境保全に向けて具体的にどのような取組につなげていくかが重要となる。

足寄　環境保全の意識と実践力を高めるプログラム

とかち森の学校

1　事業のねらいと概要

森での体験活動や森林資源を活用した創作活動をとおし、地域の環境や地球規模の環境に目を向け、環境保全の意識と実践力を高める

■ 実 施 日　令和元年６月８日（土）～９日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学３年生～中学生
■ 参加実績　参加者 26 名
　　ボランティア　５名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄
　　九州大学農学部附属演習林北海道演習林
■ 運営協力　九州大学農学部附属演習林北海道演習林
　　足寄町教育委員会

2　プログラム

	7:00 8:00 9:00 10:00	11:00	12:00	13:00 14:00 15:00 16:00 17:00	18:00	19:00 20:00	21:00	22:00
1日目	受付	開会式	なかよくなろう 昼食	九大の森探検（雨天決行） 間伐材で my はし作り ※時間の中で２つのプログラムを実施	ふりかえり 夕食	入浴 自由交流	就寝準備	就寝
2日目	朝のつどい 朝食 部屋清掃 バウムクーヘン作り	ふりかえり	閉会式					

■ アクティビティの工夫

○　身近にある自然に関心が高まるよう、九州大学農学部附属演習林北海道演習林内で活動をした。
○　資源の利用について理解が深まるよう、創作活動において間伐材やおが屑を再利用したたきつけを利用した。

森についての講義を聞く様子

■ 当日の様子

１日目は、「九大の森探検」として、普段入ることのできない九州大学農学部附属演習林北海道演習林で６名の職員、森林インストラクターの支援のもと「森林散策」や「川歩き」、「森遊び」を体験した。「森林散策」では間近で滝を見学したり、きくらげやさるのこしかけを見つけたりと五感を使って自然に触れながら、森の中をゆっくり歩いた。「川歩き」では源泉や生き物を探しながら水源地を見学した。「森遊び」ではターザンロープやハンモック等で遊んだ。また、のこぎりを使って木材の切り出し体験を行い、切り出し木はコースターとして持ち帰った。

水源地見学の様子

次にネイパルに戻り、間伐材にかんなをかけ箸の形状にし、やすりで磨いた後、ニスを塗って my 箸を作成した。

２日目は「バウムクーヘン作り」として、おが屑を再利用したたきつけで炭をおこし、バウムクーヘン作りに挑戦した。キャンプ等でつかっているたきつけと違い、ゆっくりと燃えていくおが屑を再利用したたきつけであっても、炭をおこせることを体験した。

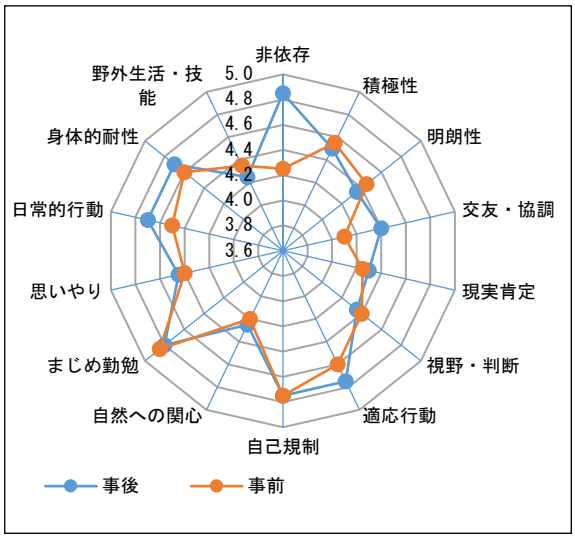
森遊びの様子

３　事業評価

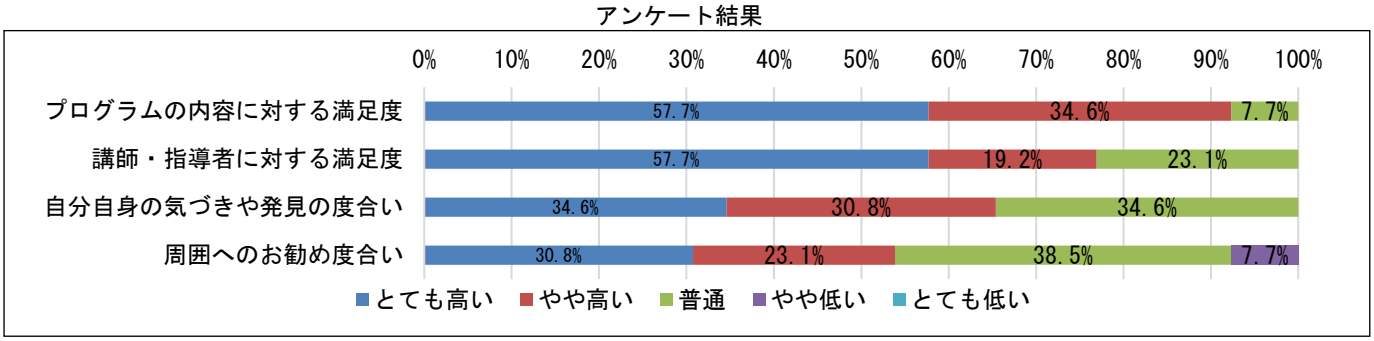
○　IKR 調査結果によると、「非依存」が 0.6 ポイント向上し「自然への関心」が 0.1 ポイント向上した。

○　参加者からは「森での水源地やたくさんの種類の植物を見たり、ターザンロープで遊んだりすることで、森を身近に感じることができた」や「森は水を確保するためにも大切にしなければならないことを学んだ」、「足寄の水は硬度が低く、とてもおいしいことを知った。自分の住んでいるところと比べてみたい」などの感想が寄せられた。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　九州大学農学部附属演習林北海道演習林や森林インストラクターの支援のもとでの森林活動や再利用資源を使った体験活動をとおして、自然についての意識を高めることができたことが伺える。

○　森林散策や森遊びをとおして、森に親しみを持つことで、環境保全についての意識を高めることができた。

バウムクーヘン作りの様子

■　課題

○　小学校の運動会の多い時期と重なってしまい参加者が少なかった。より多くの子ども達に体験活動を提供するために、学校行事等の時期を勘案して子ども達がより参加しやすい開催時期を検討する必要がある。

厚岸　環境に対する気付きや環境保全に向けた行動力を高める体験プログラム

アースキッズ

1　事業のねらいと概要

自然観察や環境調査活動等をとおして、身近な環境問題に関する興味・関心を高めるとともに、環境保全に配慮した生活の大切さについて理解を深める。

■ 実 施 日　令和元年 10 月 12 日（土）～14 日（月）　（２泊３日）
■ 参加対象　小学３年生～６年生
■ 参加実績　36 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル厚岸
■ 運営協力　釧路市立博物館
　　北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00
1日目						開会式	交流ゲーム	グループワーク	身近な生き物を知ろう ～森の生き物編～		夕食	生き物を映像で知る	入浴	就寝
2日目		朝食	身近な生き物を知ろう ～水辺の生き物編～		昼食	身近な生き物を知ろう ～海の生き物編～				森の生き物探し	夕食	ふりかえり	入浴	就寝
3日目		朝食	まとめ		閉会式									

■ アクティビティの工夫

○　身近な自然に生息している生き物の種類と特徴を知るため、標本を使って生き物を色々な角度から観察した。
○　「海の生き物編」では近隣の海で事前に採取した生き物と触れ合いながら、特徴について専門家から解説を受ける時間を設けた。
○　生き物のつながりについて理解するため、森・川・海それぞれのフィールドに生息している生き物をまとめた「生き物カード」を作り、遊びを交えながら食物連鎖について学んだ。

森の生き物学習の様子

■ 当日の様子

１日目は、釧路市立博物館の学芸員２名からネイパル周辺の森に生息している生き物について昆虫標本や写真を用いて説明を受け、参加者は標本をじっくりと観察し、気付いたことをメモした。

水辺の生き物学習の様子

２日目は、水辺と海に生息する生き物について学んだ。水辺の生き物の学習では、ウチダザリガニとニホンザリガニの標本を見比べて違いを探したり、色々な生き物の生息環境について学ぶゲームを体験したりした。午後は厚岸臨海実験所の研究員に解説してもらいながら海の生き物を手に取って観察した。参加者は、初めて触る海の生き物を興味深そうに手に取り、「思ったより柔らかい」「ヌルヌルしている」などの声をあげていた。

海の生き物学習の様子

３日目は、前日までに学んだ生き物の種類とその特徴について交流しながら振り返り、全ての生き物が食物連鎖により繋がっているということを確認した。

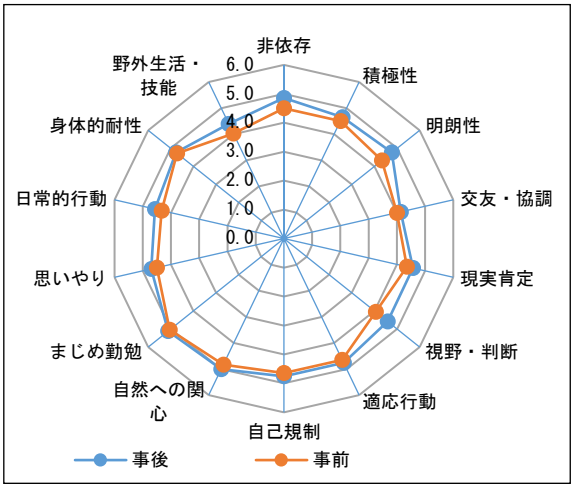
３　事業評価

○　IKR 調査結果によると、「視野・判断」が 0.5 ポイント、「非依存」及び「野外生活・技能」が 0.4 ポイント向上した。

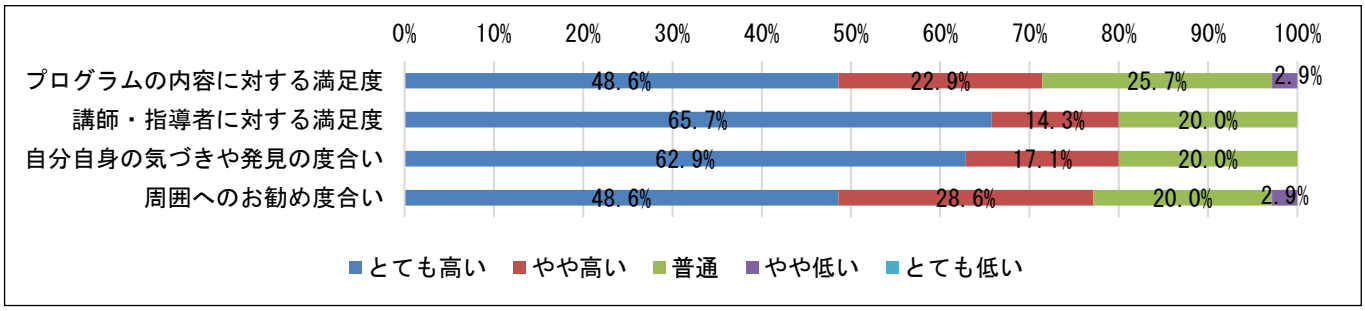
○　参加者の 80%が新しい気付きや発見があったと回答しており、「生き物はお互いに関わりあいながら生きていることがわかった」などの感想があった。

○　参加者の 80%が「講師・指導者に満足している」と回答しており、専門家による解説が充実していたことが読み取れる。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　身近な環境の生き物を楽しみながら観察することで、自然に対する興味を高めることができた。

○　希少な魚が乱獲や自然破壊により個体数を減らしていることや、環境保全に配慮した生活の大切さについて気付かせることができた。

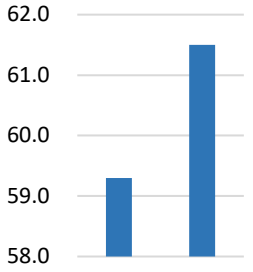
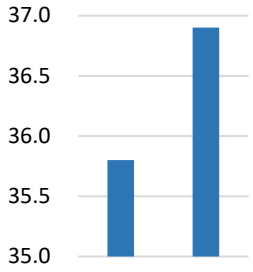
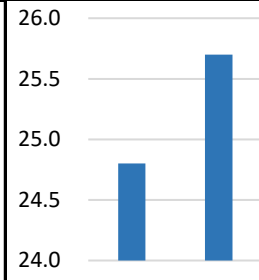
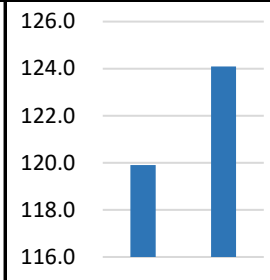
■　課題

○　予め生き物を採取しておくことで、天候不良のため調査が実施できない場合にも観察の機会を増やすことができたと考察する。

○　導入段階で参加者が普段口にしているものは全て「生き物」であることに気付かせ、食から環境問題について興味を持たせていくアプローチも可能だった。

本テーマにおけるIKR調査結果

生きる力の向上　事前　119.9 点 ⟶ 事後　124.1 点　（+ 4.2 点）

	①心理的社会的能力の変容	②徳育的能力の変容	③身体的能力の変容	①～③の合計「生きる力」の変容
質問数・得点範囲	14問（得点範囲14～84点）	8問（得点範囲8～48点）	6問（得点範囲6～36点）	28問（得点範囲28～168点）
全有効回答の総得点の平均値				
数値的推移	事前→事後	事前→事後	事前→事後	事前→事後
	+ 2.2	+ 1.1	+ 0.9	+ 4.2

能力		調査項目	事前	事後	増減
生きる力（総合）			119.9	124.1	4.2
心理的社会的能力			59.3	61.5	2.2
	非依存性	1. いやなことは、いやとはっきり言える	4.2	4.5	0.6
		15. 小さな失敗をおそれない	4.5	4.8	
	積極性	11. 自分からすすんで何でもやる	4.3	4.5	0.3
		25. 前向きに物事を考えられる	4.3	4.4	
	明朗性	5. だれにでも話しかけることができる	4.4	4.5	0.1
		19. 失敗しても立ち直るのがはやい	4.3	4.3	
	交友・協調	7. 多くの人に好かれている	3.4	3.7	0.3
		21. だれとでも仲よくできる	4.6	4.6	
	現実肯定	9. 自分のことが大好きである	3.7	3.9	0.3
		23. だれにでも、あいさつができる	4.8	4.9	
	視野・判断	3. 先を見通して、自分で計画が立てられる	3.7	4.2	0.5
		17. 自分で問題点や課題を見つけることができる	4.2	4.2	
	適応行動	8. 人の話をきちんと聞くことができる	4.7	4.6	0.1
		22. その場でふさわしい行動ができる	4.2	4.4	
徳育的能力			35.8	36.9	1.1
	自己規制	14. 自分かってな、わがままを言わない	4.3	4.5	0.3
		28. お金やモノのむだ使いをしない	4.7	4.8	
	自然への関心	6. 花や風景などの美しいものに感動できる	4.2	4.4	0.1
		20. 季節の変化を感じることができる	4.7	4.6	
	まじめ勤勉	12. いやがらずに、よく働く	4.3	4.6	0.3
		26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりやる	4.9	4.9	
	思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.4	4.7	0.4
		16. 人の心の痛みがわかる	4.3	4.4	
身体的能力			24.8	25.7	0.9
	日常的行動力	13. 早寝早起きである	4.1	4.3	0.2
		27. からだを動かしても、疲れにくい	4.1	4.1	
	身体的耐性	4. 暑さや寒さに、まけない	4.3	4.5	0.4
		18. とても痛いケガをしても、がまんできる	4.4	4.6	
	野外技能・生活	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	4.5	4.6	0.3
		24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3.4	3.6	

６ グローバル社会に対応した子どもたちの育成に関わる体験プログラム

（１）プログラム開発の背景

経済社会におけるグローバル化の進展により、国同士の相互依存が深まる中、国境を越えた労働力、資本、情報技術等の拡大に伴い、国際関係はますます緊密化する傾向にある。

本道においても、海外からの観光客等が増加傾向にあり、道民が外国人と接する機会が拡大している。そのため、道教委では、学校における英語教育の充実を図るとともに、北海道イングリッシュキャンプなどを開催し、児童生徒の英語力の向上を図る取組を進めてきた。

このことから、道立青少年体験活動支援施設においても、幼児・児童生徒を対象に、日本にいながら、外国人等と触れ合う体験を通して生きた英語に慣れ親しむ機会を提供するなど、外国語によるコミュニケーション能力の育成に向けた取組を推進し、その成果を普及するためのプログラムを開発するものである。

（２）道及び道教委の主な関連施策

・北海道総合教育大綱　施策項目 18「グローバル人材の育成」

「本道の国際競争力の向上に向けて、国際的なコミュニケーション能力や世界へのチャレンジ精神を有するとともに、日本や北海道に対する理解と異文化に対する寛容性を併せ持つグローバル人材の育成に関する取組を推進します。」

・北海道教育推進計画　施策項目３　国際理解教育の充実

「国際社会において主体的に行動できる資質・能力を育成するため、海外の子どもたちのほか、来道している留学生や海外の方々と触れ合いながら国際理解を図る機会を充実するとともに、高等学校卒業段階において英語で少なくとも日常的なコミュニケーションができる力を育成する取組を推進します。」

（３）各施設実施プログラムの概要

砂川 **ジュニアイングリッシュキャンプ**	
令和元年 12 月 14 日（土）～15 日（日）（１泊２日）	親子別プログラム（交流会・講演）、創作活動、課題達成型ゲーム、体験型の英語活動など
深川 **家族でグローバルキャンプ♪**	
令和２年２月 15 日（土）～16 日（日）（１泊２日）	英語でのコミュニケーションレッスン、講話、自由交流（カフェスタイル）、体験型の異文化交流など
森 **ジュニアイングリッシュキャンプ**	
令和元年 12 月７日（土）～８日（日）（１泊２日）	英語ゲーム、お菓子作り、クリスマスキャンドル体験、創作活動など
北見 **ジュニアイングリッシュキャンプ**	
令和元年11月30日（土）～12月１日（日）（１泊２日）	英語ゲーム、講演、自由交流（カフェスタイル）、創作活動など
足寄 **ネイパルあしょろ　ジュニアイングリッシュキャンプ**	
令和元年 11 月 30 日（土）～12 月１日（日）（１泊２日）	創作活動、自由交流（カフェスタイル）、読み聞かせ、英語ゲームなど

砂川　グローバル社会に対応した子どもたちの育成に関わるプログラム

ジュニアイングリッシュキャンプ

1　事業のねらいと概要

幼少期の子ども達に英語に触れる機会を与え、グローバル人材としての素地を養うとともに、保護者の人材育成の必要性に対する意識の向上を目指す。

■ 実 施 日　令和元年 12 月 14 日（土）～15 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学１年生～小学４年生とその保護者
■ 参加実績　72 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル砂川
■ 講　　師　北星学園大学短期大学部専任講師　M. J. コッター氏
■ 運営協力　ボランティア：大学生 10 名、高校生 15 名
　　外国人スタッフ：９名

2　プログラム

	9:00	11:00	13:00	13:30	14:00	15:30	17:15	18:30	20:00	21:30
1日目			受付	出会いのつどい	親子別プログラム 【子ども】交流活動 【保護者】講演会	クリスマスの飾り作り	夕食	ナイトプログラム ミッション・インポッシブル（グループ活動）	就寝準備	就寝
2日目	起床 朝食	ワールドフェスタ	別れのつどい							

■ アクティビティの工夫

事業全体をとおして、参加者が外国人スタッフとのコミュニケーションを図る機会を増やすため、グループごとに外国人スタッフとボランティアを配置し、共に活動できるようにした。外国人スタッフには参加者と会話する際に可能な範囲で英語で対応してもらい、理解できない英語は学生ボランティアに通訳してもらうという流れで、参加者が外国人スタッフの発音する英語を多く聞く機会を増やした。

講話の様子（保護者対象）

■ 当日の様子

初日の親子別プログラムでは、子どもは学生ボランティアが企画・運営した英語を使ったゲームで外国人スタッフと楽しく交流した。保護者は、「幼少期から異文化にふれることの意義」について講話やワークショップを通して学びを深めた。続く、クリスマスの飾り作りでは、外国人スタッフが中心となりすべて英語の活動となった。夕食後は、ミッションインポッシブル（課題達成型ゲーム）で大いに盛り上がった。子どもは課題達成に向け英語を理解し、話したりしながら、最善の方策をチームで考え活動することができた。

交流活動の様子（子ども対象）

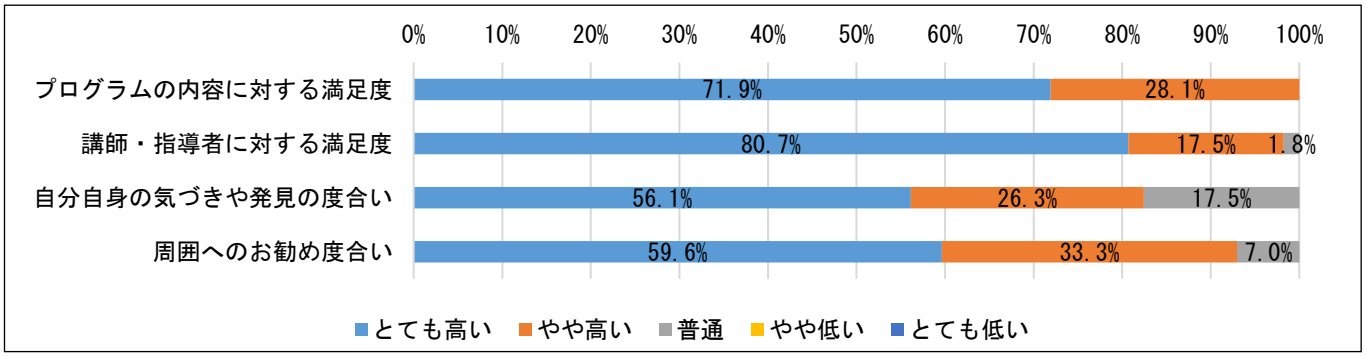
２日目は外国人スタッフが担当する、内容の違う５つのブースを親子で回り、様々な国の遊びや物づくりを英語で説明を受けながら体験した。ギターの伴奏に合わせ英語で歌いながら、体を動かす活動では、参加者の笑顔がたくさん見られた。カナダ出身の女性 ALT が担当したブースでは、ビーバーの絵をパーツごとに切り取り、目隠しをして貼り付けるという活動を行った。目隠しをしていない参加者は、「right, left, up, down」と指示を出すことで、楽しそうに英語を発していた。

ミッション･インポッシブルの様子

3　事業評価

プログラムの満足度は上位評価で 100％を達成した。今年度新たに企画した活動も非常に好評であった。又、ALT の人数とボランティアの人数が増えたことで、事業全体が活気に包まれていた。講師や指導者に対する満足度も良好と言える。特に外国人講師に依頼した親のプログラムは、グローバルな人材育成を考える上で有益であった。自分自身への気づきについては２割程度が普通と回答している。気づきや発見が感動を呼び、感動が人の心を動かすと考えれば、改善の余地がある。リピーターにも新たな発見があるように、サプライズな仕掛けを準備するなどの工夫が必要だと考える。

アンケート結果



4　まとめ

■　成果

○　子どものみならず、親のプログラムも好評で、学びの多いキャンプになったと考える。又、新たな活動を実施したり、今まで参加していなかった市町からも ALT を派遣して頂けたりしたことで、活気のある事業となった。

ワールドフェスタの様子

■　課題

○　参加者が新たな気づきや発見ができるように、外国人スタッフの人数を増やすなどの対策が必要だと考える。又、ボランティアの満足度や学びを高め、質を確保することが課題といえ

深川　グローバル社会に対応した子どもたちの育成に関わるプログラム

家族でグローバルキャンプ♪

１　事業のねらいと概要

幼少期の子どもに外国の言語や文化に触れる機会の提供をとおして、グローバル人材としての素地を養うとともに、グローバル化に向けての保護者の意識向上や子育てについての学習機会とする。

■ 実 施 日　令和２年２月 15 日（土）～16 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　幼児（年長）～小学校４年生とその保護者
■ 参加実績　13 家族 36 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル深川
■ 運営協力　深川市教育委員会　芦別市教育委員会　旭川市教育委員会
東川町立東川日本語学校　一般社団法人滝川国際交流協会

２　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
１日目						受付	開会式	グリーティングタイム	グローバルタイム		夕食	ワールドカフェ		自由入浴	消灯
２日目		朝食		ワールドツアー体験		閉会式									

■ アクティビティの工夫

○　グリーティングタイムでは、自己紹介をした相手とのシール交換により、どれだけの人と自己紹介し合ったか視覚化されるようにした。また、講師からもらえるシールを金色にすることで、より積極的に講師に自己紹介をしに行きたくなる工夫をした。

○　ワールドカフェでは、座席指定や席替えなどを行わず、参加者に思い思いの過ごし方をしてもらう形にしたことで、英語を使ってじっくり話をしたり、外国のカードゲームを楽しんだりする姿が見られ、プログラムの満足度も高まった。

グローバルタイム（講話）の様子

■ 当日の様子

１日目は、英語での自己紹介ゲームのあと、深川、旭川、芦別、東川の ALT や国際交流員、日本語学校の学生を講師に、グループに分かれて英語でのコミュニケーションレッスンを行った。

また、保護者を対象に「小学校の外国語教育について」をテーマにした講話も行い、実際の教科書をもとに小学校での取組や家庭で取り組める学習のポイントなどを学んだ。

夜は、ワールドカフェと銘打ち、お茶を飲みながら講師の先生方と話をしたり、参加者同士の交流を深めたりした。

ワールドカフェの様子

２日目は、母国紹介ブースを巡る活動「ワールドツアー体験」を行った。滝川市からも講師を招き、10 名の講師でアメリカ、カナダ、スイス、ニュージーランド、インドネシア、台湾など、全８ブースを作り、それぞれの国の言葉や文化などについて体験的に学びを深める場を設定した。特にインドネシアのブースでは、伝統的な衣装の試着体験ができ、参加者に好評だった。

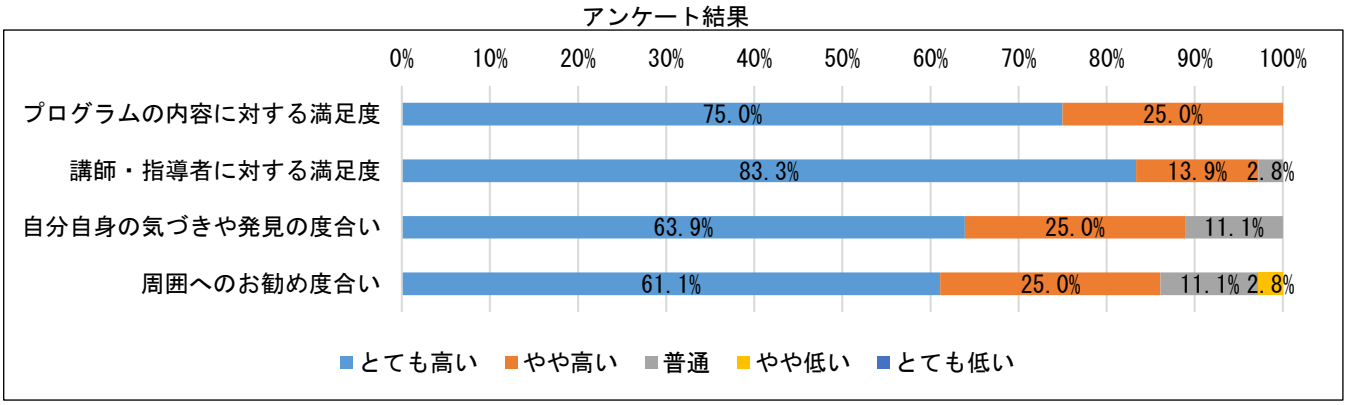
ワールドツアー体験の様子

３　事業評価

○　満足度は、「とても高い」「やや高い」を合わせると、ほぼ 100％であったが、「自分自身の気づきや発見の度合い」、「周囲へのお勧め度合い」では、「普通」「やや低い」という評価が見られた。

○　子どもの参加者からは、「いろいろな国の話が聞けて楽しかった。」「外国の絵本がおもしろかった。」「インドネシアの伝統的な衣装が着られてうれしかった。」のような声が聞かれ、体験的に学ぶプログラムの成果が見られた。

○　大人の参加者からは、「いろいろな国の人と話すことができて、世界観が広がった。」「外国に興味をもつことができ、行ってみたい国が増えた。」のような声が聞かれ、グローバル社会に向けての意識の向上が見られた。



４　まとめ

■　成果

○　コミュニケーションを軸にしたプログラム構成にしたことで、講師や参加者同士の交流の場を多く設定することができた。

○　昨年度とプログラム内容を変えることで、２年連続の参加者の満足度も高くすることができた。

○　講師の人数を多くし、体験ブースの数を増やすことで多くの国や文化を知ってもらうことができた。

■　課題

○　複数の市町村から講師を派遣してもらったため、事前打合せの回数も多くなり、運営面での煩雑さがあった。

○　ねらいを達成するために、英語中心のプログラムから脱却していく必要がある。

グリーティングタイムの様子

森　グローバル社会に対応した子どもたちの育成に関わるプログラム

ジュニアイングリッシュキャンプ

1　事業のねらいと概要

親子で異なる文化や言語を持つ外国人と交流することを通して、外国語に対する学習意欲を高めるとともに、英語や異文化に親しむ。

■ 実 施 日　令和元年 12 月 7 日（土）～8 日（日）　（1 泊 2 日）
■ 参加対象　4 歳以上の幼児から小学校 2 年生までの児童とその保護者
■ 参加実績　16 家族 54 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル森
■ 運営協力　北海道大沼国際セミナーハウス、森町教育委員会、
鹿部町教育委員会
函館市立函館高等学校、高久史代氏（英語教室講師）

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目						受付	開会式	アイスブレイク	「レクリエーション」	活動③「お菓子づくり」	夕食	交流	入浴	就寝準備	就寝
2日目	起床・朝食	「親子別活動」	「クリスマスパーティー」	閉会式											

■ アクティビティの工夫

○　プログラム全体を通して、ALT との交流を重視したことから、ALT を含めたグループ単位で活動を行った。
○　ゲームやお菓子作りなど、幼児や低学年の児童にも分かりやすく、今後も家族で取り組むことができるような内容にした。
○　親子別活動を行い、保護者には家庭で英語教育や外国語文化に触れることができる講座を行い、子供たちは ALT とのふれあいを深める時間を設定した。

高久氏の講座の様子

■ 当日の様子

1 日目は、翌日に行うクリスマスパーティーに向けて、クリスマスをテーマにしたゲームや、ジンジャークッキー作りを行った。「すごろく」や「ビンゴ」など参加者みんなでできるゲームに取り組みながら、動物の鳴き声や顔のパーツ、クッキー材料の呼び方など、日本語と英語の違いを感じながら体験することができた。夜にはキャンドルナイトを行い、クリスマスはキャンドルに火を灯し、家族の健康や幸せを願うという外国の文化を体験した。

すごろくゲームの様子

２日目は、ALT と子どもたちでクリスマスの装飾をつくり、前日に作ったクッキーとクリスマスパーティーを行った。子どもたちが装飾を作っている時間と平行して、保護者は、英語教室で子どもたちに教えている講師を迎え、図書館の洋書絵本やお菓子のパッケージ、配信動画などを活用し、家庭でも気軽に取り組める活動や、英語のカードゲームなどを体験した。クリスマスパーティーでは、高校生ボランティアが事前に準備していた「ベイビーシャーク」などのダンスで楽しい時間を過ごした。

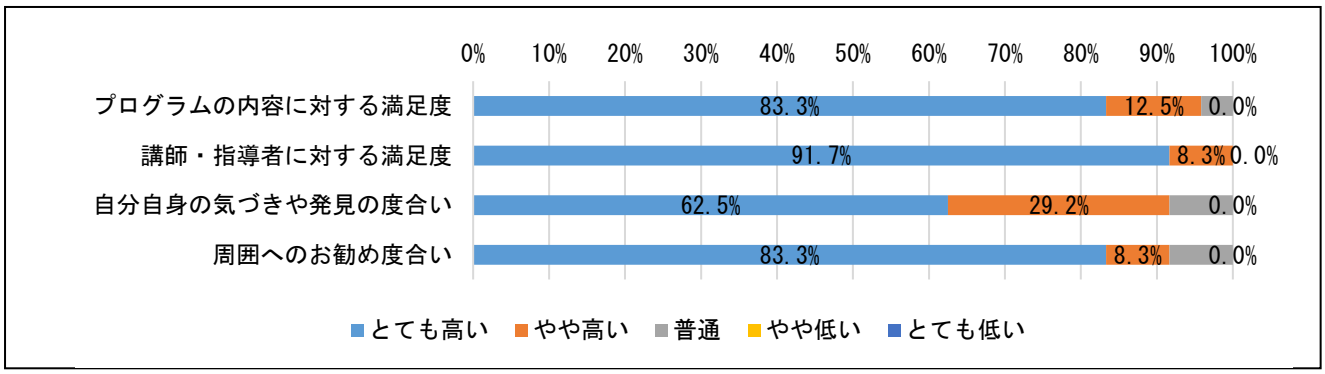
パーティーの様子

３　事業評価

参加者アンケートでは、プログラムの満足度は 95.8%と高い数値だったが、自由記述欄には、小学生の保護者から「子供が英語を使うことに消極的だった」という回答もあり、参加者の発達段階に応じた内容の工夫が必要であると感じる。

また、「新しい発見や気づくことはたくさんあったか」の項目は、「とてもよくあてはまる」との回答が 62.5%にとどまっているため、ALT を活用し、外国のユニークなアクティビティの体験や異なる文化を感じられるような活動を組み込むと良いのではないかと考える。

アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　活動内容をシンプルにし、グループ単位の活動で全ての子どもたちが ALT と触れ合うことができるようにしたことで、事業のねらいは達成できたのではないかと考える。

○　「これまで英語に触れてこなかったが、子どもたちのためによいきっかけにしたい」という保護者が多く、親子別活動の際、外部講師から家族で英語に親しむ手法などを聞くことができたことは、とても良かった。

クッキー作りの様子

■　課題

○　準備期間が十分ではなく、ALT 全員で打ち合わせの機会を持つことができなかった。企画段階から ALT に参画してもらうためには、早い段階から各市町等へ依頼し、打ち合わせの日時を調整する必要がある。

北見　グローバル社会に対応した子どもたちの育成に関わるプログラム

ジュニアイングリッシュキャンプ

1　事業のねらいと概要

幼少期の子どもたちに英語や異文化に触れる機会をつくり、世界に通用する人材の素地を養うとともに、保護者のグルーバル社会における子育てのあり方についての意識向上を図る。

■ 実 施 日　令和元年 11 月 30 日（土）～12 月１日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　幼児～小学校４年生とその保護者
■ 参加実績　家族参加 22 組　66 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル北見
■ 運営協力　オホーツク管内 ALT 、ボランティア（大学生）

2　プログラム

<table>
<tr><td></td><td colspan="3">8:00　9:00　10:00　11:00　12:00</td><td>13:00</td><td>14:00</td><td>15:00</td><td>16:00</td><td>17:00　18:00</td><td>19:00</td><td>20:00</td><td>21:00</td><td>22:00</td></tr>
<tr><td>1日目</td><td colspan="3"></td><td>受付</td><td>開会式</td><td>英語でコミュニケーション</td><td>休憩</td><td>【子ども】英語挑戦
【保護者】講演会</td><td>夕食</td><td>【子ども】英語で遊ぼう
【保護者】フリーカフェ</td><td>入浴
自由</td><td>消灯</td></tr>
<tr><td>2日目</td><td></td><td>朝食</td><td>エンジョイ！イングリッシュ</td><td>閉会式</td><td colspan="8"></td></tr>
</table>

■ アクティビティの工夫

○　ALT13 名に事前にプログラムの担当を依頼し、個々のスキルや経験を生かせる内容となるよう工夫を行った。
○　ALT の協力のもと、保護者と子どもが、別々のプログラムを行う時間を設け、保護者が他国における語学習得に向けた取組の実情について、情報を得る機会を設けた。
○　子ども対象のプログラムでは、「read」「conversation」「exercise」の３つのプログラムを準備し、学年層で分けた子どもたちが、順に回る形式をとり、発達段階に合わせた内容の提供ができるようにした。

絵本の読み聞かせの様子

■ 当日の様子

親子でたくさんの英語に触れる機会が重要であることから、「All English」を基本に、子どもたちは、「英語でコミュニケーション」、「英語に挑戦」、「英語で遊ぼう」に取り組んだ。また、保護者は、「講演会」や「フリーカフェ」で ALT と情報共有を行った。

「英語でコミュニケーション」では、参加者全員で ALT からの英語の指示のもと、アイスブレイクやコミュニケーションゲームに取り組んだ。

コミュニケーションゲームの様子

「英語に挑戦」では、「read」「conversation」「exercise」の３か所のブースを幼児・低学年・中学年の３グループが順に回り、ALT がそれぞれのレベルに合わせた英語活動を実施した。「conversation」のブースでは、絵カードを使いながら簡単な英単語を使った表現に挑戦した。

また、保護者は、「アメリカ」・「カナダ」・「ニュージーランド」・「エジプト」出身の４名の ALT から母国の子どもたちがどのように外国語を学んだり、身につけたりしているのかについての講話を聞いた。

２日目の「Enjoy !English」では、参加者全員で英語の歌を歌ったり、アルファベットのカードを使ったゲームをしたりし、親子で楽しい時間を過ごした。最後は、子どもたちが ALT へ感謝の気持ちを込めてコルクボードを活用した壁飾りを作り、グループ写真を添えてプレゼントした。子どもたちは、ALT から手紙をもらい、喜びながらも別れを惜しむ様子が見られた。

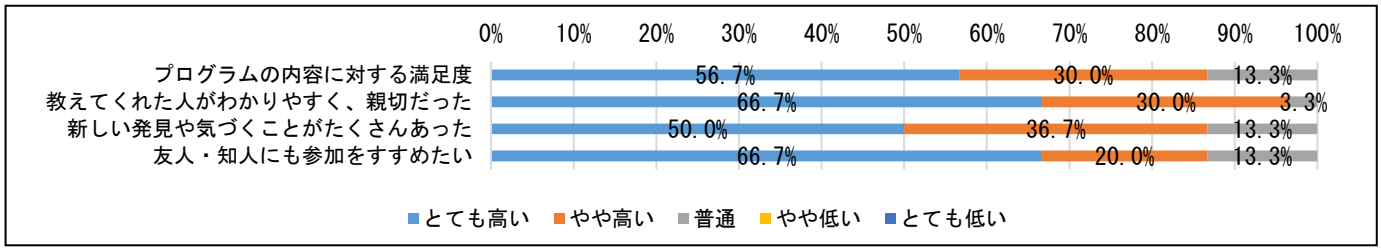
英語に挑戦「conversation」の様子

保護者対象の講演会の様子

３　事業評価

「教えてくれた人が分かりやすく、親切だった」が最も満足度が高く、参加者からは、「ALT の先生が英語を分かりやすく教えてくれ、楽しく英語を学ぶことができた」、「ALT の先生がやさしく話かけてくれた」、「今後もこのような機会を続けてほしい」、「講演の話を聞いて、各国の語学学習スタイルが分かり、勉強になった」などの声が聞かれた。

アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　今回、通訳的人材を入れず、ALT のみでプログラム構成を組んだことに対して、例年参加している保護者から「内容的に新しく進化している感じがあり、とても良かった」との意見をいただいた。各 ALT の特長を生かした活動内容にすることができた。

感謝のプレゼント贈呈の様子

■　課題

○　例年、参加希望者が多く、募集人数以上に受け入れを行っているが満足度を高めるためには、ALT と関わる時間を確保していく必要がある。今後は対象年齢を含め、受け入れ人数の検討が必要である。

足寄　グローバル社会に対応した子どもたちの育成に関わるプログラム

ネイパルあしょろ　ジュニアイングリッシュキャンプ

1　事業のねらいと概要

外国語を用いた体験活動や外国人スタッフとの交流をとおして、グローバル社会に対応した子どもを育てる。

■ 実 施 日　令和元年 11 月 30 日(土)～12 月 1 日(日)　(１泊２日)
■ 参加対象　５歳から～小学校２年生とその保護者
■ 参加実績　31 家族　合計 78 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄
■ 運営協力　足寄町教育委員会、士幌町教育委員会
幕別長教育委員会、陸別町教育委員会
音更町図書館

2　プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目							開会式	英語でアイスブ	【お子さん】クリスマスクラフト / 【保護者】カフェタイム			クリスマスパーティ	入浴 自由交流 ※ブックコーナー、DVDコーナー設置		就寝準備	就寝
2日目	荷物整理 起床・洗面	朝のつどい	朝食	部屋清掃	ブックタイム	親子でイングリッシュ	ふりかえり	閉会式								

■ アクティビティの工夫

○　オールイングリッシュを基本とし英語に親しみやすい内容にした。
○　外国人スタッフと交流する時間をできるだけ多く確保することとした。
○　外国人スタッフと事業担当者が、事業前に綿密な打合せを行った。

英語で自己紹介の様子

■ 当日の様子

１日目は、はじめに「アイスブレイク」として、６人の外国人スタッフ等と親子が基本的な英語で自己紹介や伝言ゲームなどで交流した。

その後、「クリスマスクラフト」として、子どもたちは ALT に英語で問いかけながらまつぼっくりツリーを作り、「カフェタイム」として、保護者は英語教育や子育てについて、お茶を飲みながら和やかな雰囲気の中で ALT を交え、意見交流を図った。

クリスマスクラフト作りの様子

次に、「クリスマスパーティ」として、会食のほか、ALT の司会でゲームやクリスマスソング、クリスマスクラフトでパーティを楽しんだ。夜は、それぞれの家族が思い思いに過ごすとともに、英語アニメの DVD 上映も行い、視聴できるようにした。

２日目は、「ブックタイム」として、日本語訳・英訳の童話絵本を用意し、親子で英語本に親しむ機会とした。

その後は、「親子でイングリッシュ」として、ALT の企画した様々な遊びを親子で行い、遊びの中で体の部位や数などの英語を話し、楽しみながら英語に触れる機会となった。

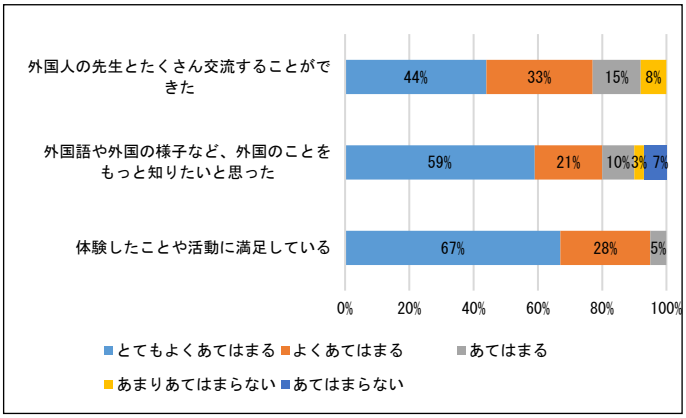
クリスマスパーティの様子

3　事業評価

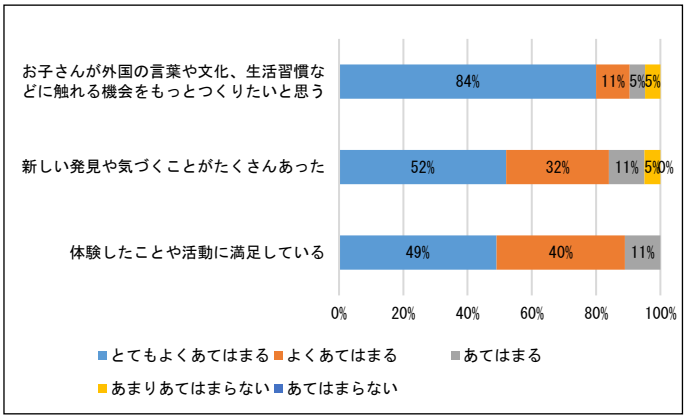
○　子どもたちへの施設独自アンケート調査結果から、「外国人スタッフと交流することができた」や「外国のことをもっと知りたいと思った」、「体験したことや活動に満足している」の項目において、90%以上から肯定的な回答を得たことから、子どもが英語や外国文化に興味を示したことが伺える。

○　保護者への施設独自アンケート調査結果から、「英語での説明が理解できなかった」との意見もあったので、英語での説明を理解できるように、分かりやすい英語を使うことや声掛けのしかたの工夫が必要であった。また、「もっと英会話を重点的にやってほしい」との意見もあったので、プログラム構築の参考とする。

◆施設独自アンケート（子ども）



◆施設独自アンケート（保護者）



4　まとめ

■　成果

○　外国人スタッフと事業担当者が事業前に直接 ALT と打合せをすることで、参加者が英語に親しみやすい内容を提供でき、楽しみながら外国の言葉や文化への関心が高めることができた。

○　子どもたちだけではなく、保護者も外国人スタッフと交流し、英語に触れる機会となった。

親子でイングリッシュの様子

■　課題

○　子どもが幼少期に言葉を覚えるのに親との会話は重要であるため、保護者が簡単な英語でのコミュニケーションを学ぶ時間を設けるなど、保護者を対象にしたプログラム内容について工夫が必要である。

7 地域の「よさ」（歴史・文化・食・自然環境など）を学ぶプログラム

（１）プログラム開発の背景

北海道の特色の一つとして、まず広大で恵まれた自然環境が挙げられる。また、我が国最大の食料生産地たらしめる豊かな農業、縄文時代から続く歴史的文化、アイヌの人たちが築き上げてきた文化や明治の開拓期における文化など、多様で魅力的な特色をもつ。これらの自然や文化、産業に対する理解を深め、郷土愛を育み、これからの北海道を担う人材育成の取組が求められている。

このことから、道立青少年体験活動支援施設においても、多様な地域資源を活用した体験活動を通して、子どもたちの地域に対する愛着を深め、地域の活性化について考えることができる人材の育成を目指したプログラムを開発するものである。

（２）道及び道教委の主な関連施策

・北海道教育大綱　２基本方針

ふるさと北海道への愛を育む

「様々な教育機会における地域の豊かな自然や歴史、伝統、文化産業等の理解を深める教育の推進」

「地域活性化につながる文化・スポーツ活動の充実」

「縄文文化やアイヌ文化など北海道独自の歴史・文化の発信と次世代への継承」

・北海道教育推進計画　施策項目９「ふるさと教育の充実」

「本道の地域課題等を含め、ふるさとに対する興味・関心をもち、地域社会の一員としてまちづくりにかかわる人材を育てる施策や、アイヌの人たちの歴史・文化、北方領土に関する指導など、ふるさと教育の充実を図ります。」

・第３次北海道生涯学習推進基本構想　視点３　１－（１）「環境に関する学習の推進」

「北海道のよさである恵まれた自然環境についての学習や、次世代に引き継いでいく行動力を身に付けるための環境教育が必要です。」

・第３次北海道生涯学習推進基本構想　視点３　１－（２）「食に関する学習の推進」

「北海道は我が国最大の食料生産地域であることから、多様で豊富な食料を生産する地域の特色を生かした食育の推進が可能であり、体験活動や正しい知識を学ぶ機会の充実が必要です。」

（３）各施設実施プログラムの概要

砂川 **来て見てネイパルさがして北海道**	
令和２年１月 18 日（土）～19 日（日）（１泊２日）	野外炊飯（ジンギスカン）、スノーシュー体験、クイズ形式の学習など
深川 **ふかがわ☆おもしろ発見隊！**	
令和元年 10 月５日（土）～６日（日）（１泊２日）	地域散策、りんご狩り、そば打ち体験など
森 **われら〇〇発見隊**	
令和２年１月 11 日（土）～12 日（日）（１泊２日）	地域散策、スノーキャンドル作り、星空観察、絵手紙作りなど
北見 **ネイパル探検隊**	
令和元年 10 月 12 日（土）～14 日(月)（２泊３日）	カーリングの学習、フロアカーリング体験、フィールドワークなど
足寄 **ふるさと発見隊**	
令和元年６月 22 日（土）～23 日(日)（１泊２日）	牧場見学、創作活動、ジンギスカンパーティ、ラワンブキの刈り取り体験など
厚岸 **アイヌ文化にふれよう**	
令和元年 11 月２日（土）～４日(月)（２泊３日）	アイヌ文化の学習、絵本の読み聞かせ、プラネタリウム見学、創作活動など

砂川　地域の「よさ」（歴史・文化・食・自然環境など）を学ぶ体験プログラム

来て見てネイパルさがして北海道

1　事業のねらいと概要

地域に根ざした文化活動や北海道遺産等、地域の教育資源を活用し、北海道の文化の保存や継承、新しい地域文化の創造について学ぶ機会とする。

■ 実 施 日　令和２年１月 18 日（土）～19 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学３年生～中学生
■ 参加実績　24 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル砂川
　　北海道子どもの国

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目						受付	出会いのつどい	会場設営	夕食準備	夕食（ジンギスカンパーティー）		クイズ大会		入浴・自由交流	就寝準備	就寝
2日目	起床	朝食	活動準備	スノーシューハイキング（石山登山）		ふりかえり	別れのつどい									

■ アクティビティの工夫

○　北海道遺産であり、地域(空知管内)の特産であるジンギスカンについて、興味･関心を持たせるため、調理や屋外での食事場所の設置、クイズ形式の学習など参加者が主体となって体験できる活動を取り入れた。

○　スノーシューを用いた冬山登山を実施し、登山の達成感と雪上歩行の非日常体験から、北海道の冬季野外活動に興味･関心を持たせる活動を取り入れた。

夕食準備の様子

■ 当日の様子

１日目は、北海道遺産であり、空知管内の特産でもあるジンギスカンに関する活動を行った。最初の活動として、夕食のジンギスカンを食べる場所を自分たちで雪を使って設営した。グループごとにテーブルやイスを雪で作り夕食に備えた。その後、おにぎり作りや野菜切りなどの夕食準備を行い、グループごとに七輪でジンギスカンを味わった。夜は、ジンギスカンの歴史や食べ方、栄養価についてクイズ形式で楽しく学んだ。

ジンギスカンパーティーの様子

２日目は、スノーシューを履き、夏には入ることのできない原生林の中をとおり、石山の頂上にある展望台を目指した。新雪の上をスノーシューで歩く感触は、「空を飛んでいるみたい。」と感想をもらす参加者もいて、急な山道も楽しく頂上を目指した。途中、動物の足跡を見つけたり、野鳥を間近に見たりと、冬の自然と屋外での活動を楽しんだ。地域の教育資源を活用して、地域や北海道のことを楽しみながら、体験をとおして学ぶことができた。

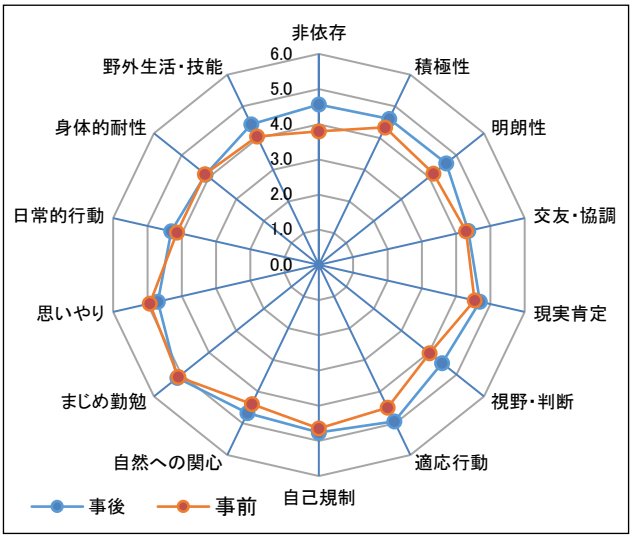
スノーシューハイキングの様子

3　事業評価

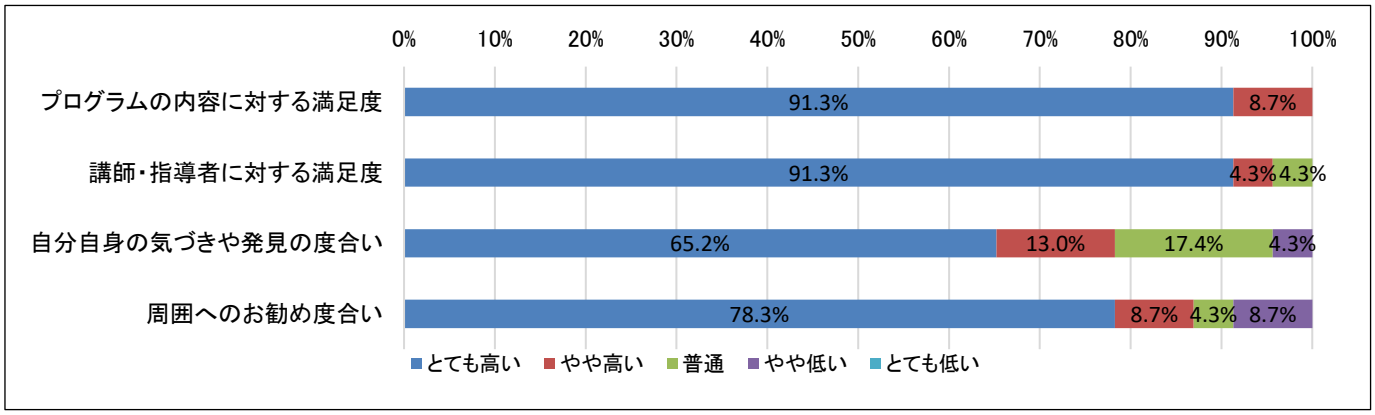
○　IKR 調査結果によると、「非依存」が 0.8 ポイント向上し、「明朗性」、「視野・判断」が 0.5 ポイント向上した。

○　参加者からは、「貴重な体験がたくさんできて本当に楽しく、勉強にもなりました。」や「楽しく、おいしくジンギスカンのことがわかった。」などの感想が聞かれ、体験をとおして地域の良さを学ぶことができた。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



4　まとめ

■　成果

○　地域の良さを知るために、グループでの協働作業や野外体験、レクレーション活動などを取り入れることで、楽しく、興味を持ってプログラムに参加することができ、気付きから学びにつながるプロセスにつながった。

■　課題

○　今回は、地域の良さ(テーマ)を運営者が絞り込み、参加者に提示したが、今後は参加者自身が見つけ出す学びのプロセスを取り入れたプログラム構成を検討する必要がある。

会場設営の様子

深川　地域の「よさ」（歴史・文化・食・自然環境）を学ぶプログラム

ふかがわ☆おもしろ発見隊！

1　事業のねらいと概要

地域の特色を生かした産業・文化財・施設にふれる体験をとおして、自然との関わりの中で生まれてきた人々の暮らし方に気づき、郷土への愛着を育むきっかけとする。

■ 実 施 日　令和元年 10 月５日（土）～６日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学４年生～６年生
■ 参加実績　23 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル深川
　　藤谷果樹園　アグリ工房まあぶ

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目						受付	閉会式	発見隊① 「歴史・観光・農業」の 魅力を発見！ りんご狩り、温泉入浴など			夕食	ふりかえり	入浴 自由交流		就寝
2日目	起床	朝食	清掃点検	発見隊② 「食」を発見！ そば打ち体験		解散									

■ アクティビティの工夫

○　地域の「歴史・観光・農業・食」を理解するきっかけとなる体験を意図的に設定した。
○　ふりかえりの時間を設定し、参加者が体験から得た気づきの深化、補充に努めた。

「旧鷲田農場事務所」見学の様子

■ 当日の様子

１日目は、深川市音江地区のフットパスコースを歩きながら、深川の歴史や農業、観光の魅力を満喫した。深川市指定有形文化財の「旧鷲田農場事務所」見学し、子どもたちは明治時代に建てられた豪壮な建物に驚いていた。

次に戸外炉峠の「ネコバス」を見学した。もともとは農作業の休憩場所として設置していたが、地域のまちおこしグループがネコバス模様に塗装したもので、そのステキなバスを見つけると、参加者からも大きな歓声が上がっていた。

最後に、「農業の魅力発見」として藤谷果樹園でのりんご狩りに挑戦した。職員の方から美味しいりんごの見分け方を教わり、その後は真剣な表情で園内のりんごを観察しながら収穫にチャレンジしていた。

国見峠から深川市内を展望する様子

フットパスコースのゴールである、アグリ工房まあぶに到着する頃にはすっかり日が暮れていたが、全員が元気よく到着すること出来た。到着後は観光客にも好評な「まあぶ温泉」で入浴した。湯船の中では、お互いに汗を流したり、体験したことを交流したりしながら、冷えた体を暖めることができた。

２日目は、深川名産のそば粉を使って「そば打ち」を体験した。水を少しずつ加えながらこねる作業では、グループで協力しながら作業に取り組んでいた。また、生地を切る作業では、できるだけ同じ太さに揃えようと真剣な表情で切断していた。

子どもたちからは、「初めてのそば打ちは難しかったが、地元のそば粉を使った手作りのそばは、とても美味しかった」という感想が聞かれた。

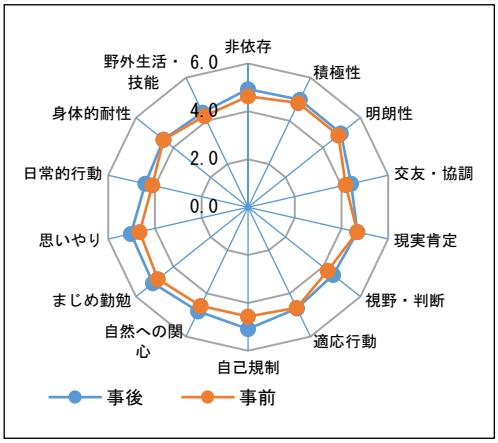
りんご狩りの様子

３　事業評価

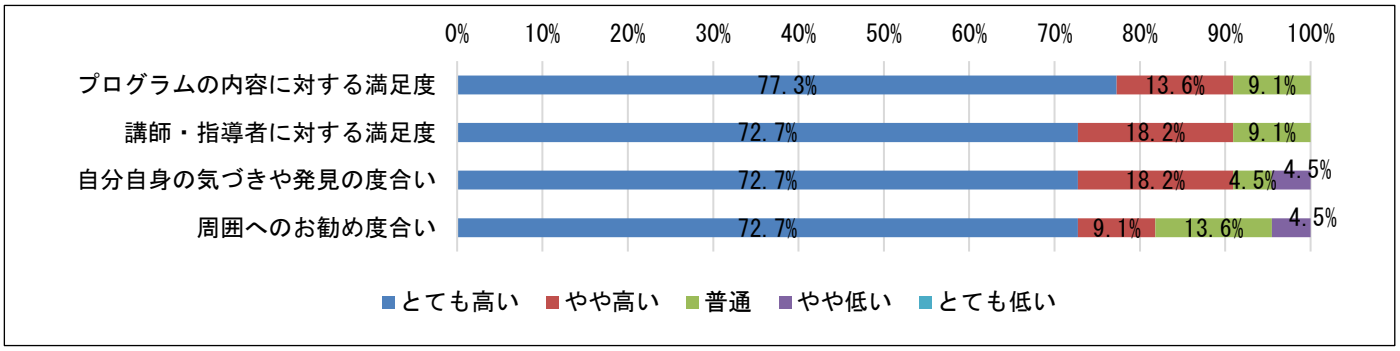
○　IKR 調査結果によると、「自己規制」が 0.5 ポイント、「思いやり」が 0.4 ポイント上昇しており、協力しながら集団で活動したことが要因だと考えられる。

○　参加者からは、「フットパスコースを歩きながら、りんご狩りや温泉入浴など地域の魅力を十分に楽しむことが出来た」という感想が聞かれた。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　地域の教育資源を活用して、見学だけでなく、りんご狩りや温泉入浴など体験の機会を意図的に設定することで、参加者の興味や関心を高めることができた。

○　そば打ち体験は、限られた時間での体験となったが，講師の柔軟な指導のおかけでスムーズに進めることができた。グループで協力して作ったそばを美味しく食べることで参加者の満足度も高かった。

ネコバス前での集合写真

■　課題

地域のフットパスコースを歩く際は、地域の方との関わりを設定したり、見学場所でのクイズやポイントラリーなどの工夫をしたりすると、より参加者の興味や関心を高めることにつながる。

森　地域の「よさ」（歴史・文化・食・自然環境など）を学ぶ体験プログラム

われら〇〇発見隊

1　事業のねらいと概要

自然体験活動や創作活動などを通して、地域の自然、文化、食生活などのよさを知り、地元への理解を深め、愛する心を育む。

■ 実 施 日　令和２年１月 11 日（土）～12 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小学３～６年生
■ 参加実績　43 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル森
　　北海道大沼国際セミナーハウス、大沼森林公園
■ 運営協力　金澤晋一氏、手繰昭夫氏

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目			受付	開会式	アイスブレイク	昼食	大沼散策		ホットミルク・スノーキャンドルづくり		夕食	星空観察	入浴	就寝準備	就寝
2日目	起床・朝食		絵手紙づくり		交流	閉会式									

■ アクティビティの工夫

○　地元自然ガイドに、大沼周辺の自然や動物の様子について説明を受けながら散策を行った。
○　地元の絵手紙愛好家に絵手紙を教えてもらい、地域住民との交流を図った。
○　体験したことを基に、SDGs の目標と照らし合わせ、地元の「よさ」を守るために自分たちでできることはなにかを考え、参加者同士で交流した。

森の散策の様子

■ 当日の様子

１日目は、地元自然ガイドの金澤氏を講師に、大沼森林公園の散策を行った。森の生態系や動物の足跡や巣、巣穴など様々などなものを発見することができた。ネイパルに戻って、特産品の牛乳を使ったホットミルクづくりを行い、体を温めた。夜は、星空観察を行い、満月の明るい空でも見つけることができる星座を観察し、さらに、スノーキャンドルに火を灯し、キャンドルの明るさや火の暖かさを感じながら、冬の長い夜の時間を過ごした。

星空観察の様子

２日目は、１日目に体験したことを基に、絵手紙づくりを行った。地元絵手紙愛好家の手繰氏や地域の方と交流しながら、大沼の自然の様子や星空、キャンドル、ホットミルクなど思い出を絵手紙で表現した。最後の交流の時間には、SDGs について学び、森の散策や星空観察など環境に関わることや、特産品を味わうことから食料の問題など、体験したことがどのように結び付くのかを、グループで意見交流した。また、参加者一人一人が地元の自然や文化、食べ物などを守る担い手であることを確認した。

絵手紙づくりの様子

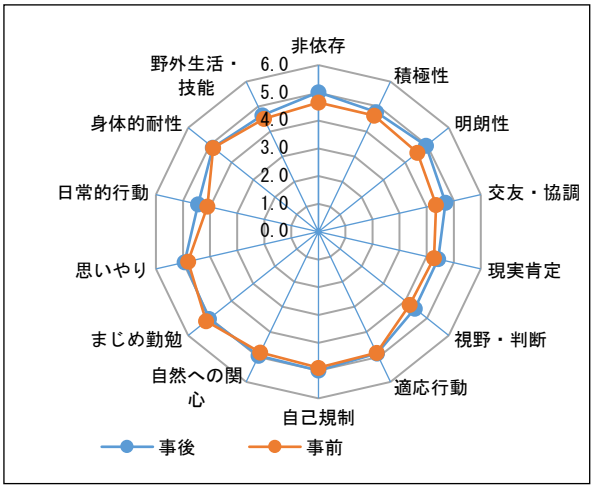
３　事業評価

○　IKR 調査結果によると、「非依存」「明朗性」が 0.4 ポイント向上した。

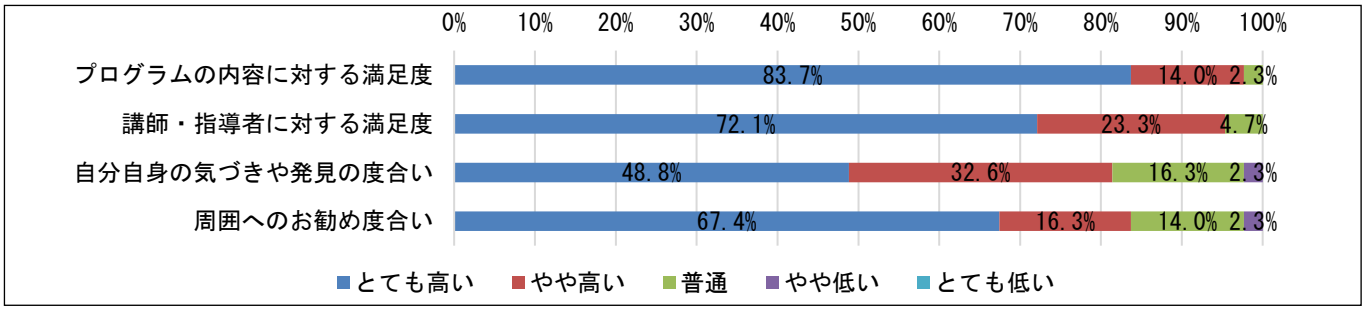
○　アンケートでは、満足度が 97.7%と高く、参加者がそれぞれに発見をテーマに充実した体験ができたことが伺える。

○　自由記述欄に、「ホットミルクを鍋で作ったことがなく、家でも作りたい。」と書かれていた。活動の幅を広げ、体験したことが実生活に結びつく力になるよう、今後も工夫していく。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　金澤氏に森の中を案内していただいたことで、より地元の自然への関心や理解が深まったと考える。さらに、手繰氏や絵手紙ボランティアの皆さんなど地元の人と触れ合いの時間が持てたことは良かった。

○　ホットミルクづくりや絵手紙、星空観察など、「初めての活動だ。」という参加者が多く、興味・関心の広がりや、生活に結び付く力を身に付けるきっかけになったのではないかと考える。

完成した絵手紙

■　課題

○　冬休み中の開催だったため、道南地域以外からも参加者が数人おり、自分の地域へ戻って、地元の「よさ」を発見できるよう、振り返りなどの工夫が必要だと感じた。

北見　地域の「よさ」（歴史・文化・食・自然環境など）を学ぶ体験プログラム

ネイパル探検隊

1　事業のねらいと概要

フィールドワークを通して、自分たちの地域と他の地域の歴史や文化、自然や環境、生活や産業等を比較しながら調べることで、自分たちの住む北海道を理解できるようにするとともに、北海道への興味や関心、愛着を高める機会とする。

■ 実 施 日　令和元年 10 月 12 日（土）～14 日（月）　（２泊３日）
■ 参加対象　小学３年生～６年生
■ 参加実績　21 名
■ 活動場所　ネイパル北見、ネイパル足寄
池田町社会福祉協議会ボランティア
町民活動支援ルーム ROCOCO

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目			開会式	オリエンテーション	仲間づくりのオリエンテーション	昼食	世界で活躍した常呂のカーリングの歴史を探りフロアカーリングに挑戦		バス移動 ネイパル北見→ ネイパル足寄	夕食	オホーツクと十勝の歴史や文化の違いについて探ってみよう		入浴	就寝準備	就寝
2日目	起床・朝食	フィールドワーク 〔池田町〕 ・北海道ではじめにカーリングを始めた町の歴史を探る ・高齢者の健康に活躍する町の取り組みを探る ・ぶどう栽培と厳しい気候の関係とワインづくりが成功するまでの苦労などを探る ・養豚と豚丼のつながりを探り池田町の豚丼を食べる 〔帯広市〕 ・ビート資料館でてん菜で砂糖を作っているのは北海道だけという秘密を探る								夕食	今日調べたことをまとめて、ふりかえりしよう		入浴	就寝準備	就寝
3日目	起床・朝食	バス移動 ネイパル足寄→ ネイパル北見			昼食	３日間で勉強したことをまとめて、ふりかえりしよう									

■ アクティビティの工夫

○　自分たちの地域と隣接する十勝地方の歴史や文化、自然や環境、生活や産業等をオホーツクと比較しながら体験を交えて学ぶことで、日頃気付いていない地域の特色を発見できる展開とした。

○　厳しい気候風土の中でも工夫と努力で産業や文化を切り開いた先人の熱意を知ることで、北海道への愛着を深めることができるようオホーツクや十勝の気候風土に即した題材を採用した。

フロアカーリング体験の様子

■ 当日の様子

初日は、仲間づくりから開始し、本事業の参加者同士及びボランティアとの関係づくりを行った。次に、常呂町の体育指導員が十勝の池田町で学び、地域での普及を試みたカーリングの歴史を学んだ。始めは、地元の人たちに受け入れられなかったという苦労談やオリンピックまでの道のりの険しさなどに参加者は驚いていた。

グループワークで発表する様子

２日目は、カーリングの歴史や高齢者が生き甲斐を持ち健康に活躍し続けられる街づくりの取組を学んだ。はじめに、ふまねっとサポーターから、運動方法を学び、実際に体験も行った。次に、ぶどう畑を見学し、その後、町の将来を案じ、厳しい気候の下、ぶどう栽培に挑戦し、苦労しながらワインを作り、町を豊かにした話を聞いた。参加者は、十勝とオホーツクの意外な類似点に気付き、先人たちの熱意と工夫があったことで、現在の自分たちの生活があることを理解した。

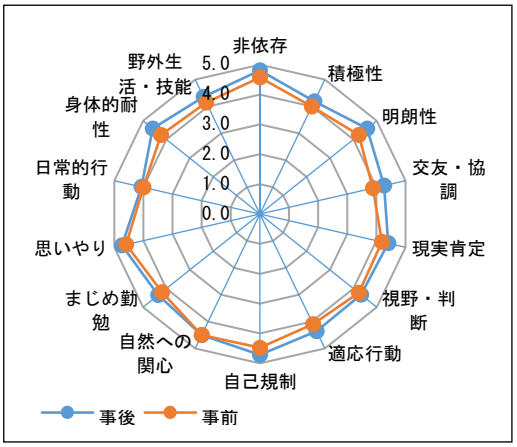
ふまねっと運動を体験する様子

3　事業評価

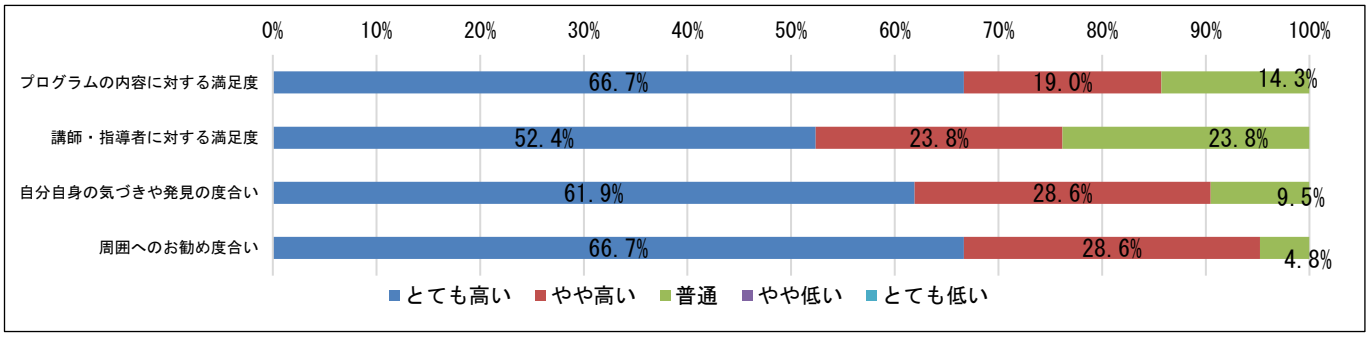
○　IKR 調査結果によると、「明朗性」、「交友・協調」、「身体的耐性」が約 0.4 ポイント向上しており、フィールドワークをとおして良好な交流が持てたこと、努力することの大切さに気付いたことを読み取ることができる。

○　参加者からは、「生きがいを持つことや地域の人と交流することが大切」、「北海道の気候をうまく利用したり、工夫して作物を育てたりしていることに感心した」、「北海道やオホーツクがいい所だと思ったら好きになった」などの感想があった。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



4　まとめ

■　成果

○　他の地域を題材にして学ぶことで、客観的に自分たちの地域や北海道を見つめ直し、新たな発見をすることができた。

○　先人の努力や工夫があって北海道が築かれたこと、自分たちもひたむきに努力することが大切であると理解できた。

○　地域づくりには、世代間の交流が必要なこと、一人ひとりが地域で活躍することの大切さを学ぶことができた。

手作りストーンを持ち上げる参加者

■　課題

○　遠方への移動を伴う事業のため、バス車中で、事前事後学習に取り組んだが、子どもたちの疲労などもあり、十分な時間を確保することができなかった。今後は、講義形式の学習だけではなく、レクリエーション要素のあるクイズ学習を取り入れるなど、バス車中でも負担のかからない学習方法の工夫を行い、移動時間を有効活用したい。

足寄　地域の「よさ」（歴史・文化・食・自然環境など）を学ぶ体験プログラム

ふるさと発見隊

1　事業のねらいと概要

北海道の豊かな自然や歴史・文化・食・産業等を学ぶことをとおして、ふるさとへの愛着や誇りを育む。

■ 実 施 日　令和元年６月 22 日（土）～23 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　小中学生とその家族
■ 参加実績　56 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄、石田めん羊牧場、十勝がんこ農場
■ 運営協力　足寄町教育委員会、石田めん羊牧場、十勝がんこ農場

2　プログラム

	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00
1日目								受付	開会式	～北海道を代表する食文化～ 羊牧場を見学しよう！　羊毛クラフトを作ろう！　ジンギスカンパーティー					入浴 自由交流	就寝準備	就寝
2日目	起床	清掃	朝のつどい	朝食	活動準備	～今も解明されていない巨大化のなぞ～「ラワンブキ」を刈ろう！		ふりかえり	閉会式							

■ アクティビティの工夫

○　ふるさと北海道への理解を深めるとともに北海道の魅力を再認識することができるよう、「北海道遺産」をテーマとして取り上げ、北海道を代表する食文化として登録されている「ジンギスカン」と地域資源の活用として足寄町螺湾地域にしか生育しない「ラワンブキ」を題材にプログラムを構成した。

○　身近にある「地域のよさ」を再認識する機会となるよう、「北海道遺産として次世代に継承したいもの」について考える時間を設けた。

羊の毛刈り体験の様子

■ 当日の様子

１日目は、「石田めん羊牧場」にて、シープドックショーや羊の毛刈りショーを見学した後、ネイパル足寄に戻り、羊毛を使った創作活動に取り組んだ。

シープドッグショーでは、牧羊犬が巧みに羊を集める姿に拍手が湧き、毛刈りショーでは、手際よく羊の毛が刈り取られていく様子を興味深く眺め、ひと回り小さくなった羊の姿に笑みをこぼしていた。

羊毛を使った創作活動では、好きな色の羊毛に洗剤をか

ジンギスカンパーティーの様子

けてフェルトボールを成型し、金具を取り付けてオリジナルのキーホルダーやストラップを完成させた。

夜は、ジンギスカンパーティーで、北海道を代表する食文化に親しむとともに、参加者同士の交流を深めた。

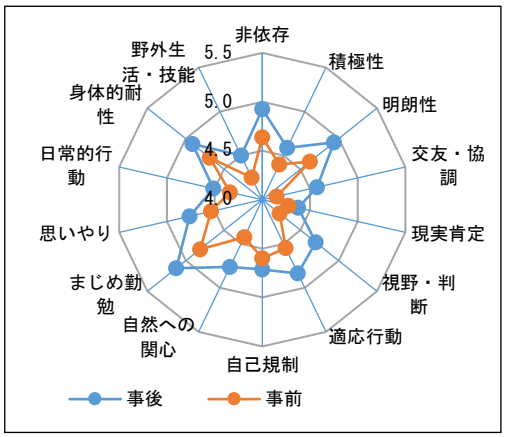
２日目は、「十勝がんこ農場」にてラワンブキの刈り取り体験を行った。一人一本ずつ刈り取り作業を行い、自分の背丈をはるかに超えるラワンブキを手に満足そうに顔をほころばせていた。

ラワンブキ刈り取り体験の様子

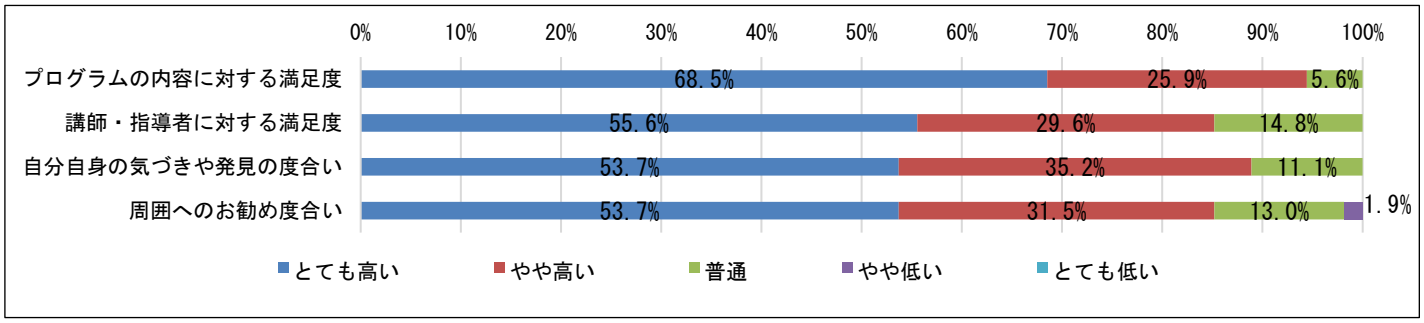
３　事業評価

○　参加者から「犬が仕事として見回りをしたり、羊を集めたりするのがすごいと思った」「羊の毛がとてもふわふわしていて気持ちよかった。」「見たこともない大きさのラワンブキに驚いた」という声があり、北海道の文化に親しむ体験活動をとおして北海道への理解を深めるとともに、ふるさとの魅力を感じることできたことが伺える。また、保護者からの「北海道という地に産まれ、北海道の文化をもっと子どもと知っていきたいと思う」という声からも、ふるさと北海道のよさを再認識する機会となったことが伺える。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　地域のめん羊牧場やラワンブキ栽培農家の方々との連携により、家庭では体験することのできない活動や地域の特質を生かした体験活動を提供することができ、北海道への理解を深めるとともに、ふるさとのよさを感じてもらうことができた。また、「北海道遺産として次世代に継承したいもの」について考える活動をとおして、身近にある地域の魅力にも目を向けることができた。

■　課題

○　小学校２年生以下を含む家族での参加と小学校３年生以上の子どもだけでの参加者がある事業形態となったが、それぞれの家族や子どもだけの参加者のグループのペースが異なり、全体で集合する時間に全員が集まらないなどの場面が多く見られた。家族が含まれる事業の運営では、全体で集まる場面を極力少なくするなど、プログラムの構成や進行を工夫する必要がある。

厚岸　地域の「よさ」（歴史・文化・食・自然環境など）を学ぶプログラム

アイヌ文化にふれよう

1　事業のねらいと概要

アイヌ文化に触れ、その精神や知恵の奥深さを学ぶとともに、先人を敬う心やふるさとへの愛着、誇りを育む。

■実 施 日　令和元年 11 月２日（土）～４日（月）　（２泊３日）
■参加対象　小学３～６年生
■参加実績　38 名
■活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル厚岸

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00
1日目						受付	開会式	アイヌ文化とは	アイヌ語に触れよう・アイヌ語カルタ		夕食	アイヌの昔話	入浴	就寝準備	就寝
2日目	起床	朝食	荷物整理	アイヌの星物語・プラネタリウム鑑賞	昼食	アイヌの子の遊び・弓矢づくり			アイヌの楽器・ムックリづくり		夕食	アイヌの歌・踊り	入浴	就寝準備	就寝
3日目	起床	朝食	部屋点検	アイヌの文様・切り絵	閉会式										

■ アクティビティの工夫

○　アイヌ文化に触れるきっかけとして、身近な北海道の地名からアイヌ語に触れたり、アイヌの物語を読むなどの活動を取り入れたりした。

○　アイヌ文化への理解を深めるため、工芸や歌・舞踊について専門的な知識・技術をもった「アイヌ文化活動アドバイザー」の指導のもと、体験活動を行った。

アイヌ語カルタの様子

■ 当日の様子

１日目は、アイヌ民族文化財団発行「アイヌ民族：歴史と文化」を用いて、アイヌ文化についての説明を行った。次に、『アイヌ語に触れよう』では、アイヌ語クイズやアイヌ語カルタなどのゲームを楽しみながらアイヌ語に触れた。『アイヌの昔話』では、職員による絵本の読み聞かせの後、それぞれが興味をもった図書を選び、読書を行った。

２日目の『アイヌの星物語』では、厚岸町海事記念館プラネタリウムを訪れ、アイヌに伝わる星座の物語を鑑賞した。『アイヌの子の遊び』では、アイヌ文化活動アドバイザー　澤井和彦氏の指導のもと、ヤナギの枝の皮をナイフで剥いで「シノッポンク（遊び弓）」を作製した。完成した弓矢で、動物を模した的を射る遊びを体験し、アイヌの子が遊びながら狩りの腕を磨いたことを学ん

「アイヌの子の遊び」の様子

後『アイヌの楽器』では、「ムックリ（口琴）」作りを行った。彫刻刀で弁の部分の竹を薄く削る作業に取り組み、参加者各々がムックリを完成させた。夕食後には、アイヌ文化活動アドバイザー　桃井芳子氏と伊藤夕美氏の指導により、アイヌの歌や踊りを体験した。全員で炎を囲み、自分たちの作ったムックリを演奏したり、「ウポポ（座り歌）」や「フンペ・リムセ（クジラの踊り）」などを楽しんだりした。

３日目の、『アイヌの文様』ではアイヌ文様を折り紙の切り絵で制作した。折り紙を折り、型紙に沿って切ったものを開くと、アイヌ文様が現れる。できた文様を台紙に貼り、３日間の感想を記入したものをラミネート加工し、家庭へと持ち帰った。

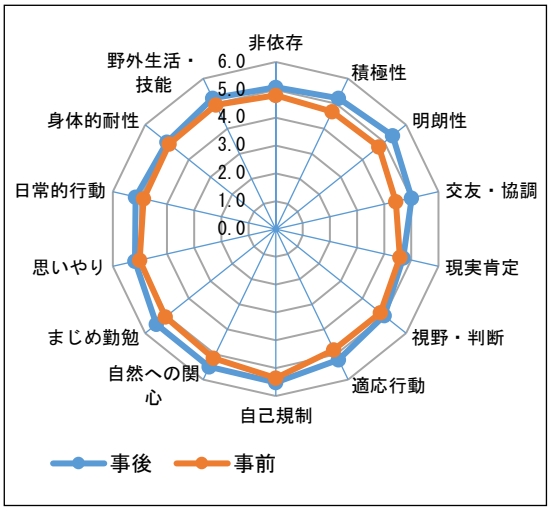
アイヌの歌・踊りの様子

３　事業評価（アンケートや参加者の声などから読み取れること）

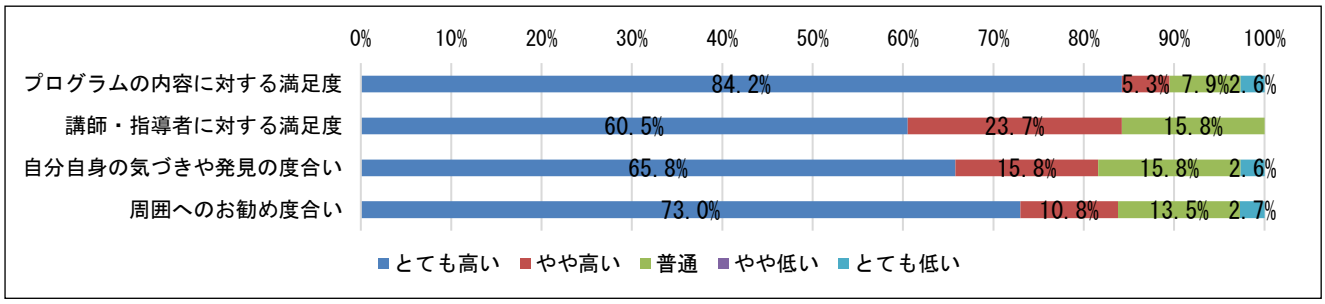
○　ＩＫＲ調査の結果から、「明朗性」「交友・強調」の２項目で0.6ポイント上昇している。３日間のグループの仲間と行動を共にしたことや、弓矢作りなど難易度の高いプログラムに挑戦したことで、協力し合いながら前向きに課題に取り組む姿勢が育まれたと考える

○　参加者アンケートの結果からは、「アイヌ文化についてもっと知りたい」「アイヌ語を話せるようになりたい」などの感想が見られ、アイヌ文化の学習について意欲が高まったことが事業に対する満足度を得られたと推察する。

IKR 調査レーダーチャート



アンケート結果



４　まとめ

■　成果

○　アイヌ文化活動アドバイザーの指導のもと体験活動を行うことで、専門的な知識や技能を学ぶことができた。

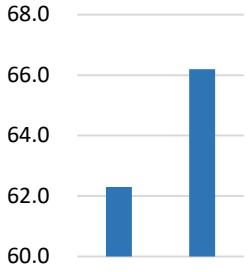
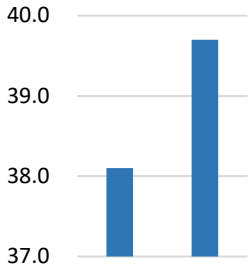
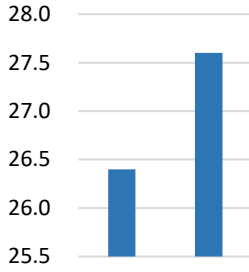
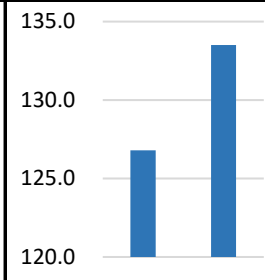
■　課題

○　弓矢や楽器の制作体験は好評であったが、刃物の使用など難易度の高い作業が含まれるため、安全管理や活動のサポートに十分な人員配置が必要である。

アイヌの文様切り絵の様子

本テーマにおけるIKR調査結果

生きる力の向上　事前　126.8 点 ⟶ 事後　133.5 点　（+ 6.7 点）

	①心理的社会的能力の変容	②徳育的能力の変容	③身体的能力の変容	①～③の合計「生きる力」の変容
質問数・得点範囲	14問（得点範囲14～84点）	8問（得点範囲8～48点）	6問（得点範囲6～36点）	28問（得点範囲28～168点）
全有効回答の総得点の平均値				
数値的推移	事前→事後	事前→事後	事前→事後	事前→事後
	+ 3.9	+ 1.6	+ 1.2	+ 6.7

能力		調査項目	事前	事後	増減
生きる力（総合）			126.8	133.5	6.7
心理的社会的能力			62.3	66.2	3.9
	非依存性	1. いやなことは、いやとはっきり言える	4.4	4.9	0.8
		15. 小さな失敗をおそれない	4.6	4.9	
	積極性	11. 自分からすすんで何でもやる	4.5	4.7	0.4
		25. 前向きに物事を考えられる	4.5	4.7	
	明朗性	5. だれにでも話しかけることができる	4.4	5.0	0.8
		19. 失敗しても立ち直るのがはやい	4.7	4.9	
	交友・協調	7. 多くの人に好かれている	3.7	4.0	0.6
		21. だれとでも仲よくできる	4.8	5.1	
	現実肯定	9. 自分のことが大好きである	3.8	4.0	0.3
		23. だれにでも、あいさつができる	5.1	5.2	
	視野・判断	3. 先を見通して、自分で計画が立てられる	4.1	4.5	0.6
		17. 自分で問題点や課題を見つけることができる	4.5	4.7	
	適応行動	8. 人の話をきちんと聞くことができる	4.8	4.9	0.4
		22. その場でふさわしい行動ができる	4.4	4.7	
徳育的能力			38.1	39.7	1.6
	自己規制	14. 自分かってな、わがままを言わない	4.6	4.8	0.4
		28. お金やモノのむだ使いをしない	4.9	5.1	
	自然への関心	6. 花や風景などの美しいものに感動できる	4.5	4.8	0.5
		20. 季節の変化を感じることができる	4.8	5.0	
	まじめ勤勉	12. いやがらずに、よく働く	4.5	4.9	0.4
		26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりやる	5.2	5.2	
	思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.8	5.0	0.3
		16. 人の心の痛みがわかる	4.8	4.9	
身体的能力			26.4	27.6	1.2
	日常的行動力	13. 早寝早起きである	4.2	4.5	0.4
		27. からだを動かしても、疲れにくい	4.4	4.5	
	身体的耐性	4. 暑さや寒さに、まけない	4.4	4.7	0.3
		18. とても痛いケガをしても、がまんできる	4.7	4.7	
	野外技能・生活	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	4.8	5.0	0.5
		24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3.9	4.2	

Ⅲ. 共通事業の実施報告

1 幼少期の子どもをもつ家庭への体験プログラム

（1）プログラム開発の背景

国では、都市化や核家族化、少子化などによる人間関係の希薄化を背景として、子育て中の親の孤立、不安が大きくなっていることを受けて、地域や社会全体で子どもたちを見守り、育てる取組が重要であるとの認識を示している。

本道においても、とりわけ幼児期は生涯にわたる人間形成の基礎として重要な時期であることから、子育て中の保護者が居住地域の中で気軽に子育てについて相談したり、学んだりすることができる体制づくりを進めていくこととしている。

このことから、道立青少年体験活動支援施設においても、親子で同じ体験を共有したり保護者同士で子育ての経験を話したりする機会を提供し、体験を通して親子間や家族間の交流を深めることができるプログラムの更なる普及を図っていく。

（2）普及のポイント

親子でともに体験する活動の機会を充実させ、そこから生まれる感動を共有できるようにすることが重要である。同時に、幼児期の子どもをもつ親世代の、子育ての悩みを分かち合い、相談し合える場を設けることも普及のポイントとなる。

（3）各施設における事業名と主なアクティビティ等

砂川 **あっぷるクラブ**	
令和元年９月 28 日（土）～29 日（日）（１泊２日）	リンゴ狩り体験、ミニコンサート、アップルパイ作り体験など
深川 **親子のびのびキャンプ**	
令和元年８月 24 日（土）～25 日（日）（１泊２日）	サンドアート体験、ミニコンサート・楽器体験、自然散策、調理実習など
森 **われらネイパルファミリーお泊まり編**	
令和元年８月 24 日（土）～25 日（日）（１泊２日）	ネイチャーゲーム、野外炊事、バルシューレ体験、星空観察など
北見 **家族ふれあい広場**	
令和２年１月 18 日（土）～19 日（日）（１泊２日）	子育て講座、アイスクリーム作り体験、凧作り・凧揚げ体験、そり引き遊びなど
足寄 **家族ふれあい広場　～ほっかいどうファミリーキャンプ in あしょろ**	
令和元年８月３日（土）～４日（日）（１泊２日）	テント泊体験、子育て講話、野外炊事、熱気球体験など
厚岸 **家族ふれあい広場**	
令和元年８月 10 日（土）～11 日（日）（１泊２日）	ハイキング、野外炊事、子育て茶話会など

砂川　幼少期の子どもをもつ家庭に対する体験プログラム

あっぷるクラブ

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年９月 28 日(土)～　９月 29 日(日)　（１泊２日）
■ 参加対象　幼児（４歳以上）～小学３年生及びその保護者
■ 参加実績　24 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル砂川
　　三谷果樹園
　　砂川市地域活動交流センターゆう
■ 運営協力　ボランティア：大学生４名　高校生１名

■ 取組の重点
○　親子での体験活動をとおして、家族の絆を深めること、他家族とのコミュニケーションの機会の場とすることを目的とした。
○　りんご狩りや、りんごのお菓子作りなど、地域の特色を活かした興味ある活動を取り入れ、魅力的なプログラムとなるようにした。

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	9:00	20:00	21:00	22:00
1日目	受付						集合・説明	りんご狩りをしよう 場所:三谷果樹園（砂川市）	受付 出会いのつどい	夕食・休憩	お茶しませんか（クラリネット&ピアノのミニコンサート）		入浴 自由交流		就寝
2日目	起床・朝食		アップルパイをつくろう 場所：砂川市地域交流センター「ゆう」				親子でメッセージ交換	振り返り・つどい	12:30 解散						

■ 活動の様子

初日は絶好の秋晴れの中、砂川市、赤平市、岩見沢市、札幌市から、10 家族 24 名が集い、りんご狩りを楽しんだ。今年は豊作年で、２本の木からコンテナ５杯分収穫することができた。子どもを親が肩車したり、親子や兄弟で体を支い合いながら、高い場所のりんごを収穫するなど、ほほえましい光景が随所で見られた。りんごはその場で試食し、もぎたての味や歯ごたえを楽しむことができた。

夜の部は、深川中学校教頭岡田智英氏と美香夫人をお招きし、収穫したりんごを味わいながらクラリネットの音色を堪能した。子どもが飽きないように、アニメソング等を演奏し、親も子も満足した様子であった。

クラリネットが主役の演奏会は初めてという家族が多く、「貴重な体験ができた」という感想を聞くことができた。

りんご狩りの様子

ミニコンサートの様子

２日目は、砂川市地域交流センターゆうで「アップルパイ作り」を行った。アップルパイの老舗ナカヤ菓子店から、パティシエの菅野眞人氏を講師に、ナカヤ流アップルパイの作り方を学んだ。

パイ生地は事前に準備して頂いたものを使ったが、りんごは初日に収穫したものを使用した。りんごの味を引き立てる煮詰め方を教えて頂き、家庭毎に慎重にりんごを煮詰めていた。

りんごを包むパイ生地の形は様々で、長方形のものや丸形のものなど、各家庭の個性が発揮されていたが、味は抜群だったようで笑顔が絶えなかった。

試食後は親子でメッセージ交換。２日間を振り返り、その想いを手紙にしたためた。

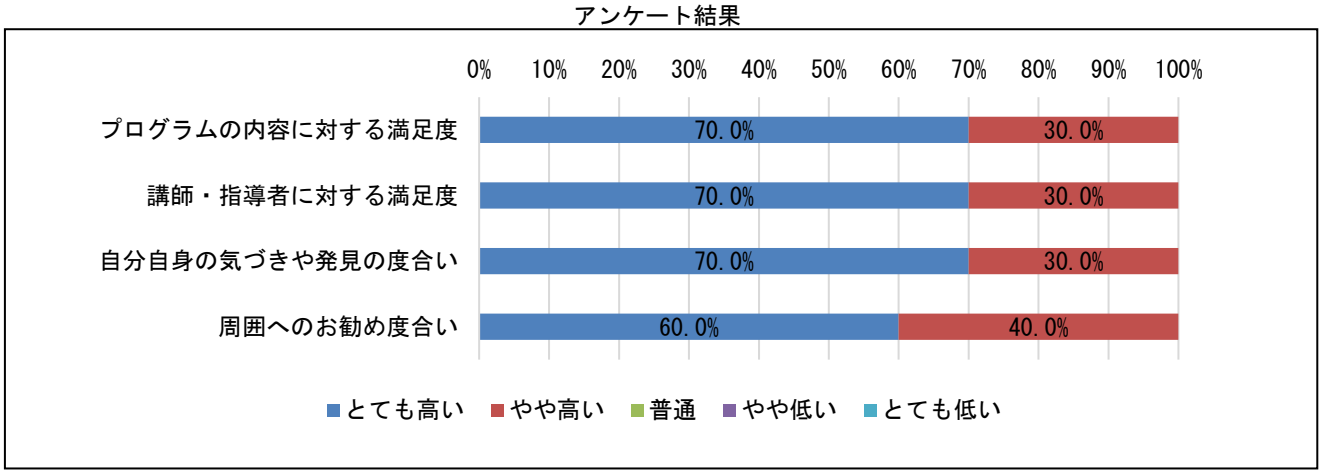
アップルパイ作りの様子

３　事業評価

アンケートからも満足度の高さが伺える。全員が全ての項目において、「とても高い」「やや高い」を選択しており、参加者にとって有意義な事業になったと考えられる。又、「来て良かったと思える事業なので、継続的に実施してほしい」「ゆったりとした時間配分で楽しめました。アップルパイを作るコツも知れて良かったです」といった好意的な感想を聞くことができた。ゆとりのある日程で地域の魅力を存分に味わえるようプログラム構成をしたことが、高評価に繋がったと考える。

親子でメッセージ交換の様子

アンケート結果



４　事業全体をとおして

余裕がある日程で、親子のふれあいの時間を確保しながら、興味・関心が高い活動をプログラムしたことで、参加者の満足度が高まったと考える。参加対象を３年生まで引き下げたことにより、参加者数は減少したが、その分活動量や活動場所が増え参加者には好評であった。次年度も今年度同様の募集人数で実施することが適当だと考える。又、「親子一緒に活動する時間」と「別々に活動する時間」を検討し活動内容を工夫することができれば、参加者の満足度がさらに高まると考える。

深川　幼少期の子どもをもつ家庭に対する体験プログラム

親子のびのびキャンプ

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年８月 24 日（土）～８月 25 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　幼児から小学校３年生までの子どもとその保護者
■ 参加実績　27 名（10 家族）
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル深川
■ 運営協力　講師：プロ・サンドアーティスト　森マサミチ氏
　　深川市立深川中学校教頭　岡田智英氏
　　ピアノ講師　岡田美香氏

■ 取組の重点
　親プログラムで扱う「子どもとのコミュニケーション」の学びを、事業の中で様々な形で実践できるよう、４種類の体験プログラムを用意した。

2　プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目								開会式	親プロ 子プロ	ちょいアート		夕食	ちょいミュージック	入浴・就寝		
2日目	ちょいネイチャー	朝食	ちょいクッキング		閉会式											

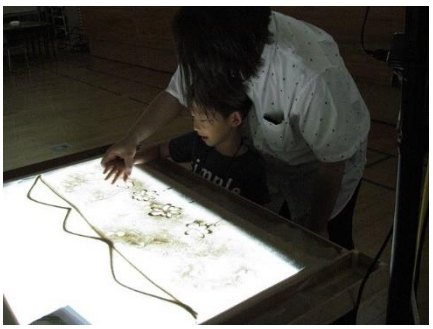
■ 活動の様子

　本事業は４つの体験活動（ちょいプログラム）をとおして、保護者が子どもとのコミュニケーションの在り方を学ぶ事業であった。親子分離学習で保護者がペップトーク（前向きになれる声かけ）について学んだ後、「ちょいアート」「ちょいミュージック」「ちょいネイチャー」「ちょいクッキング」の４つの活動に取り組みながら、親子のコミュニケーションを楽しんだ。

　１日目、「ちょいアート」では、プロ・サンドアーティストの森マサミチ氏によるパフォーマンス披露の後、同氏の指導によるサンドアート体験を行った。プロの講師による本格的な指導を受け、最後には大スクリーンで成果発表を行い、参加者全員が貴重な体験に感激の言葉を口にしていた。

　「ちょいミュージック」では、深川市立深川中学校の岡田智英教頭と奥様の美香氏によるミニコンサートと楽器体験を行った。子どもたちになじみ深い曲を３曲演奏した後、個人所有のクラリネット、フルート、サックス等々をズラリと並べて「吹いてみたい人！」と声をかけると、大人も子どもも喜々として、普段めったに触れることのない様々な楽器の試奏に時間を忘れていた。

サンドアート体験の様子



サンドアート体験の様子

２日目、「ちょいネイチャー」では、朝に３０分間、散歩気分で無理なく自然散策を行った。クモの巣やタンポポの茎が雨露で装飾された「雨上がりならでは美」を楽しんだ。

「ちょいクッキング」では、「こねる、切る、焼く」で簡単にできるデザートを紹介し、調理実習を行った。クッキングはコミュニケーションの場としても最適で、親子で楽しみながらいろいろな道具を使ったデザートづくりに取り組んでいた。

２日間の体験活動を通して、参加者からは「貴重な体験がたくさんできて本当に楽しかったし良い経験になった」「子どももとても楽しんでいた。ぜひまた来たい」などの感想が聞かれた。

ミニコンサートの様子

クラリネット試奏の様子

親子クッキングの様子

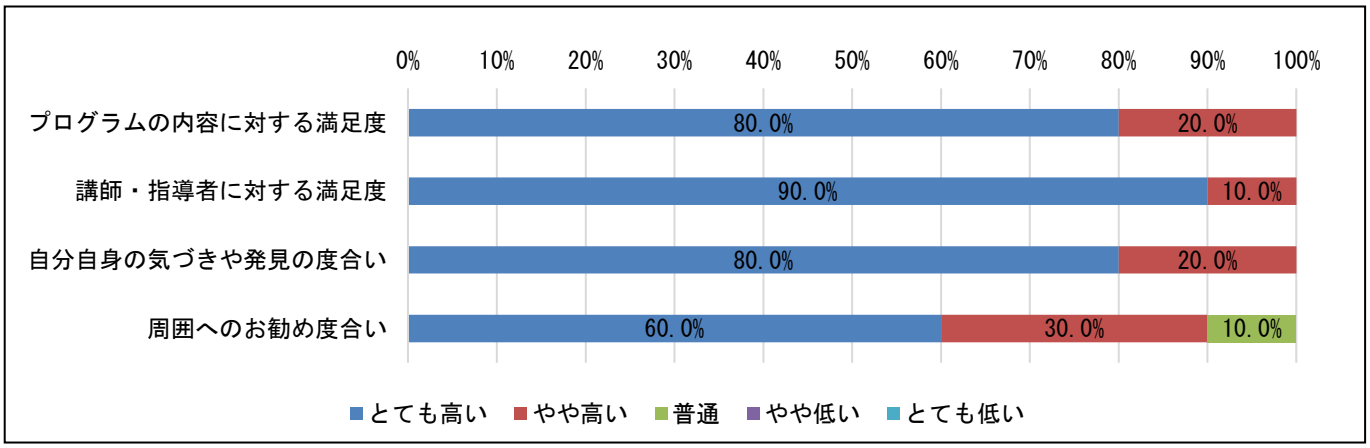
３　事業評価

○　「ちょいアート」「ちょいミュージック」は体験としては想定以上の効果をあげたと考えるが、「家族のコミュニケーション」という点においては一工夫必要であった。

○　「ちょいネイチャー」については、担当者の声かけが子ども中心になったこともあり、十分に保護者と子どもとのコミュニケーションを生む活動に至らなかった

○　「ちょいクッキング」については、親プログラムの学びを意識した保護者同士の会話も聞かれ、十分に目標に迫ることができる内容・展開であった。

アンケート結果



４　事業全体をとおして

「地域の担い手づくり」という現代社会教育の役割からすると、リピーターの参加者（保護者）にはなんらかの役割を担ってもらったり、企画のアイデアをもらったりするということも一考の余地がある。いつでもできることではないが、職員の指導の下でリピーターの参加者が企画・運営に携わりながら新規参加者を呼びこんで、住民主体の事業運営をするという事業づくりのチャンスをうかがっていきたい。

われらネイパルファミリー　お泊まり編

1　事業のねらいと概要

親子で自然と触れ合う活動を通して、幼児の自立心の芽生えを促すとともに、家族間の交流や親子の絆を深め、家庭教育の充実を図る。

■ 実 施 日　令和元年８月 24 日（土）～25 日（日）　（１泊２日）
■ 参加対象　３歳以上の幼児から小学校２年生までの児童とその保護者
■ 参加実績　17 家族 48 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル森

■ 取組の重点
○　親子での体験活動をとおして、家族の絆を深めること、他家族とのコミュニケーションの機会の場とすることを目的とした。
○　地域の特色を活かした興味ある活動を取り入れ、魅力的なプログラムとなるようにした。

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目						受付	開会式	アイスブレイク	「森で遊ぼう」		「親子別活動」	入浴	夕食	星空観察 読み聞かせ	就寝準備	就寝
2日目	起床・朝食		「ピザをつくろう」		閉会式										

■ アクティビティの工夫

○ 自然と親しむゲームや星空観察、ピザづくりなど、家族で触れ合いながら、今後も家族で楽しむことができたり、子供たちのお手伝いに結び付いたりする活動を取り入れた。
○ 親子別活動を行い、子供たちの自立心を促したり、子育てについて他家族間で交流したりする機会を設定した。
○ 宿泊で行う本事業の前に、２回日帰りで実施し、継続して活動を行うことで、子供たちが進んで活動に取り組むことができるようにした。

自然と親しむゲームの様子

■ 当日の様子

１日目は、キャンプサイトを使って、親子で自然に親しむゲームと、焚き火を行い焼きマシュマロを作った。また、親子別活動では、子供たちはバルシューレで体を動かし、翌日のピザづくりに向けてレクリエーションを行った。夜は、星空観察を行い、家族で星座早見表を見ながら実際に星座を観察した。「初めて子供と星空を見た。」という保護者もいた。

焚き火の様子

２日目は、ピザづくりを行った。生地から作ったため、小麦粉を混ぜたり生地を練ったりと、子供たちも保護者と一緒に取り組むことができる工程を入れたことで、保護者からは「子供が積極的にお手伝いをしてくれた。」「子供がいつの間にか成長していると感じた。」という感想を多く聞くことができた。また、ピザを窯で焼くさいに、生地に焼き色が付いたり、チーズが溶けたりしている様子を子供たちが興味深そうに見ていた。

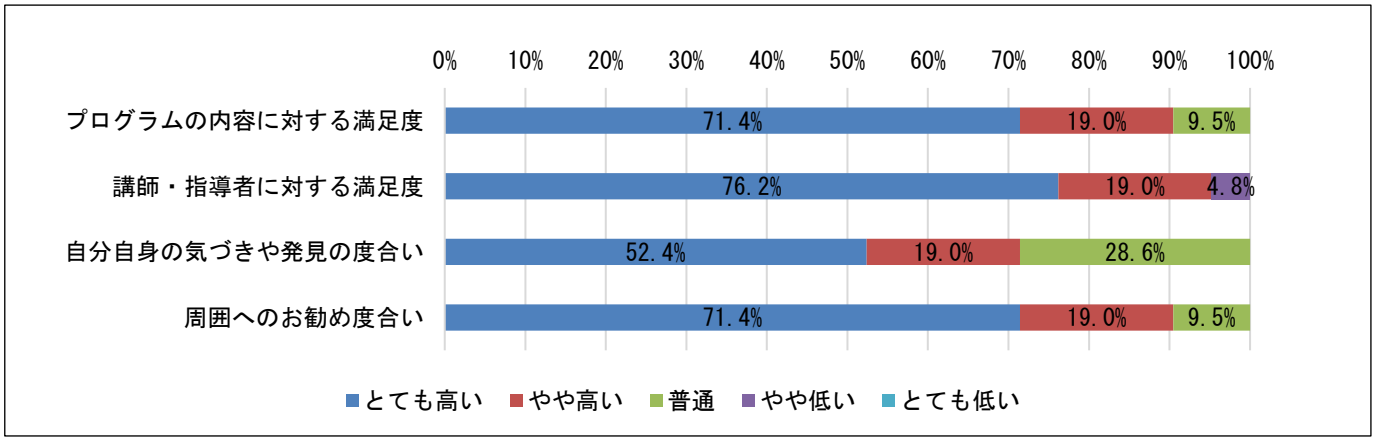
ピザづくりの様子

３　事業評価

アンケートの結果から、プログラムの満足度は 90.9%と高く、事前に日帰りで行った２回の事業も含めて「子供の自立心の芽生え」「家族間の交流」「親子の絆」という点では、良いアプローチができたと考える。しかし、自由記述欄には、焚き火や星空観察、生地からピザを作ることなど、初めて行うことが多かったと書かれていたが、「自分自身の気づきや発見の度合い」の項目が 71.4%とあまり高くはないことから、プログラムには更なる工夫が必要だと感じる。

また、保護者アンケートの自由記述欄には「保護者同士で交流する機会があったことに加え、親がいないところでも子供たちがいきいきと活動していたことに成長を感じた。」という感想が多く、親子別活動が有意義だったと感じる。

アンケート結果



４　事業全体をとおして

母子家庭で、子供と十分に触れ合えていないのではないかと感じて参加を決めたという保護者がおり、そういったきっかけ作りや保護者同士、子育ての話ができる機会となったことはとても良かった。

必要なことは親から子へきちんと伝えられるような事業運営や子供たちへの言葉掛けなどの配慮が必要であると感じた。

ピザを窯で焼く場合に待ち時間が発生してしまうため、時間の過ごし方などは工夫が必要である。

親子別活動の様子

北見　幼少期の子どもを持つ家庭に対する体験プログラム

家族ふれあい広場

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和２年１月 18 日(土)～１月 19 日(日)　（１泊２日）
■ 参加対象　親子 20 名程度
　　幼児（年中・年長）とその兄弟姉妹、及びその家族
■ 参加実績　19 名（保護者８、子ども 11 名）
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル北見
■ 運営協力　オホーツク教育局教育支援課社会教育指導班

■ 取組の重点
　親子で協力して取り組む体験活動をとおして、家族の絆を深めるとともに、子育てについての学習と交流により、家庭教育の充実を図る機会とする。

2　プログラム

<table>
<tr><th></th><th colspan="3">8:00</th><th>9:00</th><th>10:00</th><th>11:00</th><th>12:00</th><th>13:00</th><th>14:00</th><th>15:00</th><th>16:00</th><th>17:00</th><th>18:00</th><th>19:00</th><th>20:00</th><th>21:00</th><th>22:00</th></tr>
<tr><td>1日目</td><td colspan="5"></td><td>受付</td><td>開会式</td><td>子ども
保護者</td><td>昼食</td><td>おやつ作りと外遊び</td><td>休憩おやつタイム</td><td>「凧」作り</td><td>休憩</td><td>夕食</td><td>入浴自由遊び</td><td>就寝</td></tr>
<tr><td>2日目</td><td>6:30 起床 ラジオ体操</td><td>朝食</td><td>清掃・点検</td><td>「凧」揚げ</td><td colspan="2">外遊び</td><td>ふりかえり</td><td colspan="9"></td></tr>
</table>

■ 活動の様子

１日目は開会式後に、保護者と子どもたちが、それぞれ分かれて活動を行った。保護者は、「子育て講座」として、講師であるオホーツク教育局の為広氏から、オホーツク管内における子どもたちの学習や生活状況についての話を聞いた。また、保護者同士で子育てについての現状や悩み交流を行った。子どもたちは体育館で、アイスブレイクを交えながら体を動かす遊びを行った。

昼食後、体験活動として、親子でアイスクリーム作りと凧作りに取り組んだ。アイスクリーム作りでは、自分たちで砂糖や牛乳等の材料をペットボトルに入れ、次にビニール袋に塩を混ぜた雪を入れ、その中にペットボトルを置き、ボール状にした。ペットボトルの中がアイスになるのを楽しみに、ボールを投げたり、転がしたりしながら外遊びを行った。１時間ぐらいでアイスは出来上がり、試食後、各家庭からは喜びの声と笑顔があふれた。

凧作りでは、ビニールに絵を描き、骨組みとなるストローとしっぽを付けて製作した。その後、凧の完成度チェックを兼ね、体育館で揚げ方の練習に取り組んだ。

ボール転がしの様子

アイス試食の様子

凧作りの様子

２日目は、外での凧揚げに挑戦した。天候にも恵まれ、暖かい日差しの中、子どもたちは、誰が一番長く凧を揚げていられるかを競いながら元気よく走り回り、活動を楽しんだ。

休憩を挟み、場所をサロマ湖に移し、氷結した湖上でそり引き遊びを行った。参加者全員が初めての体験に、心躍らす場面となった。また、遮るものがなく、遠くまで広がる白い雪原をバックにして思い出に残る集合写真を撮ることもできた。

閉会式では、外での活動を満喫し、少々疲れている様子もあったが、子どもたち全員が２日間の活動をとおして、アイスクリーム作りや凧揚げの楽しかった感想を述べることができた。保護者も子どもたちとの活動を楽しみ、家族の絆を再確認し、深めることができたようであった。

凧揚げの様子

氷上そり遊びの様子

３　事業評価

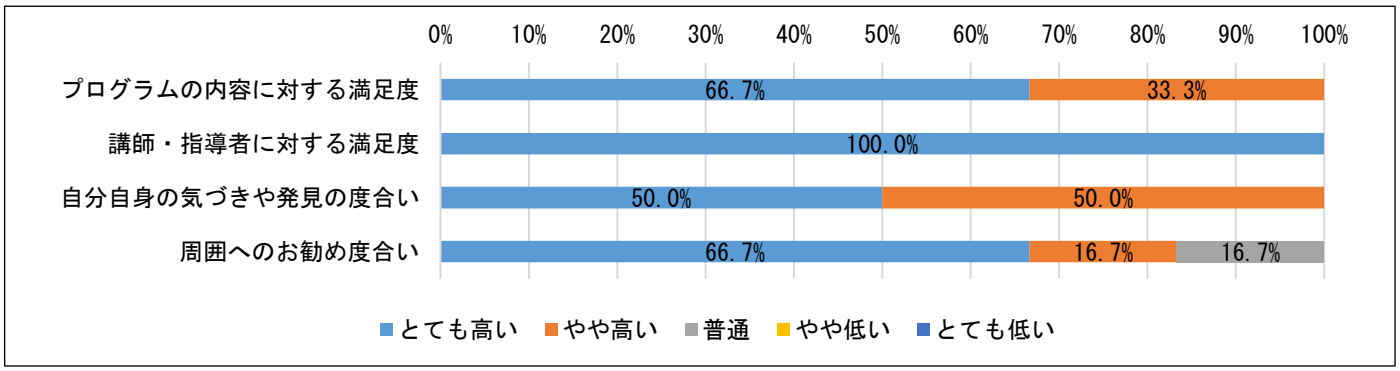
○　主催者側で事前に材料や型枠等の準備をしておき、アイスクリーム作りや凧作りの体験活動を簡単な作業のものとしたことにより、スムーズに活動を進めることができたので、プログラムの内容に対する満足度が高かったと考えられる。

（参加者の声）

○　アイスクリーム作りや凧揚げが楽しかった。（子ども）

○　結氷したサロマ湖の上での活動は、良い思い出となった。（保護者）

アンケート結果



４　事業全体をとおして

○　参加した保護者同士の交流やつながりをつくる機会となった。

○　雪不足による、敷地内での雪遊びの代用として、結氷したサロマ湖上での活動がとても講評であった。

○　幼児親子で宿泊を伴う事業なので、保護者が参加しやすい時期や日程を考慮していく必要がある。

○　事業に参加した保護者同士が、継続してつながりをもてるようなアプローチや再度顔を合わせる機会を設定していくことが重要である。

足寄　幼少期の子どもを持つ家庭に対する体験プログラム

家族ふれあい広場 ～ほっかいどうファミリーキャンプ in あしょろ～

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年８月３日(土)～８月４日(日)　（１泊２日）
■ 参加対象　未就学から小学２年生までの児童とその家族
■ 参加実績　47 名（15 家族　子ども 25 名、保護者 22 名）
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄
■ 運営協力　十勝教育局　北海道上士幌高等学校
　　気球パイロット２名

■ 取組の重点
　幼少期の子どもを持つ様々な家庭環境の家族にテント泊や野外炊飯などをとおして、ゆったりとした家族団らんの機会を提供し、野外活動の楽しさを知るとともに家庭教育を支援する。

2　プログラム

<table>
<tr><th></th><th>7:00</th><th>8:00</th><th>9:00</th><th>10:00</th><th>11:00</th><th>12:00</th><th>13:00</th><th>14:00</th><th>15:00</th><th>16:00</th><th>17:00</th><th>18:00</th><th>19:00</th><th>20:00</th><th>21:00</th><th>22:00</th></tr>
<tr><td>1日目</td><td colspan="6"></td><td>開会式</td><td>親子別プログラム</td><td colspan="2">テント設営</td><td>買い出し</td><td colspan="3">【夕食】
バーベキュー</td><td>ナイトプログラム</td><td>就寝準備</td><td>就寝</td></tr>
<tr><td>2日目</td><td colspan="2">ホットサンド作り
早朝熱気球</td><td>片付け</td><td>閉会式</td><td>入浴</td><td>希望者のみ昼食</td><td colspan="10"></td></tr>
</table>

■ 活動の様子

１日目は、「親子別プログラム」として、子どもはアイスブレイクを行い、保護者は十勝教育局社会教育指導班の平下祐哉氏を迎え、子育てに関する講話を行った。子どもは新しい友達作り、保護者は自分たちが子どもの時に夢中だったことなど意見交換した。プログラムの後、「テント設営」として、家族ごとに協力してテントを立てた。夕食「バーベキュー」として、家庭ごとに調理内容を決め、町内のスーパーに買い出しに行き野外炊飯場で調理した。定番の焼肉やうどんだけでなく、焼きリンゴや焼きバナナにチャレンジする家族もいた。食後は「ナイトプログラム」として、ウッドキャンドルを使い、焼きマシュマロを楽しんだ。すべてのプログラム終了後、テントの中でゆったりとした家族の団らんの時間を過ごした。
２日目は、「ホットサンド作り」、「早朝熱気球体験」として、炭をおこしてパンを焼いてチーズやハムを挟んで食べたり、係留フライトを行ったりした。

親子別プログラムの様子

テント設営の様子

気球に初めて乗る参加者が多く、上空から他の家族へ手を振ったり、写真を撮ったり、歓声を上げるなど搭乗を楽しんだ。

その後、テントや寝袋などの片付けを行い、キャンプが終了した。

閉会式後は浴室を開放し、希望者は食堂で昼食を摂った。家族で２日間の汗と疲れを流し、それぞれの帰路についた。

バーベキューの様子

ナイトプログラムの様子

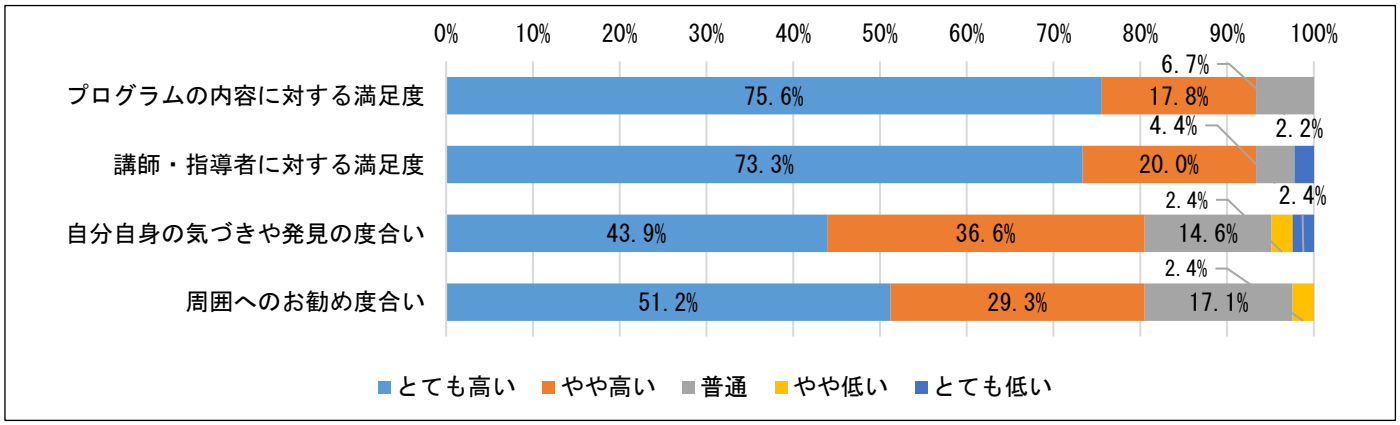
早朝熱気球体験の様子

３　事業評価

○　参加者への調査結果から「プログラムの内容に対する満足度」の項目において、90%以上の参加者から肯定的な回答を得た。家族がゆとりを持って体験活動ができるような時間配分やプログラムであったと考える。また、「講師・指導者に対する満足度」の項目においても 90%以上の肯定的な回答を得た。キャンプ初心者にとって分かりやすい指導ができたと考える。

○　参加者からは「子どもたちの普段見られない様子を見ることができて新しい気づきがあった。」や「自然には、子どもを育む力があるなと改めて感じた。」などの感想が寄せられた。

アンケート結果



４　事業全体をとおして

○　野外炊飯やウッドキャンドル等で「ゆったりとした家族団らんの機会」や「参加者どうしの交流の機会」を提供することができた。

○　家族の時間を過ごしてもらうため、家族で料理内容を決めて買い出しに行くようにしたが、何を買えばよいかわからないという意見があった。ネイパルで用意できる調味料等を伝える必要があった。

○　朝はテント干しや子どもの準備などやることが多いので、活動内容を精選し、ゆとりのある時間配分を考える必要がある。

厚岸　幼少期の子どもを持つ家庭に対する体験プログラム

家族ふれあい広場

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年８月 10 日(土)～８月 11 日(日)　（１日２日）
■ 参加対象　未就学児とその家族（小学生の兄弟も参加可能）
■ 参加実績　25 名（９家族）
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル厚岸

■ 取組の重点
○　保護者の学習機会の設定
○　親子が共同で取り組むことができるゆとりあるプログラム

2　プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目						開会式	夕食の下ごしらえ	【ハイキング】 宝探しをしながら森へでかけよう		【夕食】 バーベキュー	朝ご飯の下ごしらえ	【保護者】 子育て茶話会	【子ども】 お兄さん・お姉さんたちと遊ぼう	入浴	就寝準備	就寝
2日目	起床・洗面 部屋掃除・ 荷物移動		【朝食】 フレンチトーストづくり	自由遊び												

■ 活動の様子

１日目は、ネイパル周辺の遊歩道を親子で一緒に歩き、木の茂みや草の中からキノコや昆虫を虫眼鏡で観察するなどして、親子で自然を存分に楽しんでいた。その日の夕食は、参加者全員でバーベキューを行い、他家族との交流を深めていた。夜には、保護者を対象に「子育て茶話会」を行い、普段抱えている子育てに関する不安や悩みなど、保護者相互の経験や取り組んでいることを話し合い、活発な意見交換が行われた。

また、家族にとって、非日常の体験である屋外での調理・食事の下ごしらえを各家族で行った。未就学児と保護者が一緒にバーベキュー串への食材づけや卵の殻割りなど、子どもが楽しみながら、食事の準備を行っていた。

自然散策の様子

子育て茶話会の様子

２日目は、家族の絆を一層深めるため、親子が力を合わせて火おこしから始める朝食づくりを行った。参加者は、子どもと一緒に炭をおこし、前日に下ごしらえをしたフレンチトーストを家族ごとにコンロで焼きながら木陰で朝食を味わっていた。

朝食づくりの様子

朝食の様子

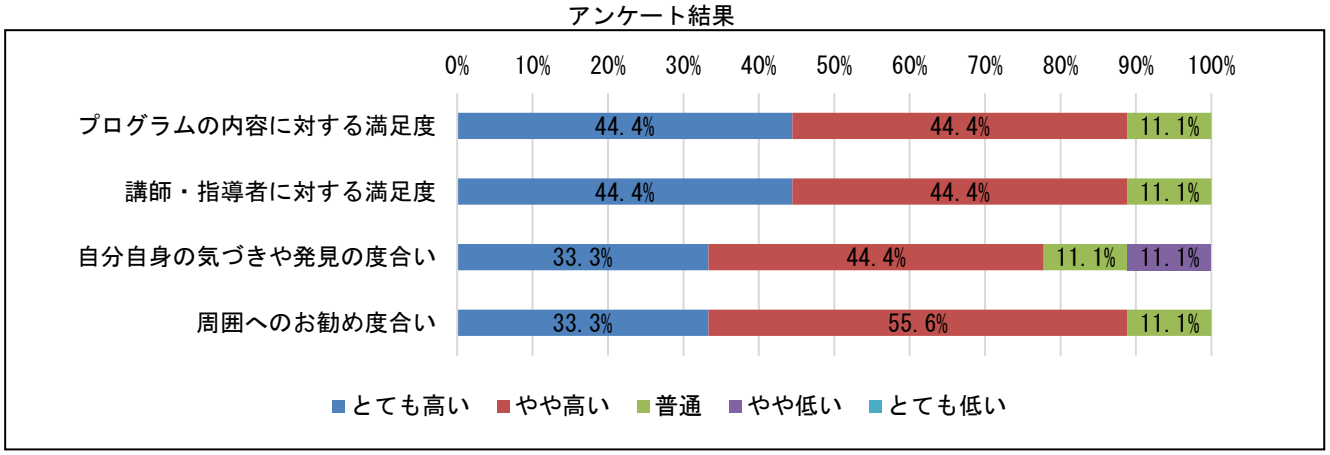
３　事業評価

○　プログラムに対する満足度が 88.8%だった。未就学児とその保護者にとってゆとりを持って、体験活動ができるプログラムであったと考える。

○　「子どもが小さく不安だったが、家族で初めてキャンプに参加して良かった」との声が聞かれたことから、未就学児が、安全に自然体験できる機会を提供することができた。

○　「子育て茶話会」が保護者に大変好評だった。事前に保護者に懇談するテーマについてアンケート調査行っていたことで、保護者は、課題意識を持って参加することができ、家庭教育について考える場となった。

アンケート結果



４　事業全体をとおして

○　ゆとりあるプログラムの中で、親子が一緒に活動でき、子どもに他家族との交流を促すことができた。

○　ボランティアが、参加家族と交流できたことで、子どもを見守る意識が高まり、自然体験の活動においても安全に配慮し活動することができた。

○　未就学児と参加した保護者が安心して生活できるよう、各宿泊棟にミルク用ポットやおむつ用ゴミ袋を設置するとともに、空き時間等に参加家族が自由に交流できる部屋を設けた。

○　未就学児用のトイレスリッパや、食器・フォーク等の配慮があれば、未就学児と保護者がさらに安心して参加できると考える。

幼少期の子どもをもつ家庭に対する体験プログラム

【実施の背景】

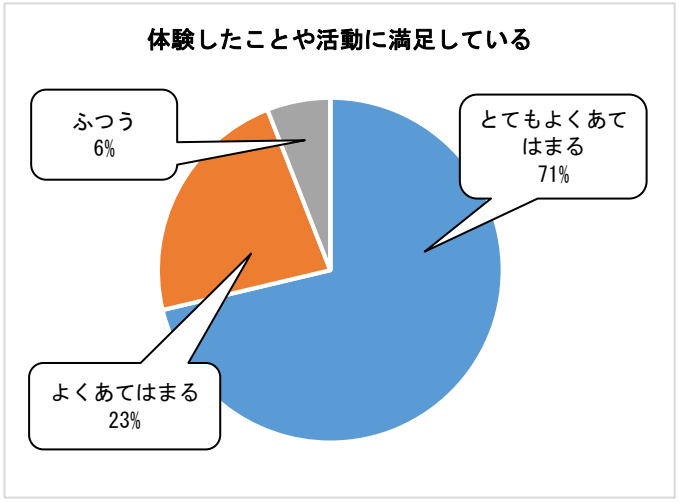
近年、核家族化や少子化等の家族形態の変化や、地域社会のつながりの希薄化等を背景に、子育ての悩みや不安を抱えたまま保護者が孤立してしまうなど、家庭教育が困難な現状が指摘されている。そのため、地域における家庭教育や子育てに関する学習・相談機会の充実に向けて、子育てに不安や悩みをもつ孤立しがちな保護者や、子育てへの関心は高いが学びの機会や余裕のない保護者等に対しても十分な支援を行うためことが必要となっている。

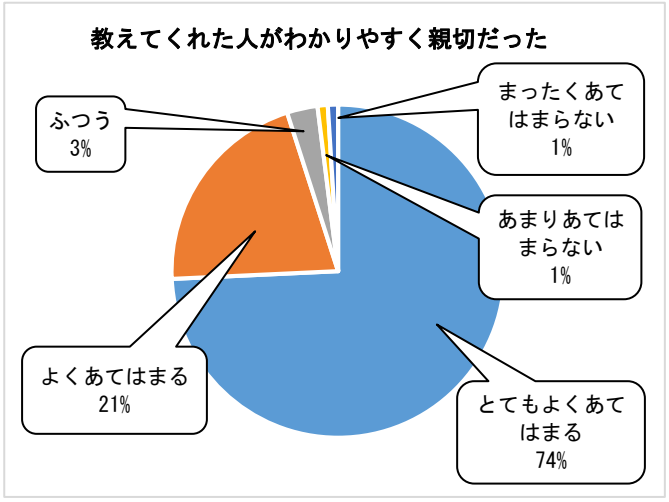
一方、体験活動は教育的効果が高く、幼少期から青年期まで多くの人と関わりながら体験を積み重ねることにより、「社会を生き抜く力」として必要となる基礎的な能力を養うという効果があり、特に、心身の発達において、乳幼児期からの家族や地域、自然の中での豊富な刺激・体験が重要であるとの指摘がある。

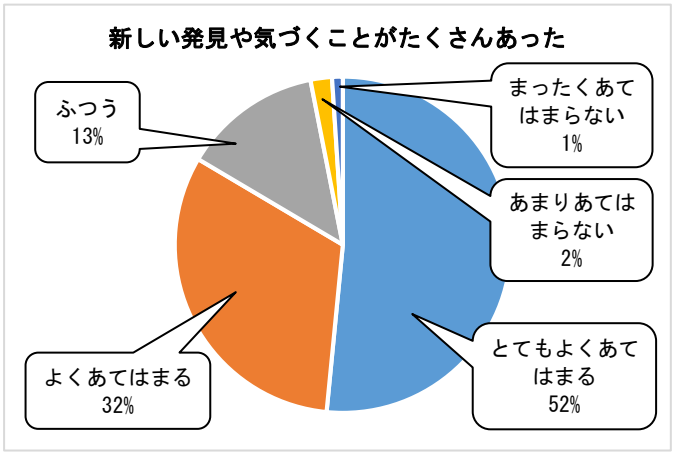
【主なアクティビティ】

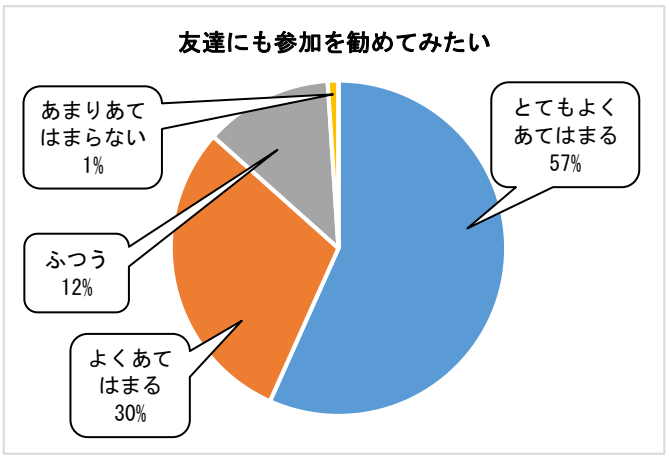
・テント泊　・調理実習（野外炊事）　・交流ゲーム　・創作活動　・果物狩り
・親向けプログラム（講話、意見交流・茶話会、ワークショップなど）

【アンケート結果】









２ 地域の青少年リーダー養成に関わる体験プログラム

（１）プログラム開発の背景

本道においては、全国を上回る本格的な人口減少・超高齢化社会が到来する中で、将来にわたって持続可能で活力ある地域社会を築き上げていくためには、道民一人一人が心豊かに、相互に支え合いながら暮らす、自立性の高い地域づくりを進めていくことが求められている。

一方、全国学力・学習状況調査（H28）の児童生徒質問紙において、「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか」の問いに対して「当てはまる」と回答した本道の児童生徒の割合は全国平均を下回っていることから、児童生徒に対して積極的に地域に関わる場や機会を提供することが必要であるということがうかがえる。

こうしたことから、道立青少年教育施設において、地域の教育資源を活用し、将来、地域を担うであろう青少年リーダーの養成に関わるプログラムを開発するものである。

（２）普及のポイント

「地域社会での問題への興味・関心」を喚起するプログラム内容にすること、フィールドワークやグループでの討議をもとに「地域の一員としての責任」を自覚させ、「身近なことから社会に貢献する実行力」を養うことがポイントとなる。

（３）各施設における事業名と主なアクティビティ等

砂川	**ジュニアリーダーコース Hokkaido in Sunagawa**
令和元年８月 11 日（日）～13 日（火）（２泊３日）	講演、グループワーク、企画書作り、意見交流など
深川	**ジュニアリーダーコース Hokkaido in 深川**
令和元年９月 14 日（土）～16 日（月）（２泊３日）	コミュニケーショントレーニング、ワークショップ フィールドワーク、グループワークなど
森	**ジュニアリーダーコース Hokkaido in 森**
令和元年７月 29 日（月）～31 日（水）（２泊３日）	講演、グループワーク、フィールドワーク、企画書作りなど
北見	**ジュニアリーダーコース Hokkaido in ネイパル北見**
令和元年８月 10 日（土）～12 日（月）（２泊３日）	コミュニケーショントレーニング、グループワーク フィールドワーク、地域住民向けの発表会など
足寄	**ジュニアリーダーコース Hokkaido in あしょろ**
令和元年 10 月 12 日（土）～14 日（月）（２泊３日）	アイスブレイク、グループワーク、アクションプラン作りなど
厚岸	**ジュニアリーダーコース Hokkaido in 厚岸**
令和元年７月 30 日（火）～８月１日（木）（２泊３日）	講演、野外炊事、グループワーク、ワークショップなど

砂川

ジュニアリーダーコース Hokkaido in Sunagawa

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年８月 11 日(日)～８月 13 日(火)　(２泊３日)
■ 参加対象　中学生～高校生
■ 参加実績　15 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル砂川
■ 講　　師　FM はまなす　松　井　宙　夢　氏
■ 運営協力　FM はまなす

■ 取組の重点
　放送番組の制作をとおして、自分のまちの良さや地域素材を見つめ直し、まちづくりの担い手として活躍するきっかけをつくることをねらいとした。

2　プログラム

	6:30	7:30	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目								開会式	講義演習	講演		夕食	演習協議	入浴自由交流		消灯
2日目	起床	朝食	演習				昼食	演習				夕食	ナイトハイク	入浴自由交流		消灯
3日目	起床	朝食	研修６		振り返り	閉会式	昼食									

■ 活動の様子

　１日目は、活動のねらいとゴールを確認した後、講師の FM はまなす松井氏から「人に伝わる伝え方」と題して講演をして頂き、話し方や聞かせ方、番組の作成方法について学んだ。参加者は講師の話に真剣に耳を傾け「初めて聞くことが多かった。ためになった。」と、着実にその後の活動の足がかりをつかんでいた。

　その後、夜に行われた研修３では、研修１、２を踏まえグルーピングを行った。研修１で発表した各自が持ち寄った地域の魅力を多角的に分析し、どのような番組が作れるかを考えた。なかなか意見がでず進まない場面もあったが、その後建設的な意見が出始め方向性が見えてきた。最終的には農業、食べ物、観光、祭りをキーワードにした４班が結成された。

　今回班編成は参加者の意見を尊重した。15 人が持ち寄った地域の魅力を、どのようにすれば番組として放送できるかを考え、相乗効果が生まれるよう知恵を出し合う作業は大変ではあったが、自分事として研修を進めるきっかけとなった。

真剣な表情で講演を聞く様子

グループ編成直後の話し合いの様子

２日目は、企画書の作成に取りかかった。まず、集まったメンバーが調べてきた内容を、どのように番組として放送するかを考え、番組のタイトルを決定した。

その後、各自が講演で教わった PREX 法を意識して原稿の流れを考え、それを元に番組の流れを決定した。BGM の選曲や曲のどの部分をどのように流すかなど詳細もここで決定した。

午後からは企画書をもとに放送原稿の作成に取りかかった。各自持ち時間を決め原稿の作成を行ったが、完成した物をつなぎ合わせると予定時間に満たない班が多く、原稿の付け足しや読むスピードの調整を行った。

最終日は原稿の読み合わせを行いながら、講師からアドバイスをもらい、その後、収録を行った。収録では緊張してしまい、NG を出す場面もあったが、収録後は達成感に満ちあふれた表情をみることができた。

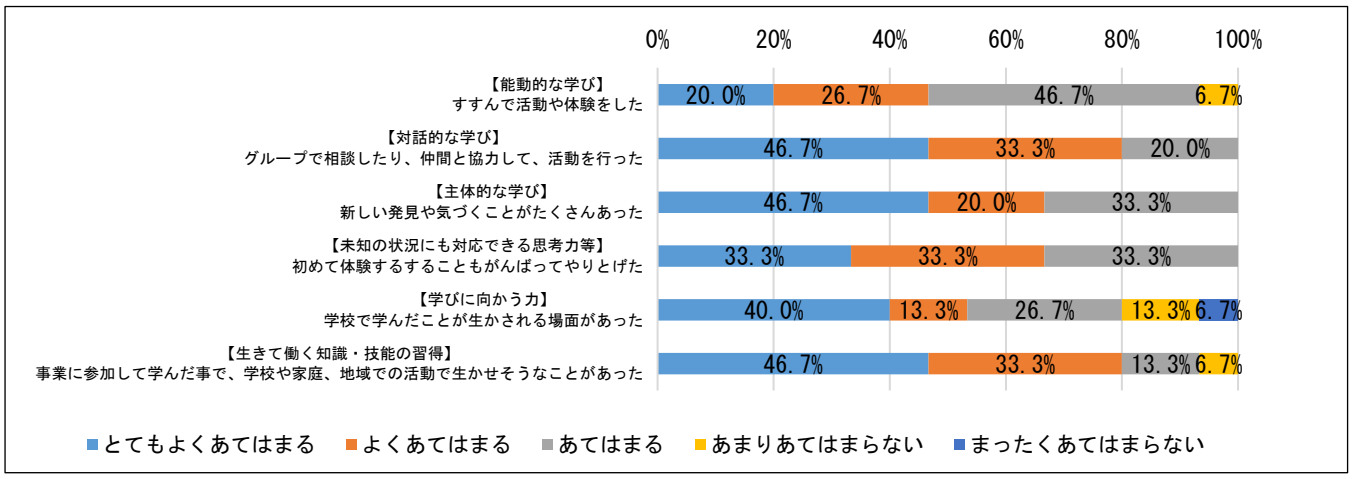
企画書作成時の様子

収録時の様子

３　事業評価

アンケートからは、「対話的な学び」の観点の評価が高く、グループで考え、話し合いながら進めたことが効果的だったと考える。又、「生きて働く知識・技能の習得」の観点も高く、「人に伝わる伝え方」を考えながら演習を行ったことが深い学びに繋がったと考える。「自分が住んでいる町の魅力を改めて知れる良い機会となった。」「まちに戻ってから、今やれることを全力で行いたい。」という好感的な感想も聞かれ、概ね本研修のねらいは達成できたと思われる。

アンケート結果



４　事業全体をとおして

今回は放送番組の制作という課題から、まちの良さや地域の魅力を見つめ、「相手に伝わる伝え方」という視点から、原稿を考え伝え方の工夫を行った。自ら考え主体的に判断し活動する姿からは、地域愛が感じられた。「自分のまちを元気にしたい」という気持ちの芽生えを感じることができたので、将来のまち作りを担う人材の育成に寄与することができたと考える。

深川　地域の青少年リーダー養成に関わる体験プログラム

ジュニアリーダーコース Hokkaido in 深川

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年９月 14 日(土)～９月 16 日(月)　（１泊２日）
■ 参加対象　中学生から高校生
■ 参加実績　10 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル深川
　　及び旭川市国際交流センター
■ 講　　師　木村　智子氏（東川町立東川小学校教諭）
　　藪　たかね氏（JICA 北海道国際協力推進員）
　　橋詰　典明氏（石狩市立花川北中学校校長）
　　東峰　宏紀氏（石狩市立八幡小学校教頭）
　　田中　孝治氏（石狩市立石狩小学校教諭）
■ 運営協力　JICA 北海道　北海道開発教育ネットワーク

■ 取組の重点
「貿易ゲーム」「コンビニから見る SDGs」「パームやし農家の話」などのワークショップを設定し、SDGs について体験的に理解を深めるプログラムを構成した。

2　プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目								開会式	研修①		研修②			研修③	入浴 自由	消灯
2日目	起床	朝食	移動	研修④			昼食		研修④			移動	夕食	研修④	入浴 自由	消灯
3日目	起床	朝食	清掃	研修⑤	ふりかえり	閉会式										

■ 活動の様子

１日目は、話すこと聞くことの大切さについて考えるコミュニケーショントレーニングを行った。「コミュニケーションは一方的なものではなく双方向のやりとりであること」や「否定しない傾聴のスタンス」などについて様々なアクティビティをとおして学んだ。その後、メキシコ料理づくりやスポーツレクなどをとおして参加者同士の交流を深めた。

２日目は、旭川市国際交流センターに移動し、午前中は JICA（独立行政法人国際協力機構）の国際協力事業について学び、午後からは D-net（北海道開発教育ネットワーク）会長の橋詰典明氏を講師に招き SDGs について学ぶワークショップを行った。「貿易ゲーム」（シミュレーション）や「パームやし農家」（ロールプレイ）など、体験型のワークショップをとおして、楽しみながら SDGs への理解を深めることができた。また、買い物公園で開催されていた「食べマルシェ」にも参加し、まちの活性化を図るためのイベントの様子を肌で感じていた。

メキシコ料理づくりの様子

スポーツレクの様子

３日目は、学んできたSDGsについて自分の住むまちや学校、自分自身の生活に結びつけて考え、これからの目標やまちづくりについて発表した。

本研修をとおしてSDGsを「どこかの誰かがやること」と考えるのではなく、一人一人が自分事として捉え、自らの行動を変えていかなくてはならないということを学ばせることができた。そして、その一つ一つの取組が持続可能な世界の実現につながっていくのだということを考えさせることができた。

SDGs ワークショップの様子

「今日からできる SDGs」交流の様子

3　事業評価

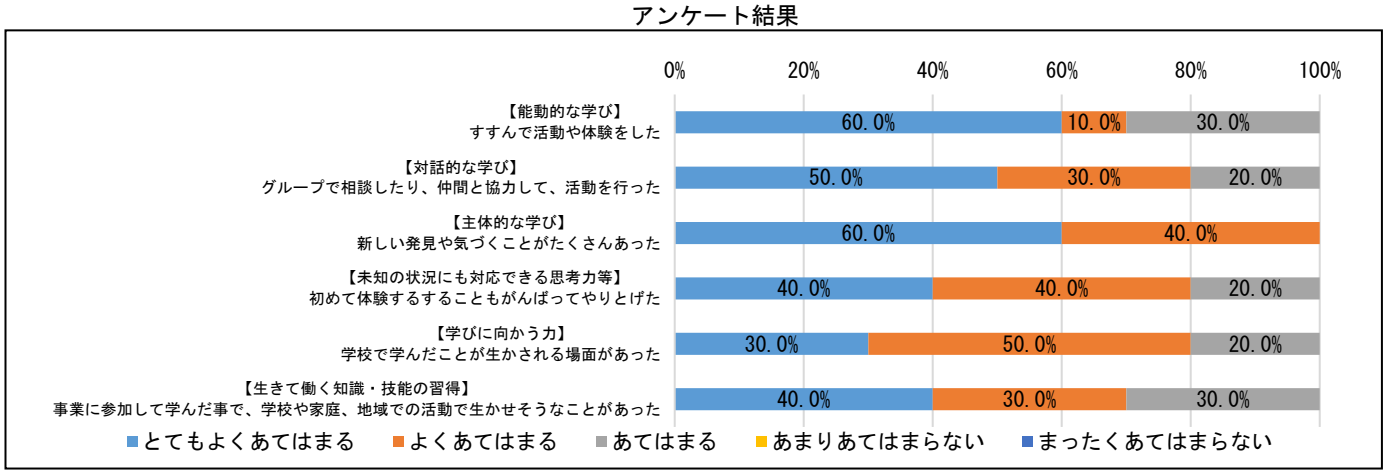
○　意見、感想から

「SDGsについて深く知ることができた。」「SDGsという言葉を知ることができ、これからも注目していきたい。」「たくさんの発見があったし、いろいろな人と関われてよかった。」などの感想があった。

○　アンケート項目から

「新しい発見や気づくことがたくさんあった」で、参加者の100%が「とてもよくあてはまる」「よくあてはまる」と回答し、「初めて体験することもがんばってやりとげた」で、参加者の80%が「とてもよくあてはまる」「よくあてはまる」と回答したことから、所期の目的が達成できたと考える。

アンケート結果



4　事業全体をとおして

○　体験型ワークショップをとおして楽しみながらSDGsについて学べるプログラムにすることができた。

○　SDGsを身の回りのことに関連付けることで、学んだことを自分事として捉えさせることができた。

○　リーダー養成としてのねらいが達成できたかを評価するため、継続的に「参加者の変容」を把握する方策が必要である。

森　地域の青少年リーダー育成に関わる体験プログラム

ジュニアリーダーコース Hokkaido in 森

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年７月 29 日(月)～31 日(水)　（１泊２日）
■ 参加対象　道内の中学生および高校生で、地域における活動リーダーまたはリーダーを志す者
■ 参加実績　67 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル森
■ 運営協力　東川町定住促進課　森　舞奈　氏
森町地域おこし協力隊　山中　治　氏
七飯町地域おこし協力隊　川端萌氏、菊地由紀氏

■ 取組の重点
○　人口増の実績を上げている東川町の取組を、基調講演に位置付けた。
○　近隣の地域づくりの実態を視察するフィールドワークを取り入れた。

2　プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目									開会式	講演	ｸﾞﾙｰﾌﾟ研修Ⅰ	夕食	ｸﾞﾙｰﾌﾟ研修Ⅱ		入浴など	消灯就寝
2日目	起床	朝食	準備	フィールドワーク							ｸﾞﾙｰﾌﾟ研修Ⅲ	夕食	ｸﾞﾙｰﾌﾟ研修Ⅲ		入浴など	消灯就寝
3日目	起床	朝食	準備	研修	発表・交流	閉会式										

■ 活動の様子

１日目は、「地域の魅力のつくりかた」と題して、基調講演として東川町の実践内容を学習した。

その後のグループ研修で、仲間を知り合う活動から始まり、相談したり協力したりする活動を通して心の距離を縮め、夜には翌日のフィールドワークについて話し合いを進めていった。

フィールドワークに向けて予習中

２日目は、実際の地域づくりの現場にふれるフィールドワークを実施した。

森町と七飯町に分かれ、それぞれの現場では、各町の地域おこし協力隊員が具体的なガイダンスをし、フィールドワークを進めてくれた。さらに、現時点で取り組んでいる町おこしの現場を案内していただき、実際の地域づくりの迫力と奥深さを、全身で感じ取った。

帰館後は、フィールドワークでの学びをもとに、グループごとに「行きたくなる、見たくなる、ワクワクする事業」の企画に取り組んだ。

地域おこしの実際を肌で感じます

アイディアを出し合い、企画として一本化させていく作業は想像以上に困難な課題だったが、どのグループも粘り強く話し合いを重ね、アイディアが具体的なカタチになっていく過程を楽しんでいた。

発表の企画中

最終日は、グループごとに練り上げた企画を、工夫を凝らした発表方法で全体に披露した。

地域の歴史遺産と野外フィールドを融合させた新イベントの提案や、地元住民の諸課題を乗り越える新しい価値観の提言など、考え抜いた力作の発表が続いた。

発表リハーサル

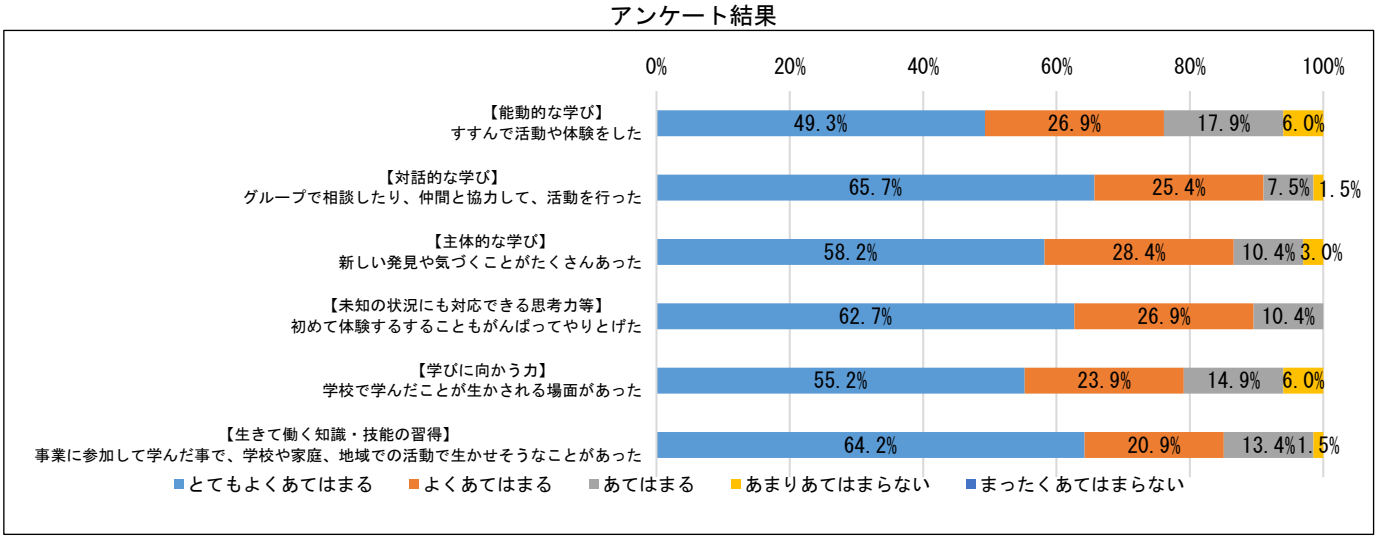
3　事業評価

○　「進んで活動した」という認知があまり高くない。

プログラム内容、とくにフィールドワークの構成要素と、参加者ニーズとの乖離があるのかもしれない。

フィールドワーク案内人のコーディネートや、コースデザインなどにおいて、参加者とのマッチングをさらに意識した選定が必要である。また、参加者層が中学生主体であることも考慮しなければならない。

アンケート結果



4　事業全体をとおして

事業のねらいのさらなるシンプル化が求められる。もっと整理されたキーワードに絞り込んで、全参加者がもれなく事業のゴールを共有できるよう、改善が必要である。

北見　地域の青少年リーダー養成に関わる体験プログラム

「ジュニアリーダーコース Hokkaido in ネイパル北見」

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年８月 10 日（土）～12 日（月）　（１泊２日）
■ 参加対象　中学生～高校生
■ 参加実績　７名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設 ネイパル北見
■ 運営協力　北海道教育庁オホーツク教育局 教育支援課 社会教育指導班

■ 取組の重点
参加者が、フィールドワークをとおして、地域の人たちから20年後の地域に対する願いを聞き取り、そこに20年後の自分たちがどう関わるかを考え、発表することで、「地域への参加」から「地域への参画」に意識を転換することをねらいとした。

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目									受付・休憩	開会式	交流活動	夕食・休憩	説明 グループワーク① (事前準備)		入浴 就寝
2日目	起床・清掃	ﾗｼﾞｵ体操 朝食 活動準備	移動(市営バス)	フィールドワーク（地域での交流体験） ※　昼食・休憩含む						移動(市営バス)	ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ② (情報整理)	夕食・休憩	ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ③ (課題解決・発表準備)		入浴 就寝
3日目	起床・清掃	ﾗｼﾞｵ体操 朝食 活動準備	グループワーク④ (課題解決・発表準備)		発表	昼食 体験プログラム (野外炊飯)	14:00 解散								

交流活動（仲間づくり）の様子

活動のねらいを確認する様子

聞き取り調査の準備をする様子

■ 活動の様子

１日目は、交流活動の時間に、チーム力を高めるアクティビティとして、コミュニケーションスキルトレーニングに取り組んだ。活動をとおし、意思の疎通を図ることや、相手の気持ちに寄り添うこと、互いの役割を果たすことの大切さに気付くことで、互いの距離が縮まった参加者は、翌日のフィールドワークで協力し合うことを確認した。

夕食後のグループワークでは、今回の事業の趣旨を改めて確認し、事業のゴールは、「地域への参画」ができる人であり、そのためには自分はどうしなければいけないのかについて、参加と参画の違いを具体例から学んだ。参加者は、これまで参加者だった自分が、自ら道筋を作る参画者になることに対して、責任の重さをかみしめながら、将来、自分たちに何ができるだろうかと期待を膨らませていた。その後、翌日のフィールドワークの質問内容を考えるなど、事前準備に余念がなかった。

２日目は、常呂町内でのフィールドワークに取り組み、街中や商店街、公共施設で町民に、「２０年後の常呂町の人々に伝えたいメッセージ」の聞き取りを行った。誠実にインタビューする参加者に対し、応じる町民は、現在の街の良さや課題を述べながら、20 年後の街に対する思いを熱く語った。

町民の思いを余すことなく聞き取った参加者は、その思いをまとめて他の人々に伝えること、20 年後の自分であれば、どう街に関われるのかを考え、伝えることに思いを巡らせ、翌日の発表会に向け、新聞作りに全力を注いだ。

最終日には、常呂町の住民向けの発表会を開き、将来の地域に望むこと、自分たちがどう地域に参画するかを班ごとに発表した。参加者からは、「将来に見通しを持った発表で良かった」との感想が寄せられた。また、常呂自治区長 辻　孝宗 氏からは、「今回身に付けた視点を大切にして、将来活躍して欲しい」と講評をいただいた。

街の人に聞き取りをする様子

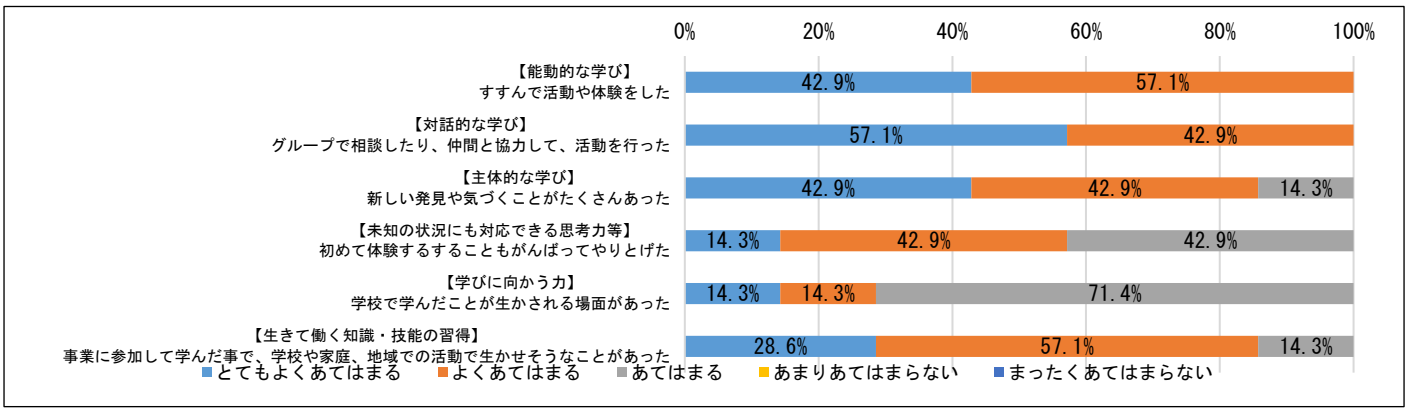
市民向け発表会の様子

辻自治区長から講評を受ける様子

３　事業評価

参加者からは、「参加（すでに作られているものに自分が参加する）と参画（自分たちで作ってみんなを誘う）の違いがわかりました」、「リーダーは、一人ではなく、多くのリーダーが居て、役割を果たしていることが勉強になりました」、「地域の問題に対して、前向きに考えることができました」など意欲的な感想が聞かれ、地域への参画への意識付けを行うことができた。

アンケート結果



４　事業全体をとおして

今回の事業のねらいは、地域に参加する人材から、地域に参画する人材になることだった。そのため、聞き取りのテーマも「20 年後」というキーワードを入れ、聞き取りを受ける町民から将来を見据えた意見が出るように工夫するとともに、参加者も地域の中核を担う年齢となった自分と重ねて意見できるように工夫を行った。その結果、参加者は親の世代になった自分が、何をできるのか意識することができたことから、自ら関わり地域づくりを担う意識を持った人材の育成に取り組むことができたと考える。

足寄　地域の青少年リーダー養成に関わる体験プログラム

ジュニアリーダーコース Hokkaido in あしょろ

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年 10 月 12 日(土)～10 月 14 日(月)　（２泊３日）
■ 参加対象　中学生及び高校生
■ 参加実績　中学生 16 名、高校生７名　合計 23 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄
■ 運営協力　北海道十勝教育局社会教育指導班　２名
　　ボランティア：大学生　２名

■ 取組の重点
○　地域のよさや課題を考えるにあたり、中高生に身近な事柄だけでなく、より広い視点でまちの現状が捉えられるよう、事前学習課題として地域活動の実態やまちの住みごこち等に関するアンケート調査の実施を行った。
○　事業後の地域活動の実践につなげるため、十勝教育局社会教育指導班主査の佐々木直人氏を講師に迎え、「中高生の地域活動」について学ぶ時間を設定し、アクションプランの作成については、地域活動を行う、地域に住む人全体を考えることを促した。

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目							開会式	活動準備	アイスブレイク	グループワーク①	夕食	グループワーク①		自由交流 入浴	就寝準備 就寝
2日目	朝食	活動準備	グループワーク②			昼食	グループワーク③				夕食	発表準備		自由交流 入浴	就寝準備 就寝
3日目	朝食	清掃	企画発表会		閉会式	昼食									

■ 活動の様子

１日目は、はじめに「アイスブレイクゲーム」として初めて顔を合わせた参加者の緊張をほぐした後、これから始まる活動に向けて、話し合いのルールなどを確認した。

次に、「グループワーク①」として、事前学習課題で各自が調べてきた「自分が暮らすまち」の魅力や特産品などのアピールポイントを紹介し合った後、ＫＪ法を用いて、「現在暮らしている人も将来暮らす人も満足できる地域」について意見を出し合い、それをもとに「まちの課題」や「解決策」について考え、整理することで、自分たちが暮らすまちの現状について分析を行った。

２日目は、「グループワーク②」として、十勝教育局社会教育指導班主査の佐々木直人氏を迎え、「中高生の地域活動」について、地域活動とは何なのか、地域に暮らす全ての世代に有益な活動を

事前学習課題交流の様子

グループワーク①の様子

継続して行うことが必要となる旨のお話しのほか、道内の中高生が主体となって取り組んでいる活動が紹介され、アクションプランづくりに向けてのヒントを学んだ。講演後は、前日のグループワークで明らかにした「まちの現状」を踏まえ、自分たちのまちをよりよくしていくために、中高生の立場で主体的に取り組むことができる企画内容を具体的に考えた。夕食後は、「発表準備」として、各グループで練り上げたアクションプランを、模造紙にレイアウトを工夫しながらまとめ、発表原稿を作成して、発表の練習に積極的に取り組んでいた。

最終日は、「企画発表会」として、迎えにきた保護者や教育委員会の職員が見守る中、３日間の学びの成果として、各グループのアクションプランのプレゼンテーションを行い、感想を交流し合って全日程を終了した。

グループワーク②の様子

発表準備の様子

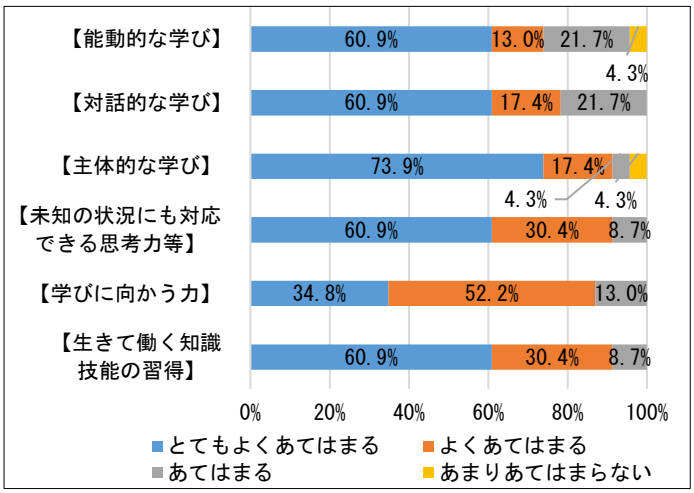
企画発表の様子

３　事業評価

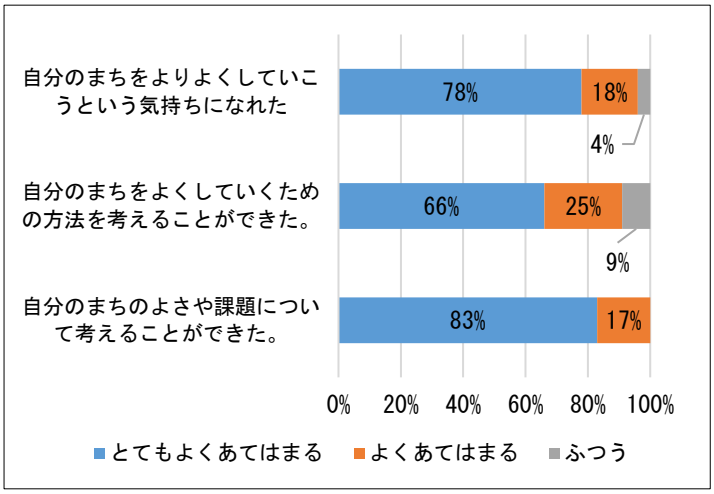
○　参加者への調査結果から、【主体的な学び】の項目において、90%以上参加者から「とてもよくあてはまる」、「よくあてはまる」との回答を得た。参加者に新しい気づきがあったように伺える。

○　施設独自アンケート調査結果から「自分のまちをよりよくしていこうという気持ちになれた」の項目において、95%以上参加者から「とてもよくあてはまる」、「よくあてはまる」と回答を得た。社会形成に積極的に参画する態度を育成できたと考える。

◆共通アンケート



◆施設独自アンケート



４　事業全体をとおして

○　事前学習で様々な年代から意見を聞いてきたことや調べてきたことを礎にして、子どもの遊び場作りや高齢者の健康づくり等、地域住民に対して有益な活動を考えることができた。

○　参加者が考えたアクションプランは、まちの大人の協力を得てできるものと感じた。推薦をいただいた教育委員会や学校、社会教育団体との連携した取組等、アクションプラン実現までの仕組みを工夫する必要がある。

厚岸　高校生のコミュニケーション能力を高める体験プログラム

ジュニアリーダーコース Hokkaido in 厚岸

1　事業概要と取組の重点

■実 施 日　令和元年７月 30 日(火)～８月１日(木)　（２泊３日）
■参加対象　道内の中学生・高校生
■参加実績　６名
■活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル厚岸
■運営協力　釧路教育局　根室教育局

■ 取組の重点
地域を担うリーダーとしての資質・能力の向上、社会形成に積極的に参画する態度を育成する

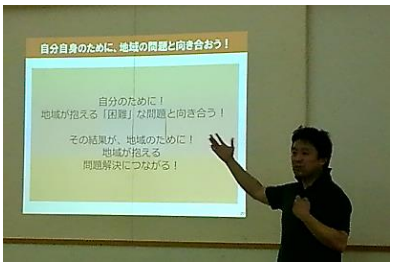
2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目						受付	開会	【講演】まちの未来を考える	野外炊事			講演のふりかえり		入浴	自由交流	就寝
2日目	朝食	【交流】わたしが暮らすまち		【ワークショップ①】まちの“現在(いま)”を知ろう	昼食	【ワークショップ②】まちの“未来”を考えよう				夕食	【ワークショップ③】私たちにできることを考えよう			入浴	自由交流	就寝
3日目	朝食	【まとめ】わたしの行動宣言		振り返り	閉会	解散										

■ 活動の様子

１日目は、株式会社ノースプロダクション代表取締役　近江正隆氏に御講演いただき、「自分たちの未来を生き抜く力を育むためにも、地域と向き合い、地域でできることを考えてほしい。」と、エールをいただいた。講演終了後の感想交流では、「問題解決ために、考えることの大切さを感じた。」「失敗を恐れず挑戦したい。」などの声が聞かれた。

夕食は野外でカレーライス作りを行った。参加者同士で声を掛け合い、作業を分担しながら協力して夕食を完成させた。



講演の様子

２日目は、２グループに分かれ、まちの課題を解決するためのワークショップを行った。この日は、北海道教育大学釧路校の学生と釧路市内の小学校教諭も話し合いに加わり、多様な視点から地域の課題解決の方法を検討した。

ワークショップでは、始めに自分の住むまちについて、自慢できることや、改善すべきところなど、普段感じていることを交流しあい、それぞれの町の共通点や相違点を探った。

野外炊飯の様子

次に、将来も住み続けたい理想のまちについて話し合い、自分たちの住むまちの課題を考えた。まちの治安や雇用、交通網の確保など様々な課題を挙げ、解決方策を検討した。

最後に、話し合いの中で出た課題解決のためのアイディアから、町民を巻き込んだ学校祭などのイベントや、ＳＮＳを活用した広報活動など、中高生が自分たちの力で取り組めそうなものを、「わたしたちの行動宣言」としてまとめた。

ワークショップの様子

３日目は、前日のワークショップで完成させたプランを発表した。お互いのプランについて詳細な内容を質問するなど、実現に向けて真剣に発表を聞きあった。

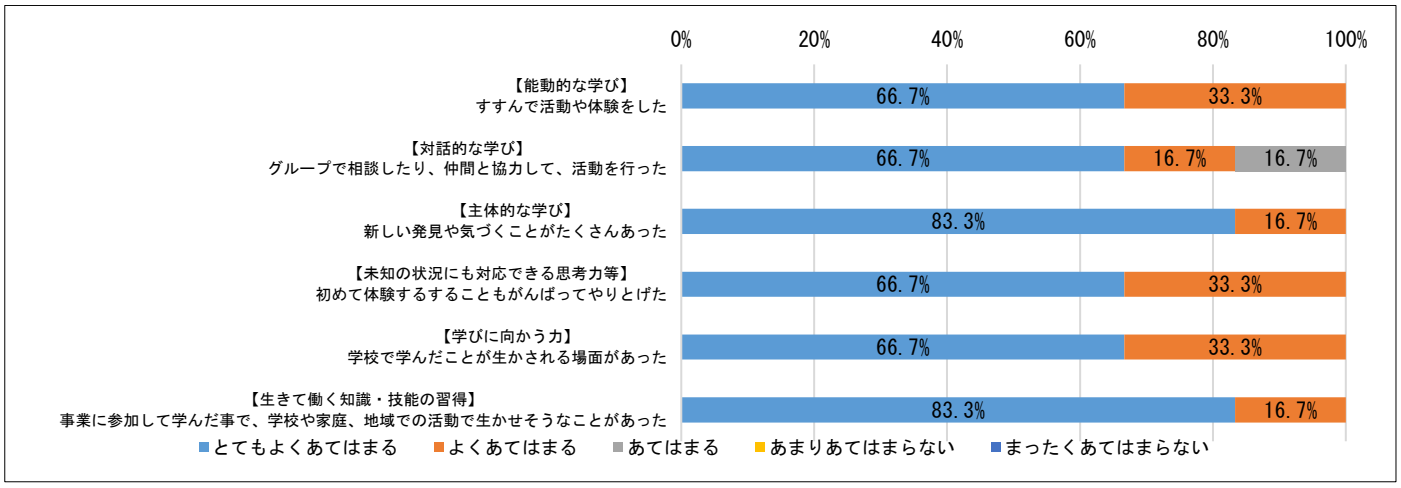
行動宣言の様子

３　事業評価

全ての参加者が、「新しい発見や気付くことがたくさんあった」と回答しており、講演やワークショップを通して、自分たちの住むまちについて主体的に考えさせることができた。

また、全ての参加者が、「学校や家庭、地域での活動で生かせる学びがあった」と回答しており、地域活性化のための主体的な活動につながる期待が高まった。

アンケート結果



４　事業全体をとおして

○　自分の住むまちについて自分の考えを述べたり、他のまちの様子と比較したりすることで、自分の住むまちについて改めて考えるきっかけを提供することができた。

○　大学生や社会人を交えた話し合いをすることで、異なる視点からの考えに触れることができ、多様な考えを持たせることができた。

○　参加人数・市町村数を増やし、より多様な意見を交わすことができると、さらに話し合いが深まるため、次年度以降は学校行事等の情報収集を綿密に行い、開催期日を検討するなど、高校生が参加しやすい日程で計画したい。

地域の青少年リーダー養成に関わる体験プログラム

【実施の背景】

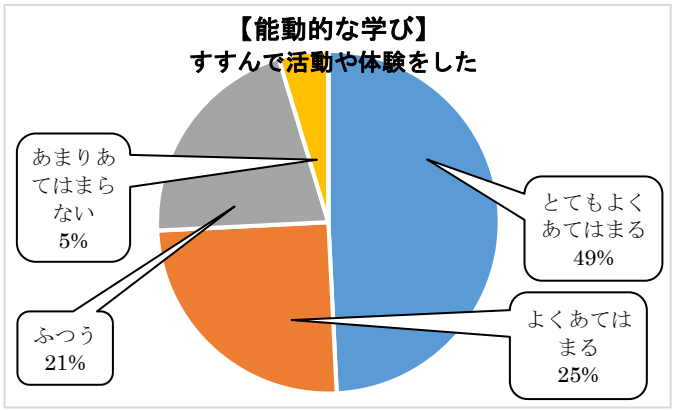
本道においては、全国を上回る本格的な人口減少・超高齢社会が到来する中で、将来にわたって持続可能で活力ある地域社会を築き上げていくためには、道民一人一人が心豊かに相互に支え合いながら暮らす、自立性の高い地域づくりを進めていくことが求められている。

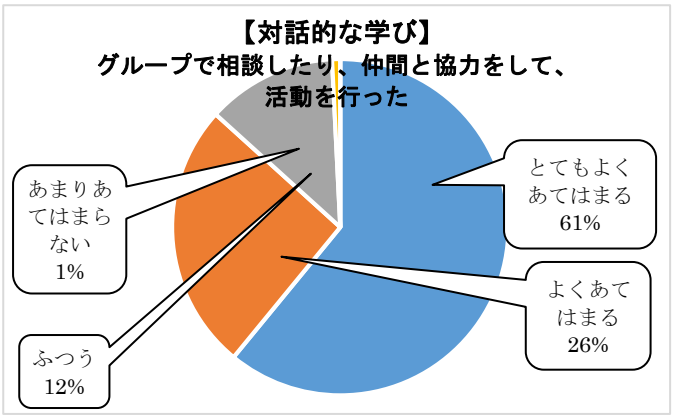
一方、全国学力・学習状況調査（H28）の児童生徒質問紙において、「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか」の問いに対して「当てはまる」と回答した本道の児童生徒の割合は、全国平均を下回っていることから、児童生徒に対して積極的に地域に関わる場や機会を提供することが必要となっている。

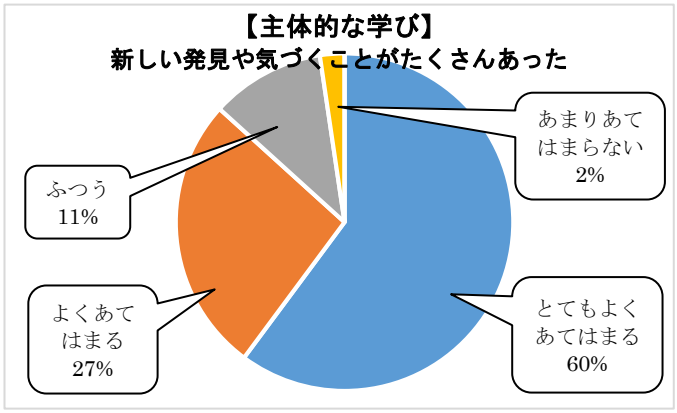
【主なアクティビティ】

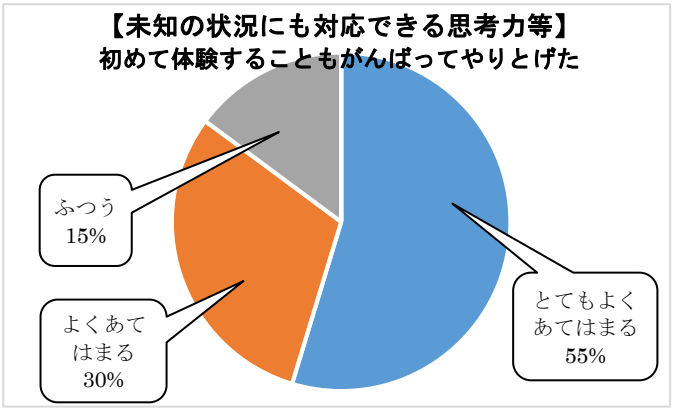
・まちづくりに関するフィールドワーク　・講師を交えたワークショップ　・グループワーク
・自分たちにできるアクションプランづくり　・地域住民等への発表会

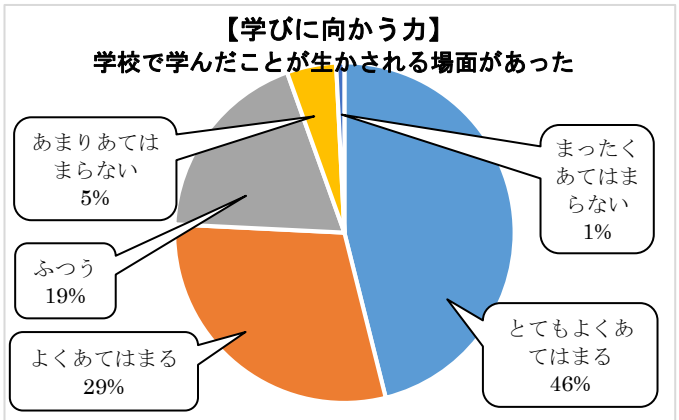
【アンケート結果】

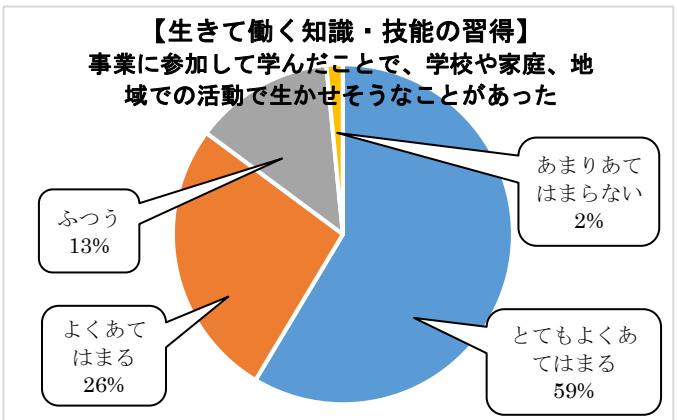












3 高校生のコミュニケーション能力を高めるプログラム

（1）プログラム開発の背景

本道においては、多様な集団の中で、互いの考えや気持ちを認め合い、尊重・協力し合うなど主体的によりよい人間関係を形成しながら、自己を成長させていくコミュニケーション能力の育成が求められている。

一方、少子高齢化・核家族化の進行や、情報化の進展などによる社会の急激な変化に伴い、子どもたちの生活体験の機会が減少し、コミュニケーション不足による人間関係の希薄化等の課題が見られ、とりわけ、児童生徒の問題行動等に関する調査（H27）では、高校生のいじめの様態として、「冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」が 70.9%と最も多く、コミュニケーション不足により交友関係に課題が生じている状況が見られることからも、豊かな人間関係を形成する基盤となるコミュニケーション能力を育成する取組を充実することが必要となっている。

このことから、道立青少年体験活動支援施設においても、高校生のスムーズな人間関係づくりに資するために、本テーマについて学校等への一層の普及を目指し、プログラムのさらなる充実・蓄積を進めていく。

（2）普及のポイント

「合意形成」「プレゼンテーション」「グループワークによるチームづくり」など、多様なテーマ設定の中でも人間関係づくりを主としたコミュニケーションについての学びが基盤となる。

（3）各施設における事業名と主なアクティビティ等

砂川 **高等学校生徒会フォーラム**	
令和元年 11 月 9 日（土）～10 日（日）（1 泊 2 日）	実践発表および学校間交流、講義、グループワークなど
深川 **高等学校生徒会フォーラム in ネイパル深川**	
令和元年 11 月 6 日（水）～8 日（金）（2 泊 3 日）	ワークショップ（合意形成）、実践発表および学校間交流、講義、グループワーク、ニュースポーツ体験など
森 **高等学校生徒会フォーラム**	
令和元年 11 月 9 日（土）～10 日（日）（1 泊 2 日）	クロストーク、実践発表および学校間交流、ワークショップなど
北見 **高等学校生徒会フォーラム**	
令和元年 11 月 2 日（土）～4 日(月)（2 泊 3 日）	コミュニケーショントレーニング、学校紹介、講演、学校間交流、グループワーク、コミュニケーションゲームなど
足寄 **高等学校生徒会フォーラム**	
令和元年 12 月 7 日（土）～8 日(日)（1 泊 2 日）	学校間交流・情報交換、グループワーク、講義など
厚岸 **高等学校生徒会フォーラム**	
令和元年 11 月 7 日（木）～8 日(金)（1 泊 2 日）	アイスブレイク・情報交換、ワークショップ（交流型・課題解決型）など

砂川　高校生のコミュニケーション能力を高める体験プログラム

高等学校生徒会フォーラム

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年 11 月 9 日(土)～10 日(日)　(１泊２日)

■ 参加対象　高等学校生徒会役員等とその引率者

■ 参加実績　70 名(11 校)

■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル砂川

■ 取組の重点

生徒会活動の意義と目的を学び、自校の取組における課題を明確にして、自校の生徒会役員でのグループワークと他校の生徒会役員との交流から課題解決の方策を導きだす。

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目	受付					開会式	実践発表		講義	演習①	夕食・休憩	参加者交流会		入浴 自由交流	就寝
2日目	起床	朝食	演習②			昼食・休憩	ふりかえり	閉会式	解散						

■ 活動の様子

１日目、最初の活動は、各校の生徒会活動の特色や実践について交流した。各校８分間の発表時間で、工夫を凝らした発表を行った。参加校が 11 校であったため、発表時間を確保するために質疑応答の時間は設けなかった。その代わりとして、各校の発表を聞き、疑問に思ったこと、素敵な取組だと感じたところなどを色の違う付箋を使って質問・意見を受付け、それに対する回答も付箋に書き込んで回答した。

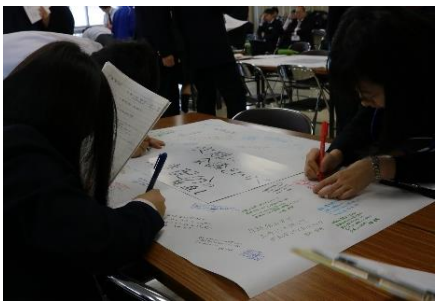
実践発表の様子

実践発表の後は、「生徒会活動の使命とは」と題して、講義を行った。生徒会活動の意義や目的について、参加者とともに考える時間をもち、改めて生徒会役員のとしての使命、役割について学んだ。講義を終えた後は、各学校の生徒会活動や生徒会行事（事業）の現状についてふりかえり、課題の抽出する演習を行った。自校の生徒会活動や行事について、意見を出し合い、課題は何かを突き詰めて考えるため、他校の参加者へ自校の課題を説明（問題提起）し、その課題に対する意見や助言を受け、課題解決への糸口を見いだす時間とした。

演習① 各校の課題の発表の様子

２日目は、前日に得た多様な意見や助言を基に、課題解決後の状態・状況を想定し、その課題の解決方策について考え、話し合いを行った。各校の今後の取組をまとめ、全体で共有するとともに、この２日間のふりかえりを行った。

演習② 課題に対する意見交換の様子



ふりかえりの様子

３　事業評価

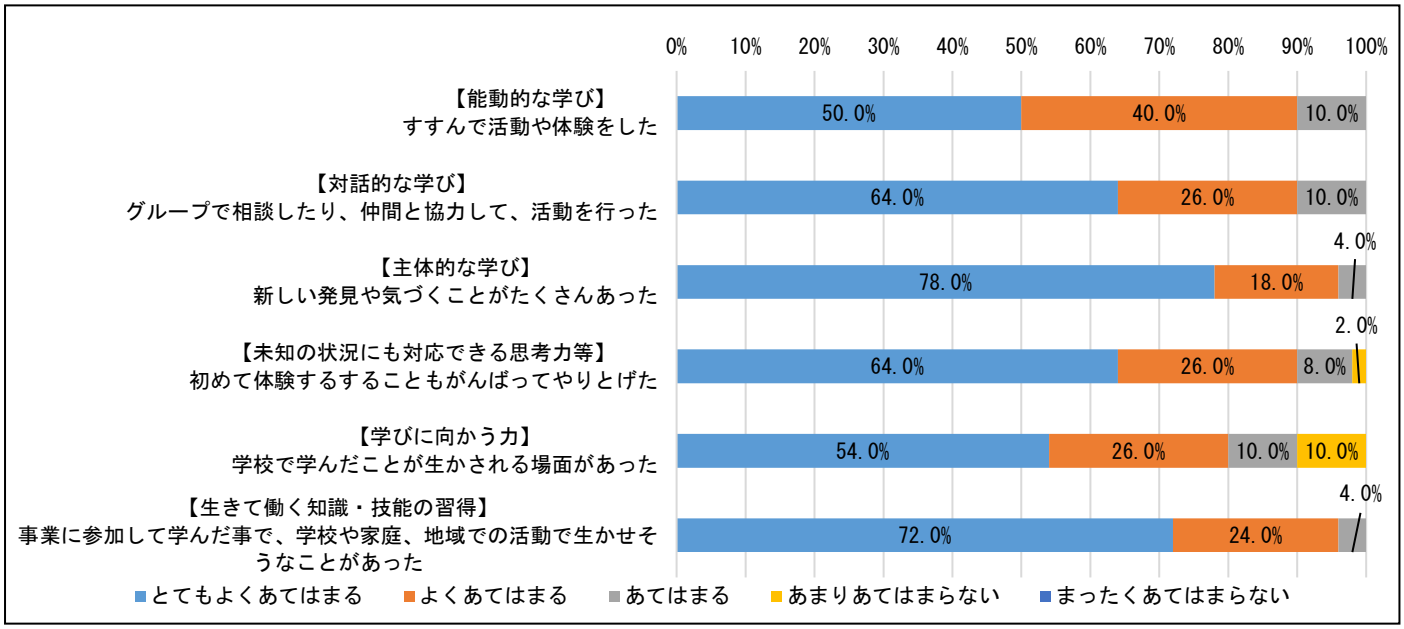
○　意見や感想から

「沢山の学校の人たちの話を聞くことができて自分には絶対思いつかないアイディアをもらいとても有意義な２日間だった」「参加して自分自身も他のメンバーも意識が変わったと思います。これからの生徒会活動に生かせる内容が多く、改めて生徒会の必要性を再確認しました。」との感想があった。

○　アンケート項目から

「新しい発見や気付きがたくさんあった」「学んだことで、学校等で生かせそうなことがあった」で、参加者の 96%が「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答したことから、所期の目的が達成できたと考える。

アンケート結果



４　事業全体をとおして

○　２日間をとおして、自校の課題解決のために、他校の生徒会役員や他校の引率教員との意見交換の時間を確保することで他校の参考となる事例や多様な考え触れことができ、課題解決後への方策を見いだすとともに、参加者の意識改革につなげることができた。

○　プログラムの構成として、参加校の実践発表の後、生徒会活動の意義や目的をレクチャーする事で、その後の演習の動機付けと意欲付けにつながり、最後まで積極的に参加できた。

○　参加校の事前アンケートの結果より、他校との交流を望む声が多かったことから、少人数でテーマを設けたグループ協議を行うワークを取り入れることで、他校の課題に対しても真剣に協議する雰囲気ができた。

深川　高校生のコミュニケーション能力を高める体験プログラム

高等学校生徒会フォーラム in ネイパル深川

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年 11 月 6 日(水)～8 日(金)　(2 泊 3 日)
■ 参加対象　高等学校の生徒会執行部役員及び生徒会担当教諭
■ 参加実績　46 名（生徒 40 名、引率教員 6 名）
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル深川
■ 運営協力　講師　草野竹史氏（NPO 法人 ezorock 代表理事）

■ 取組の重点
生徒会執行部役員としての自覚を促すために、NPO法人代表理事によるリーダー論の学びを中心にプログラムを構成した。

2　プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目								開会式	研修①	研修②		夕食	研修③	入浴	就寝	
2日目	起床	朝食		研修④			昼食	研修⑤				夕食	参加者交流	入浴	就寝	
3日目	起床	朝食	清掃	研修⑥		閉会式										

■ 活動の様子

１日目は、「集団の関係づくりの手法」や「合意形成の手法」についてのワークショップを行い、コミュニケーションの技法を学び、「合意形成の手法は多様である」という前提を共有した。その後、参加校による学校紹介で各学校の特色や各種行事、生徒会活動について発表したり、生徒会活動への思いや日頃の悩みなどを交流したりして、参加者同士の親睦を深めた。

２日目は、NPO 法人 ezorock 代表理事草野竹史氏による講演「生徒会におけるリーダーのあり方」を受講した。「フォロワーの重要性」について動画や体験談をもとにした話を聞かせていただき、参加者からは、「リーダーとは何かを考えるきっかけになった」「リーダーを支えるフォロワーの大切さという視点に共感した」などの声が聞かれた。グループワークでは、「生徒会活性化プラン」をテーマに協議した。その後、ニュースポーツ交流会ではキンボールスポーツやフロアカーリングで楽しみながら汗を流した。

集団の関係づくりの手法の様子

各学校の実践交流の様子

３日目は、グループワークの発表会を行った。引率教員からは、「他校との交流ができる貴重な場となった」「生徒の成長を感じることができた」などの感想が寄せられた。

本研修をとおして生徒会活動をより実りあるものとするための実践的な研修を積み、リーダーとしての資質を高めることができた。

スポーツレクの様子

３　事業評価

○　意見、感想から

生徒からは「他校の活動の様子や現状を知ることができ有意義な時間になった。」「話し合いの進め方やアイスブレイクなど、体験したことを今後活用したい。」などの感想があり、引率教員からは「普段は知れない生徒の気持ちや考えに触れる機会となった。」「生徒が積極的に発言をしたり、他校の生徒と関わっていたりする姿が見られ、成長を感じた。」などの感想があった。

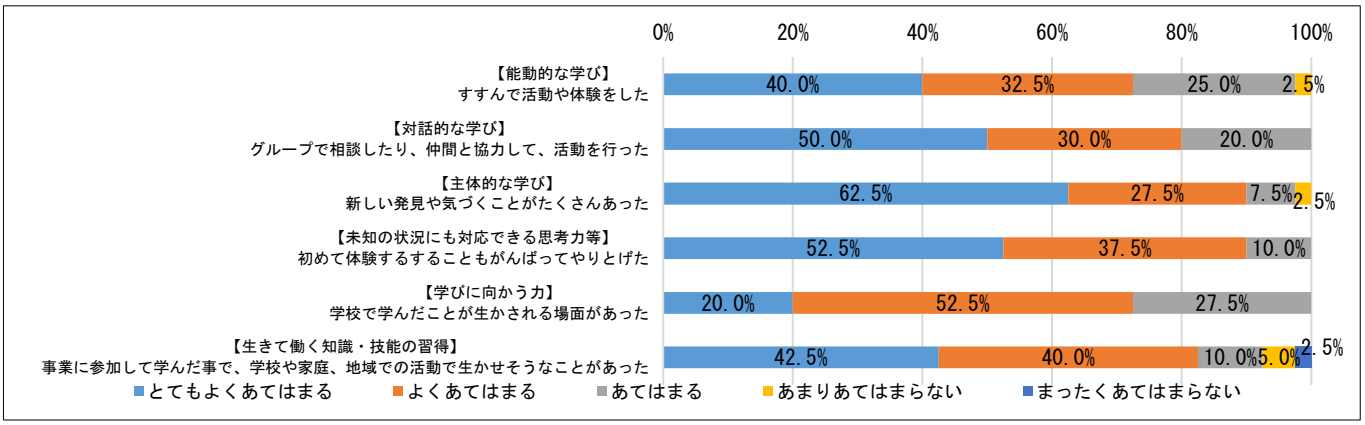
草野氏による講演の様子

○　アンケート項目から

全ての項目でほとんどの参加者が「とてもよくあてはまる」「よくあてはまる」「あてはまる」と回答した。特に「グループで相談したり、仲間と協力して、活動を行った」「初めて体験することもがんばってやりとげた」「学んだことで、学校等で生かせそうなことがあった」で、参加者の 100%が「とてもよくあてはまる」「よくあてはまる」「あてはまる」と回答したことから、所期の目的が達成できたと考える。

グループワークの様子

アンケート結果



４　事業全体をとおして

○　コミュニケーションを軸にしたプログラム構成にしたことで、他校との交流の場を多く設定することができた。

○　昨年度と演習内容を変えることで、２年連続の参加者の満足度も高くすることができた。

○　より充実した研修にするため参加校数を増やす手立てや各高校の生徒会のニーズの把握に努めることが必要だった。

森　高校生のコミュニケーション能力を高める体験プログラム

高等学校生徒会フォーラム

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年 11 月 9 日(土)～10 日(日)　(１泊２日)
■ 参加対象　高等学校の新生徒会役員と引率教員　計 50 名
■ 参加実績　47 名
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル森

■ 取組の重点
○　自校の生徒会活動の「目的、目標、ゴール」が明確になるワークショップ
○　活動のヒントや刺激がもらえる、学校間交流や各校実践紹介

2　プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目								開会式	クロストーク	実践紹介・交流		夕食	ワークショップ		入浴など	消灯就寝
2日目	起床	朝食	ワークショップ		発表・交流		閉会式									

■ 活動の様子

クロストークでは、それぞれの学校での取組みや悩みなどについて、他校の参加者と交流しながら情報交換した。

ペアトークの形態で次々と相手を変えながら、共感による安心感に心を許し、どのペアも時間が足りないくらいの盛り上がりを見せた。

チェックリストで自校をふりかえる

続いて、学校ごとに、特色ある生徒会活動について全体紹介をした。

学校祭で実際に行った演舞を衣装とともに再現したり、前年度このフォーラムで作成した活動プランの実施結果を報告したりと、多岐にわたる内容と趣向を凝らしたプレゼンとなり、密度の濃い紹介の連続に、参加者は懸命にメモを書き残していた。

夕食後は、まずチェックリストにそって自校の生徒会の状態を客観的にふりかえり、続いて理想の生徒会の具体化させて、それを実現させる方策について考えるワークに取り組んだ。

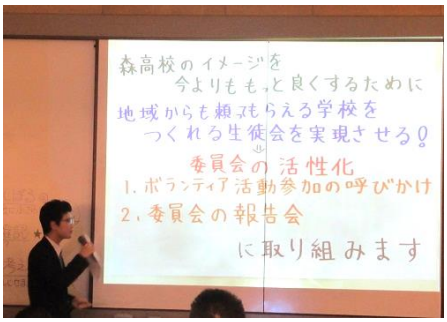
俺たちの理想の生徒会とは？

２日目は、前日の続きから再開。

たくさんのアイディアを出し合ってから、メンバー全員でそれらを一つ一つ検討し、最終的に絞り込んで自分たちの指針へと昇華させていく過程は真剣そのもので、顧問の先生も交えて、各々の考えをぶつけ合った。

顧問教諭からは「学校では見られない集中力を発揮し、一段と頼もしさが増した」との言葉が出るほど、短時間で内容の濃い話し合いを展開していた。

頭をフル回転させて絞り込む



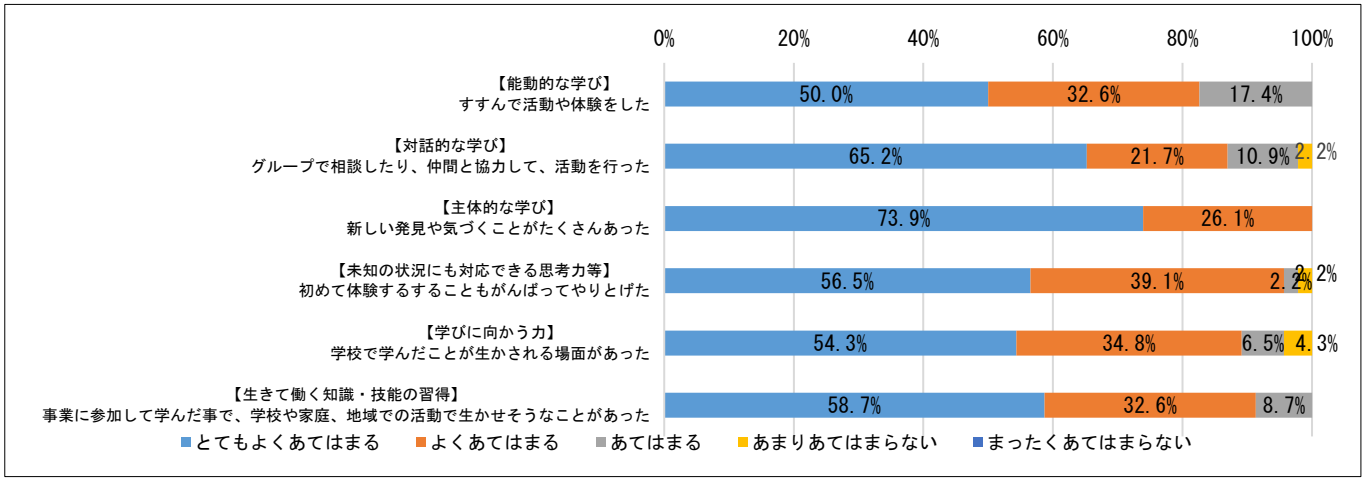
発表することでより強い決意に

最後に学校毎に発表し合い、帰校後の取り組みに向けてのモチベーションを高めて、2 日間の研修を終了した。

3　事業評価

○　話し合い活動によって、生徒間の良好な関係の構築が促されている。他者との関係の重要性の理解が増したことが奏功している。

○　生徒が、今後の自分たちの可能性に具体的な手ごたえを感じている様子が伺えた。



4　事業全体をとおして

○　ワークショップ中の他校交流があまり進まず、事業全体の盛り上がりは、昨年と比べると減少した感は否めない。

全体日程を縮小した分、アイスブレイク等のアクティビティを減らした帰結と思われる。

○　引率教諭による、生徒への関わりが少なかった。引率教諭も事業対象者であるという認識が薄かったように見える。

ネイパルからの関わりや意識づけが、対生徒だけでなく、対引率者にも必要になっていると考える。

北見　高校生のコミュニケーション能力を高める体験プログラム

高等学校生徒会フォーラム

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年 11 月２日(土)～４日(月)　（２泊３日）
■ 参加対象　高等学校の生徒会役員および生徒会担当教諭
■ 参加実績　９校　54 名（高校生 45 名、引率教諭９名）
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル北見
■ 運営協力　北見市地域おこし協力隊、網走市地域おこし協力隊
湧別町地域おこし協力隊、上川町地域おこし協力隊
北海道地域 ESD 活動支援センター　大﨑美佳 氏

■ 取組の重点
地域社会で活躍されている「地域おこし協力隊」の講話を聞く機会や、「SDG s の取組」についての概要を学ぶ機会を設け、地域の将来を担うリーダーとしてのスキルを高めることを目指した。

2　プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1日目							開会式	演習Ⅰ		学校紹介		講演Ⅰ（地域おこし協力隊）	夕食	交流会Ⅰ	入浴・自由	就寝
2日目	起床	朝食	自由	講演２（SDGs）			昼食	演習Ⅱ～Ⅲ			交流会Ⅱ	夕食	演習Ⅳ	入浴・自由	就寝	
3日目	起床	朝食	清掃	全体発表		閉会式										

■ 活動の様子

【１日目】

①演習Ⅰ「コミュニケーショントレーニング」

他校との交流を通して、様々な課題を解決する中で、合意形成の仕方やリーダーシップの取り方を学んだ。

②「学校紹介」

事前に準備していた PowerPoint 資料をもとに、生徒会の取組や自校の特色を紹介した。

③講演Ⅰ「地域おこし協力隊」の講話

地域ごとに４つのブースを作り、生徒たちは各ブースを順次回りながら、企画を進めるにあたっての立案の仕方や注意事項等を学んだ。地域おこし協力隊の方から、それぞれの経験談を聞くことにより、生徒たちの関心も高まり、積極的に質問する場面が見られた。

「地域おこし協力隊」の講話の様子

④「交流会Ⅰ」

生徒からリクエストのあった、「学校内でのケータイ使用について」と「学校行事を盛り上げるためには？」という２つのテーマについて、ワールドカフェ形式で話し合いを行った。各校の実情や様々な視点からの意見が交流された。

交流会Ⅰの様子

【２日目】

⑤講演Ⅱ「SDGｓの取組に向けて」

北海道地方 ESD 活動支援センターの大﨑氏より SDGｓの概要や日常生活との繋がりについての説明があった。生徒会として SDGｓに関わる企画を立てるための知識や情報を得ることができた。

⑥演習Ⅱ・Ⅲ「グループワーク①」

「地域おこし協力隊」の講話や「SDGｓ」の話をもとにして、学校ごとに自校で今後取り組むべき SDGｓに関わる企画の立案を行った。企画書はＡ３サイズ１枚に収めるものとし、企画は最大２つまでとした。

⑦交流会Ⅱ「コミュニケーションゲーム」

ホスト校である常呂高校の生徒会の進行のもと、「カーリングドッチボール」を行った。ニュースポーツをとおして、他校との交流を深めることができた。

⑧演習Ⅳ「グループワーク②」

企画書の全体発表に向けて、最終確認やリハーサルを行った。予定していた時間を延長して取り組む学校もあった。

【３日目】

⑨「全体発表」

参加校９校が企画書の発表を行った。発表後は大﨑氏から、企画実施に向けたより現実的なアドバイスを受けた。

また、生徒間でも質問やアドバイスが行き交い、３日間の活動の成果がうかがえる発表交流となった。

「SDGｓの取組に向けて」の様子

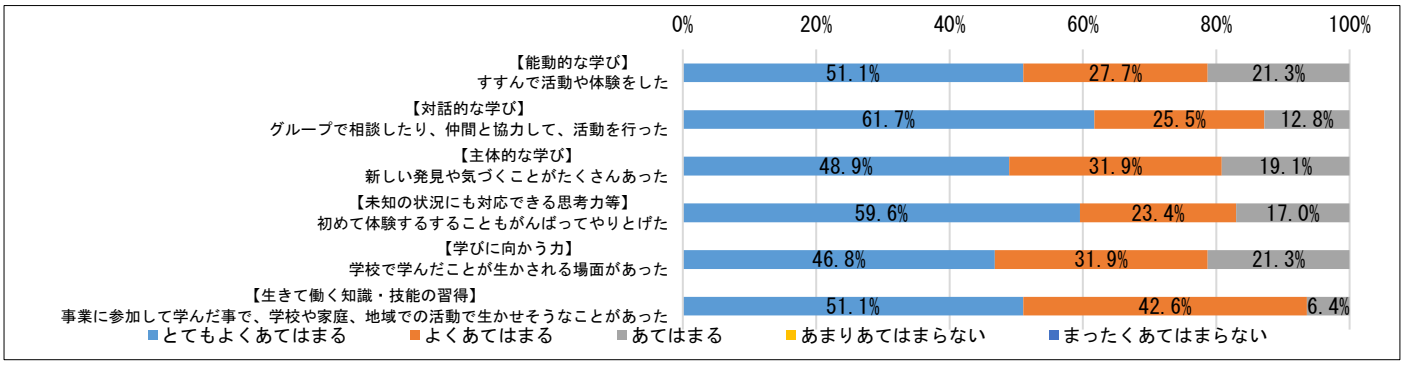
コミュニケーションゲームの様子

全体発表の様子

３　事業評価

アンケートの結果より、「生きて働く知識・技能の習得」の項目がもっとも高く、地域おこし協力隊や北海道地域 ESD 活動支援センター職員の話を直接聞くことができたことが、効果的だったことが伺える。また、「対話的な学び」の項目も高い数値を示していることから、ワールドカフェ形式での交流会やワークショップを取り入れた活動が生徒たちの達成感に繋がったといえる。

アンケート結果



４　事業全体をとおして

今回、外部協力を依頼し、得た情報を基に企画書を作成する活動プログラムとしたが、参加校が求める内容や目標設定にも幅があり、企画で苦労した学校があった。参加校のニーズに合わせたり、柔軟性を持たせた活動にしたりするなど、プログラム内容については、今後の検討材料である。

足寄　高校生のコミュニケーション能力を高める体験プログラム

高等学校生徒会フォーラム

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年 12 月７日(土)～８日(日)　（１泊２日）
■ 参加対象　高等学校生徒会役員等及び教職員
■ 参加実績　４校 28 名（生徒 23 名、教員５名）
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄
■ 運営協力　ＪＩＣＡ北海道（帯広）
木村　　聖　氏、古川　浩一　氏

■ 取組の重点

生徒会活動の活性化を図るため、他校との実践交流やSDGsについて学ぶ時間を設け、新たな視点から既存の活動を見直すとともに、充実・強化していくための方法について話し合う活動を展開した。

2　プログラム

	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	
1日目		受付	開会式	入室	参加者交流 情報交換	演習①	夕食	演習①		入浴 自由交流	就寝準備	就寝	
	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00					
2日目	起床	朝のつどい	朝食	清掃・点検	演習②		ふりかえり	閉会式					

■ 活動の様子

１日目は、開会式の後、アイスブレイクゲームを行い、和やかな雰囲気で研修がスタートした。いくつかのイニシアティブゲームを通して参加者同士の交流を図るとともに、リーダーに求められる行動について考える時間とした。

情報交換会では、生徒会役員になったきっかけ、やりがい、苦労などについて語り合う時間を設け交流を深めた。

実践交流では、各校の生徒会執行部の活動や委員会活動、自慢できるポイントを整理し、学校紹介を行った。各校の特色ある活動について、他校から熱心に質問が挙がった。

夕食後は、自校の改善点について話し合った後、他校の生徒に意見をもらいたい課題を１つ選択した。グループに分かれて、各校から出された課題への改善策を話し合い、各校への提案という形でフィードバックを行った。

２日目は、JICA 北海道（帯広）から講師を招き、「生徒会活動

参加者交流の様子

実践交流の様子

から世界の未来を変える？」と題して、SDGs の視点から生徒会活動を見直す活動に取り組んだ。

講師の講話により SDGs の概要を学び、さらに内容の理解を深めるためのワークに取り組んだ後、SDGs に関連のある学校での活動や、新たに取り組めそうなことなどを話し合い、各グループの中で出された気づきを全体で共有した。

最後に２日間の活動をふりかえり、各学校に戻って取り組んでみたいことをまとめ、本研修の成果とした。

グループワークの様子

３　事業評価

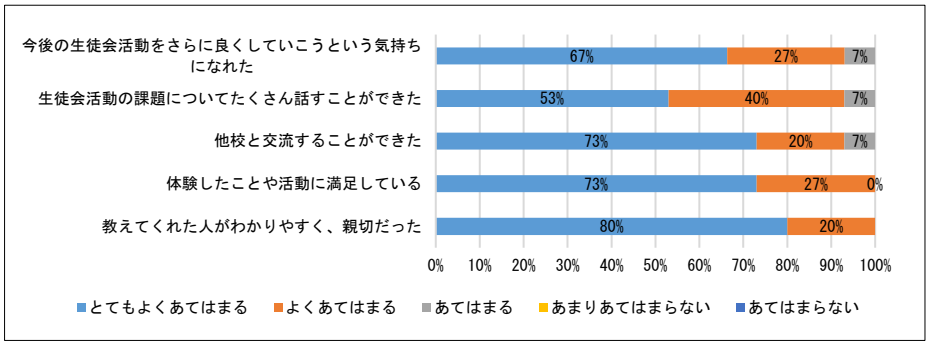
○　生徒からは、「他校との交流で自分の視野が広がり、今後の生徒会活動へのモチベーションが高まった」、「ここで学んだことを学校に持ち帰り、今後の活動へ生かしたい」などの感想が寄せられた。

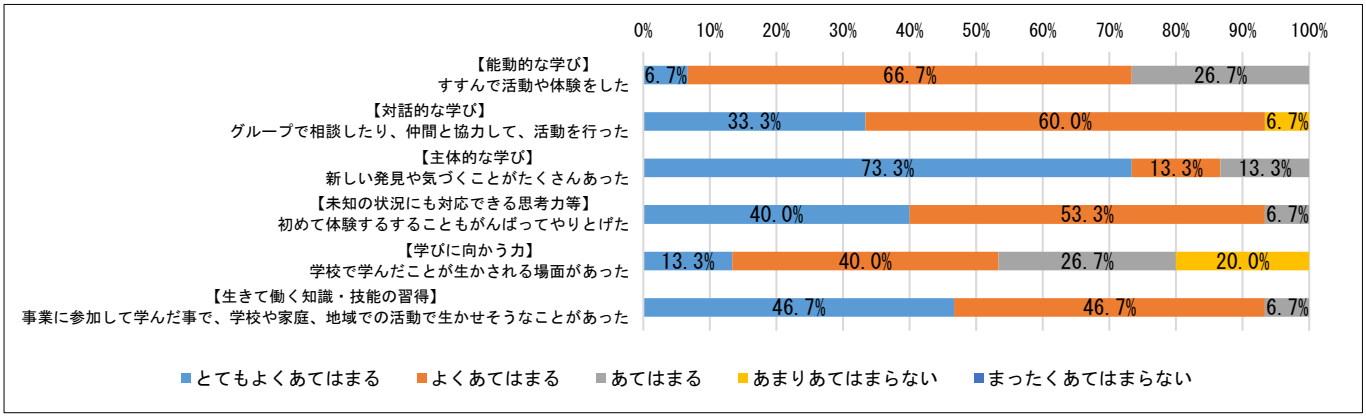
○　教員からは、「生徒にとってこれからの生徒会活動を考える上で大変勉強になったと思う」、「SDGs については、授業等の教育活動にも生かせる内容であり、大変参考になった」などの感想が寄せられた。

提案発表の様子

講話の様子

アンケート結果





４　事業全体をとおして

○　アンケート結果から、他校との交流や生徒会活動の課題などについて話し合う活動をとおして、参加者の今後の生徒会活動に対する意欲を高めることができたことが伺える。

○　事業に対する参加者の満足度は高かったが、活動の柱を２つ設定したため時間が不足した。活動の柱を１つに絞り、生徒の考えをより具体的なものへと掘り下げた方が、今後の活動に生かされるものになったと感じる。

○　参加者が本事業へ期待するものとして、83%が「他校と交流したい」と回答しており、他校との交流を充実させるための参加校の確保が大きな課題である。

厚岸　高校生のコミュニケーション能力を高める体験プログラム

高等学校生徒会フォーラム

1　事業概要と取組の重点

■ 実 施 日　令和元年 11 月７日(木)～８日(金)　(１泊２日)
■ 参加対象　生徒会役員、常任（専門）委員・外局等
　　生徒会組織で積極的に活動している生徒
■ 参加実績　57 名（７校）
■ 活動場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル厚岸

■ 取組の重点
　プログラムの多くの時間で、各校の生徒会役員同士が率直に語り合える場を設け、多角的な視点や考え方を身に付けることをねらいとした。

2　プログラム

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
１日目					受付	開会式	アイスブレイク	各校課題発表	交流型ワークショップ		夕食	交流型ワークショップ	入浴	自由交流	就寝準備	就寝
２日目	起床・洗面	朝食	部屋掃除	課題解決型ワークショップ	閉会式											

■ 活動の様子

　１日目は、他校の生徒と交流するため、自身にニックネームを付け、お互いに自己紹介しあうなど、仲間づくりに繋がるゲームを行った。
　また、グループ内で情報を共有し、協力して課題解決を目指すワークショップを行い、話し合いのための結束力を高めた。
　次に、各校が「今後より良い学校生活を図るための課題」について発表を行い、スマートフォンや服装などの規則の見直し、学校祭の運営に関わる課題等が示された。
　その後、生徒会の意義や、生徒会役員として目指す姿について共通の認識を図り、より良い学校生活に向けた課題解決について、その方策を共有し、幅広い視点から学ぶ機会を持った。

各学校課題発表の様子

他校の生徒同士の話し合いの様子

２日目は、前日に得た多様な意見や情報を基に、自校が目指す目標の設定と、その課題解決方策について考え、話し合った内容の要点について全体で共有するとともに、この２日間のふりかえりを行った。

各学校の話し合いの様子

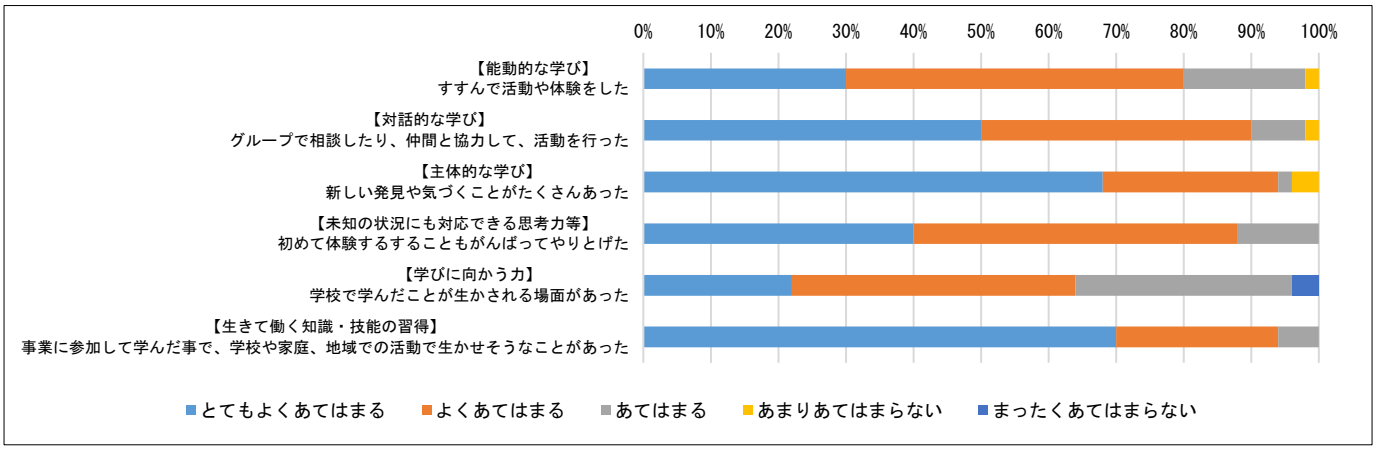
３　事業評価

○　参加者からは「他校の参加者と交流することで、自分たちでは思い付かない意見をたくさん聞くことができた」「自分がやりたいと思っていたことが、様々な人との関わりの中で明確になった」「今まで課題があっても行動が伴わなかった。生徒会フォーラムで学んだことをしっかり今後の活動に活かしたい」との感想があった。

○　アンケート項目「事業に参加して学んだ事で、学校や家庭、地域での活動で生かせそうなことがあった」は、参加者の 94%が「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答し、「新しい発見や気付きがたくさんあった」は、参加者の 94%が「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答したことから、所期の目的を概ね達成できたと考える。

各学校の今後の取組発表の様子

アンケート結果



４　事業全体をとおして

○　他校の生徒と率直な意見交換に発展させるため、アイスブレイクの時間を多めに確保し、２日間をとおして参加者が自発的に多様な参加者と交流できるよう配慮した。

○　校風や学校規模が異なる生徒同士が意見交流する場を設けることで、多様な視点を持たせ、自校の課題について考えるプログラムとした。

○　１日目に引率教員が、話し合いのグループに入り、多様な意見を聞く場を設けたことで、生徒と一緒に自校の課題について、新しい取組方法を考える雰囲気を作ることができた。

高校生のコミュニケーション能力を高めるプログラム

【実施の背景】

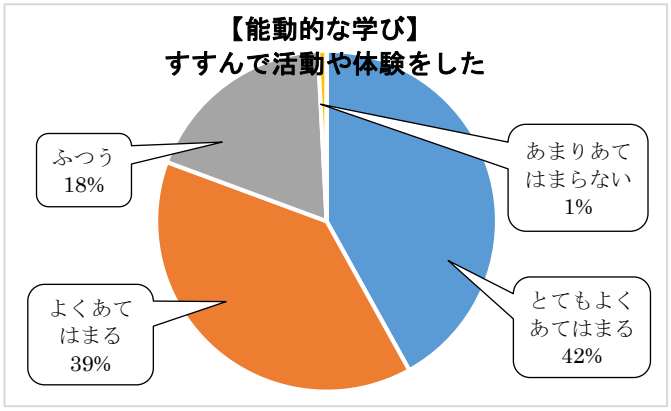
本道においては、多様な集団の中で、互いの考えや気持ちを認め合い、尊重・協力し合うなど主体的によりよい人間関係を形成しながら、自己を成長させていくコミュニケーション能力の育成が求められている。

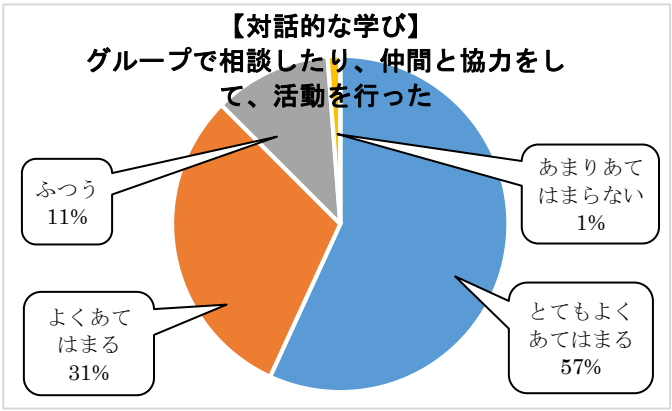
一方、少子高齢化、核家族化の進行や情報化の進展などによる社会の急激な変化に伴い、子どもたちの生活体験の機会が減少し、コミュニケーション不足による人間関係の希薄化等の課題が見られ、とりわけ、児童生徒の問題行動等に関する調査（H27）では、高校生のいじめの様態として、「冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」が 70.9%と最も多く、コミュニケーション不足により交友関係に課題が生じている状況が見られることからも、豊かな人間関係を形成する基盤となるコミュニケーション能力を育成する取組を充実することが必要となっている。

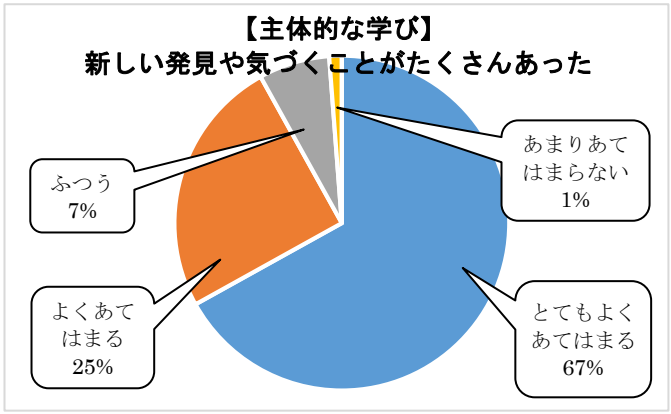
【主なアクティビティ】

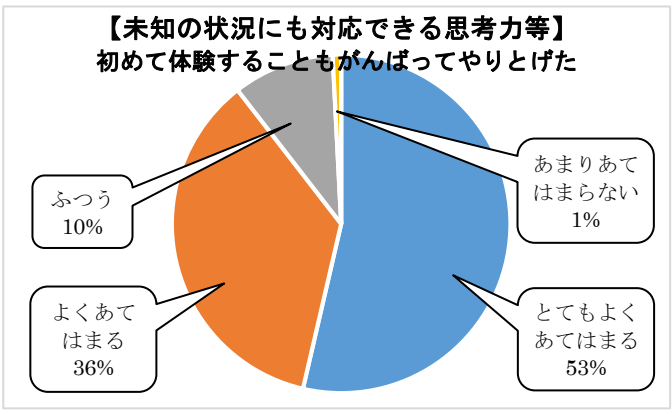
・各校の実践発表、学校間交流　　・コミュニケーション能力向上のための講義、ワークショップ
・コミュニケーショントレーニング　　・アクションプランの作成などのグループワーク　など

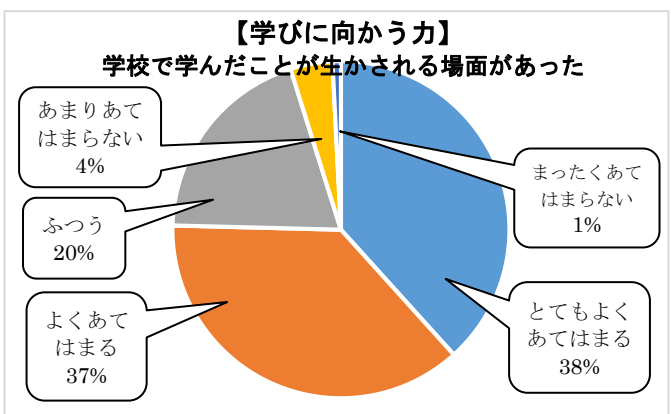
【アンケート結果】

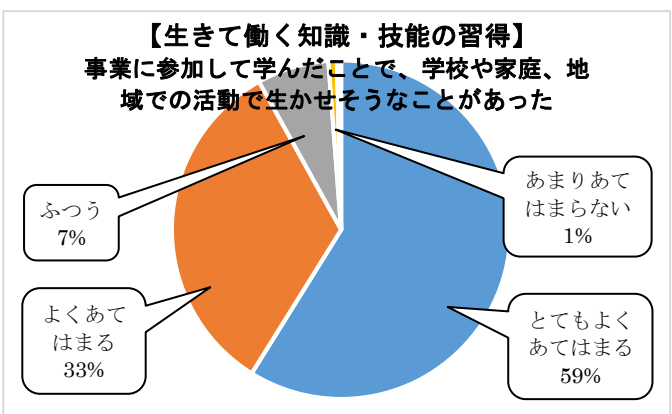












Ⅳ. プログラム開発の概要

プログラム開発テーマ①

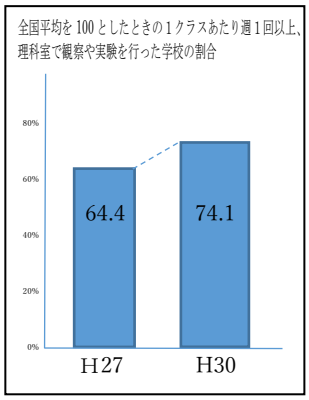
理科・科学的要素を取り入れた体験活動プログラム

１　テーマ設定の理由

子どもたちの「理科嫌い」や「理科離れ」は、各種調査においても大きな課題となっている。

本道では、理科の授業において、理科室で観察や実験を週１回以上行った学校の割合が増加しているものの依然全国平均を大きく下回っており、観察・実験を通じて課題を解決するような授業が十分に行われていない状況が見られる。

こうした中、平成 29 年に告示された学習指導要領においては、「理科の学習を効果的に行い、学習内容の深い理解を図るために、それぞれの地域にある博物館や科学学習センター・・・(中略)・・・などの施設や設備を活用することが考えられる」と示されており、社会教育施設においても科学的な内容を扱う体験活動プログラムを整備することは非常に有意義な取組と言える。



平成 27 年度、平成 30 年度
全国学力・学習状況調査
（文部科学省）

そこで、ネイパル深川では科学や自然に対する興味・関心を高め、科学的なものの見方や考え方を育み、科学的な資質・能力を身に付けさせるとともに、それらの知識や技能を実生活や社会で活用できる力を育成するため、観察・実験を重視した探究的な学習の充実が必要だと考え、本テーマを設定した。

２　調査研究の方法

本研究を進めるにあたっては、体験活動を推進するための資源を十分に備えるネイパルの特色を生かすため、主催事業として研究テーマに迫る授業を実施し、主に参加者の様子及び参加者アンケートの結果から開発プログラムの成果と課題（効果）を検証するものである。

３　事業の概要

実践事業名　「サイエンス教室」

（２）ねらい：科学や自然に対する興味・関心を高め、科学的なものの見方や考え方を育み、科学的な資質・能力を身に付けさせるとともに、それらの知識や技能を実生活や社会で活用できる力を育成する機会とする。

（３）重　点：①観察・実験を身近なものとして取り組むため、「光」をテーマにした。
②子どもたちの興味・関心を高めるため、「スライムづくり」等の遊びの要素を入れた。
③専門的な指導の充実を図るため、高等学校から外部講師を招いた。

（４）対　象：小学校４年生～６年生　30 名

（５）時　期：令和元年９月７日（土）～８日（日）　１泊２日

（６）プログラム：

日時	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
９／７（土）	★受付時間　12:30～12:50 ★開　会　式　13:00～13:30						受付	開会式	スライムづくり・仲間	観察・実験①「光の玉手箱」		自由入浴	夕食	観察・実験②「光で文字を描こう」		消灯
９／８（日）		朝食	点検	観察・実験③「光に関するおもちゃをつくろう」		閉会式	解散									

観察・実験①「光の玉手箱」

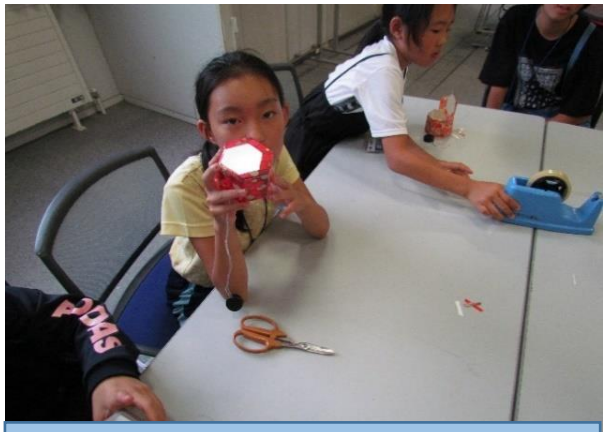
○ 講　　師：加藤識泰 氏（北海道旭川永嶺高等学校教諭）

○ 学習形態：縦割り班（概ね５人×６班）

○ 学習内容：光の足し算（加法混色）、光の分解

○ 活動の様子

講師の加藤氏による光の三原色の学習のあと参加者は、色の異なる複数の LED の点灯によって新たに作られる色を観察する装置（光の玉手箱）を作成し、「光の足し算（加法混色）」を体験した。さらにプリズムを使って太陽光を観察することによって、光が様々な色に分けられることを学んだ。



３色の LED をいろいろな組み合わせで点灯させてみよう！

プリズムを通して太陽の光を観察してみよう！

観察・実験②「光で文字を描こう」

○ 講　　師：ネイパル深川指導員

○ 学習形態：観察・実験①と同じ

○ 学習内容：光の軌跡

○ 活動の様子

参加者それぞれが懐中電灯を手に持ち、それを動かしたりオン・オフを切り替えたりすることで光の一連の動きを作り出し、それらをシャッター開放状態のカメラで撮影する実験を行った。

参加者は光の軌跡で文字を描くことができることを発見するとともに、この仕組みを利用して理科の教科書に掲載されている「天体の日周運動」の写真*が作られていることを学んだ。

*参考）「天体の日周運動」の写真

懐中電灯の光をカメラで撮影してみよう！

観察・実験③「光に関するおもちゃをつくろう」

○ 講　　師：ネイパル深川指導員・社会教育主事

○ 学習形態：観察・実験①と同じ

○ 学習内容：光源、光の分散

○ 活動の様子

「光るスライム」と「分光万華鏡」を作成して光の性質についての理解を深めるための実験を行った。

蓄光パウダーを入れたスライムを暗室で観察することにより、参加者は、自ら光を放つ物体「光源」がなければ物を見ることができないことを学んだ。また、「分光万華鏡（分光シートによる光スペクトルを利用して虹を観察する装置)」を使って、光の強さによって見える色が変化すること、不可視の光が存在することを学んだ。

蓄光パウダーを入れて「光るスライム」をつくろう！

分光シートを使って分光万華鏡をつくろう！

４　考察

アンケート結果よりどの実験も満足度が高く、プログラムの構成や難易度が参加者の実態に沿ったものであったことがわかった。

科学や自然に対する興味・関心（事業全体）	１００％
科学的なものの見方や考え方（実験①②）	９７％
科学的な資質・能力（実験①②）	９７％
知識や技能の活用（実験③）	１００％

実験①で光の合成や分解などの基本的な知識を学び、それらのことをすぐに実験③で利用したり、光の進み方や光の通り道といった小学校での既習事項をもとに実験②を行ったりするなど、知識や技能の活用ができる場を設定することで、主体的に学びを深めることができた。参加者からは、「光について知らなかったことを教えてもらえた。」「光の三原色について知ることができた。」などの声が聞かれ、科学的なものの見方や考え方の深まりも見られた。また、どの観察・実験においても「友達と教え合いながら楽しくできた。」「みんなで一緒に光の文字を完成させることができてよかった。」など、楽しみながら対話的に取り組む姿が多く見られた。さらに、講師の先生の専門的な指導により、参加者の満足度が高まったと考えられる。

５　まとめ

本事業の取組をとおして、科学に対する興味・関心を高め、獲得した知識・技能を実生活の様々な場面で活用できるようにしていき、主体的・対話的で深い学びを体験させる上で有効だと思われる視点を次のとおり列挙し、本プログラム開発のまとめとする。

①子どもたちの興味・関心を高める「楽しい観察・実験」

子どもたちの興味・関心を高めるための仕掛けとして「楽しさ」というものが重要である。さらに誰にでもできる、結果が見てすぐにわかる（難しい計算などを必要としない）などの「わかりやすさ」と「予想外の結果」というエッセンスが加わるとさらに望ましい。

②実生活の様々な場面で活用できる「身近なテーマ」

子どもたちが獲得した知識・技能を主体的に活用したいと思ったときにすぐ実行に移すことができるためには、その知識や技能が日常生活に根ざしたものである必要がある。また、身近なものであればあるほど、活用したいという思いを持ちやすくもなる。

③確かな知識・技能を身に付けるための「専門的な指導」

近年、小学校においても理科専科の教諭が配置されるケースが増えてきている。これは学校現場において、より専門的な知識・技能が求められているということである。そのため、専門的な指導ができる外部講師と連携を図っていくことが重要である。

プログラム開発テーマ②

「小１プロブレム」に対応するコミュニケーション能力の向上

１　テーマ設定の理由

近年、幼児期に忍耐力や協調性といった非認知的能力を身につけることが、その後の生活に大きな差を生むという研究成果が公表されるなど幼児教育の重要性への認識が高まっている。また、初等教育全体を見通しながら、教育課程に基づく教育活動を展開する中で、子どもたちに必要な資質・能力がバランスよく育まれるよう、幼小での円滑な接続や教科等横断的な学習が重視されている。

そうした中、北海道においても幼児教育と小学校との接続が十分であるとはいえない状況にあり、幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた取組を一層充実する必要がある。

このような背景を受け、今年度、ネイパル深川では、「小１プロブレム」に対応するコミュニケーション能力の向上をテーマとし、幼児期に親しんだ活動を取り入れながら、安心して小学校での生活をスタートするためのコミュニケーション能力の向上に資するプログラムのあり方を探ることとした。

２　調査研究の方法

本プログラムの企画にあたっては、「小１プロブレム」に対応するコミュニケーション能力は、主に活動の中で話したり、聞いたり、一緒に活動したりする他者との関わり合いで育成できると考えた。そのために幼稚園・保育所などの生活に近い活動や生活体験を意図的に設定することで、自信や意欲をもって活動し、自己肯定感が高まることをねらいとした。また、入学後に上級生として交流する機会の多い小学校５年生(新６年生)とペアでの活動を基本とし、出会いの喜びと楽しい活動によって安心感が生まれ、さらに精神的な自立のきっかけとなることを重点とした。

加えて、保護者に対しても子どもが成長する姿を見たり、保護者同士の情報交流をしたりすることが、小学校生活への理解と安心につながると考え、保護者プログラムを設定することとした。

３　事業の概要

実践事業名　「ちゃれんじきっず」

(１)ね ら い　様々な体験活動をとおして、意欲的に物事に取り組む姿勢やよりよい人間関係を作り上げる能力を育む機会とする。

(２)参加対象　幼児(年長)と小学校５年生

(３)日　　時　令和２年２月８日(土)～９日(日)

(４)場　　所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル深川

（5）プログラム

<table>
<tr><td>日時</td><td colspan="5">7　8　9　10　11　12</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td><td>20</td><td>21</td><td>22</td></tr>
<tr><td>２／８
（土）</td><td colspan="5">★小学生受付時間　12:30～13:00
★幼児受付時間　14:00～14:30
★開　会　式　14:30～15:00</td><td>受付</td><td>ちゃれんじたいむ</td><td>受付</td><td>開会式</td><td>交流たいむ</td><td>ネイパル探検</td><td>夕食</td><td>ベッドメイク</td><td>入浴</td><td colspan="2">消灯</td></tr>
<tr><td>２／９
（日）</td><td></td><td>つどい</td><td>朝食</td><td>片付け</td><td>思い出づくり
保護者交流会</td><td>閉会式</td><td>解散</td><td colspan="10"></td></tr>
</table>

（6）実施におけるポイント

①幼児の参加者に対しては、掲示用時計を用いて活動ごとに時刻を説明し、小学校生活に向けて時間を意識して活動するよう配慮した。また、各活動時間を十分に確保することで、最後まで自分でやり遂げることを大切にし、参加者の自己肯定感を高めるための手立てとした。

②５年生の参加者に対しては、「ちゃれんじたいむ」の中での幼児との関わり方や支援のポイントについて事前に指導し、見通しをもって事業に参加することができるよう配慮した。幼児とペアでの活動を設定することで、主体的にコミュニケーションを図ることができるようにした。

③保護者に対しては、「保護者交流会」として入学前に各家庭で心がけていることや心配なことなどを交流する場を設定し、子どもだけでなく保護者に対しても小学校生活への準備につながる機会とした。

（7）事業評価

①参加者の感想

○年長さんの笑顔を見ることができてよかった。

○ボランティアの気分になれて楽しかったので、中学生になったらボランティアをやってみたい。

○１年生になったら、またネイパルで多くの友だちと楽しみたい。

○みんなでお泊まりできて、自信がついた。

②保護者の感想

○初めて親元を離れての宿泊体験のため、時間を意識して活動したり、食事や入浴など自分の事は自分でやり遂げたりするなど、よい成長の機会となった。

○保護者同士で家庭での様子や入学に向けて不安なことなど情報交流することができて、有意義であった。

○５年生にとっても幼児の活動支援をとおして、低学年との関わり方について体験から理解することができた。６年生に向けての意欲が高まったと思う。

4　考察

本テーマについては、「コミュニケーション能力の向上」をめざしたものであるが、その土台となるのは、幼児が安心して活動したり、体験したりすることができる環境づくりであると考える。各プログラムにおいて、分かりやすく学びやすい環境を構成することで、子どもたちは楽しさを感じながら意欲的に取り組み、自己肯定感を高めることができた。そのことが、活動の中でともに「話す」「聞く」「読む」「書く」など、自ら他者との関わり合いを深化させることが明らかになった。

また、５年生の児童は、幼児と関わることで一人一人を大切にする気持ちが育つとともに、上級生としての自覚と責任が生まれたり、保護者は、子どもの成長する姿を見て学校生活への理解を深めたりするなど、本事業がメインターゲットとした幼児だけでなく、上級生やそこに関わる大人にとっても有意義な学びの場となり、全ての関係者が安心して育つ学びの環境構成に寄与するものとなった。

5　まとめ

入学時の子どもの学びや発達には個人差があり、それぞれの経験や幼児期の教育を踏まえたきめ細かい指導が求められる。そのためには小学校学習指導要領はもとより、幼児教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園保育要領を十分に理解するとともに、幼稚園・保育所等を訪問し教職員と意見交換するなど、子どもの発達の特性を把握することが重要である。

幼児期から児童期におけるコミュニケーション能力の向上のためには、友達と協力したり、自分の思いを伝えたり、話し合いをしたりするなど成長を促す様々な環境を意図的に設定することが効果的であり、これらは各ネイパルで展開されている体験活動のノウハウが生かされるものである。

今後も子どもたちの人間関係を構成する社会的スキルやコミュニケーション能力を育成するために、各ネイパルで展開している体験プログラムの改善・充実を図っていくとともに、圏域における学習拠点としての役割も充実させていくこととしたい。